

565
274



* 0033700000 *

0033700-000

565-274

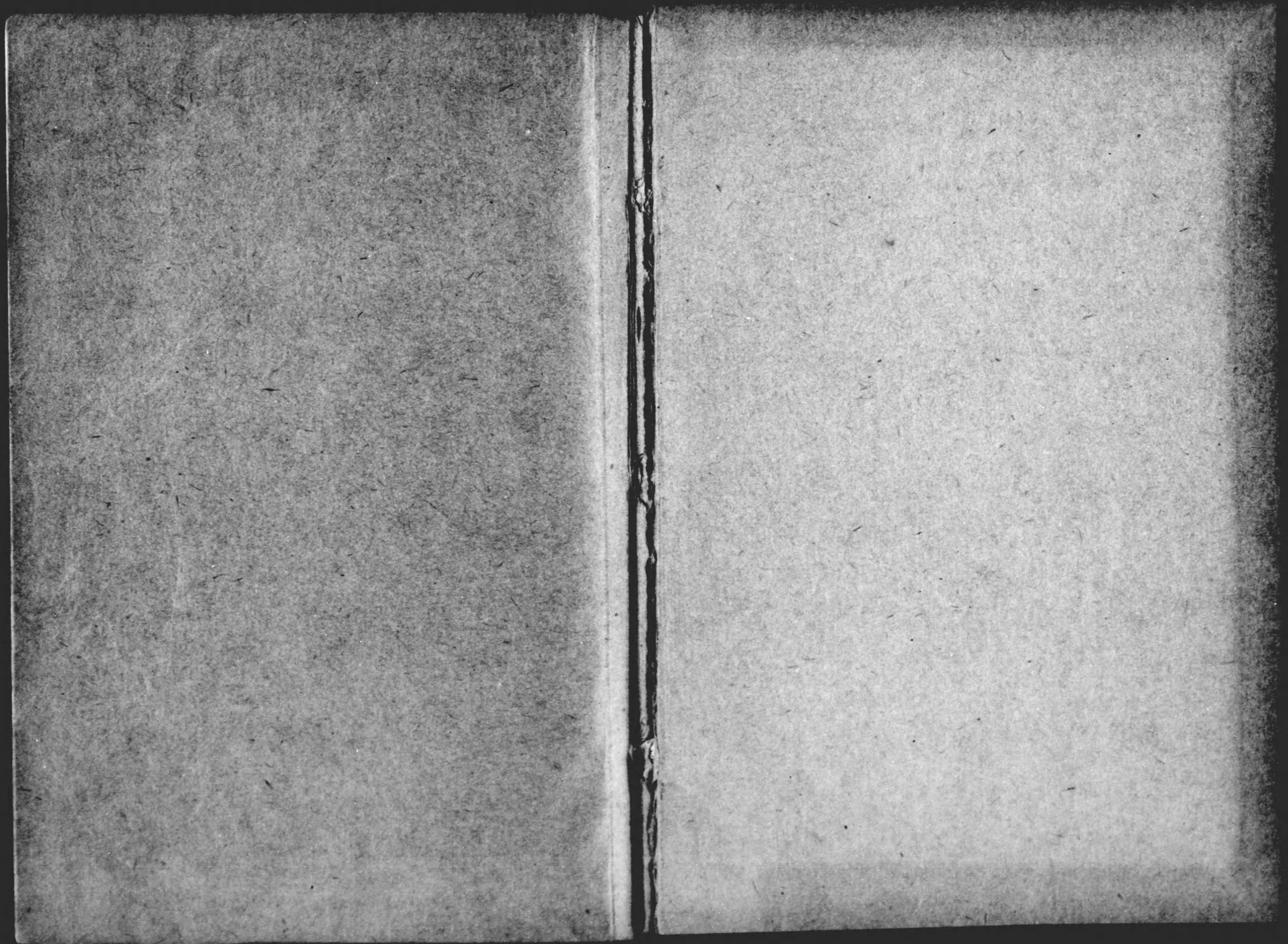
獵奇の社会相

赤神良讓・著

新潮社

昭和6

AGA

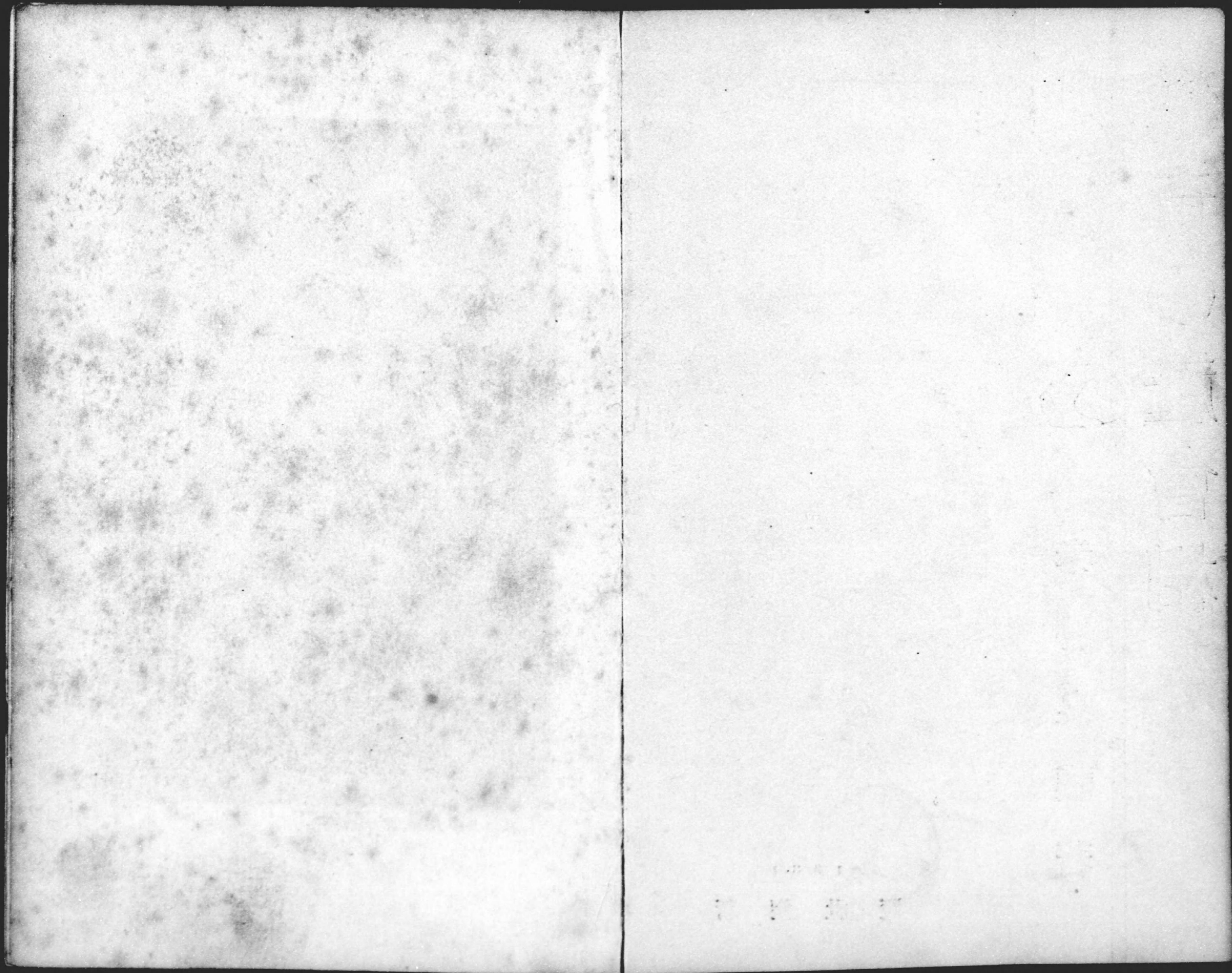


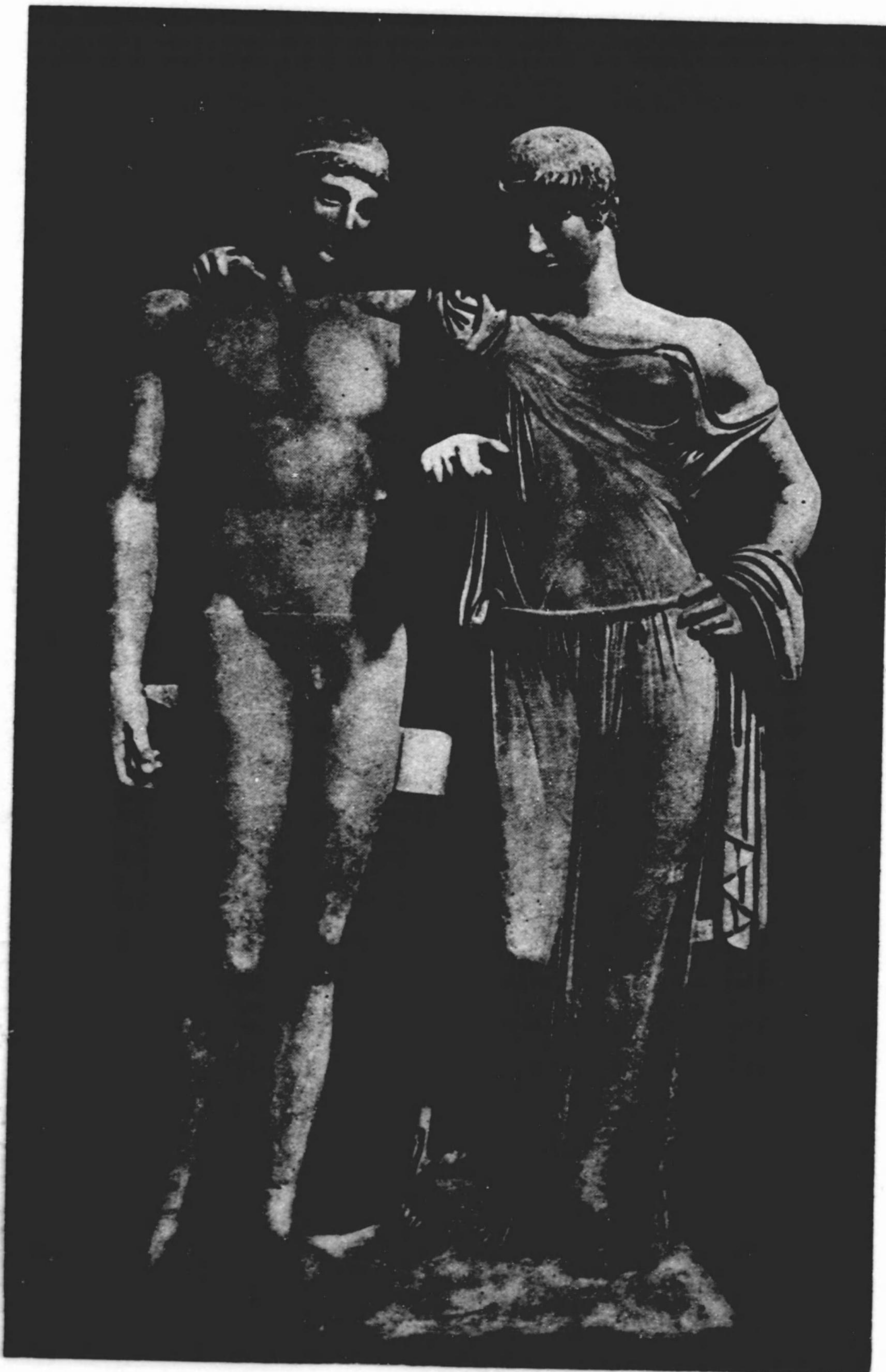
獵奇の社會相

赤神良讓著

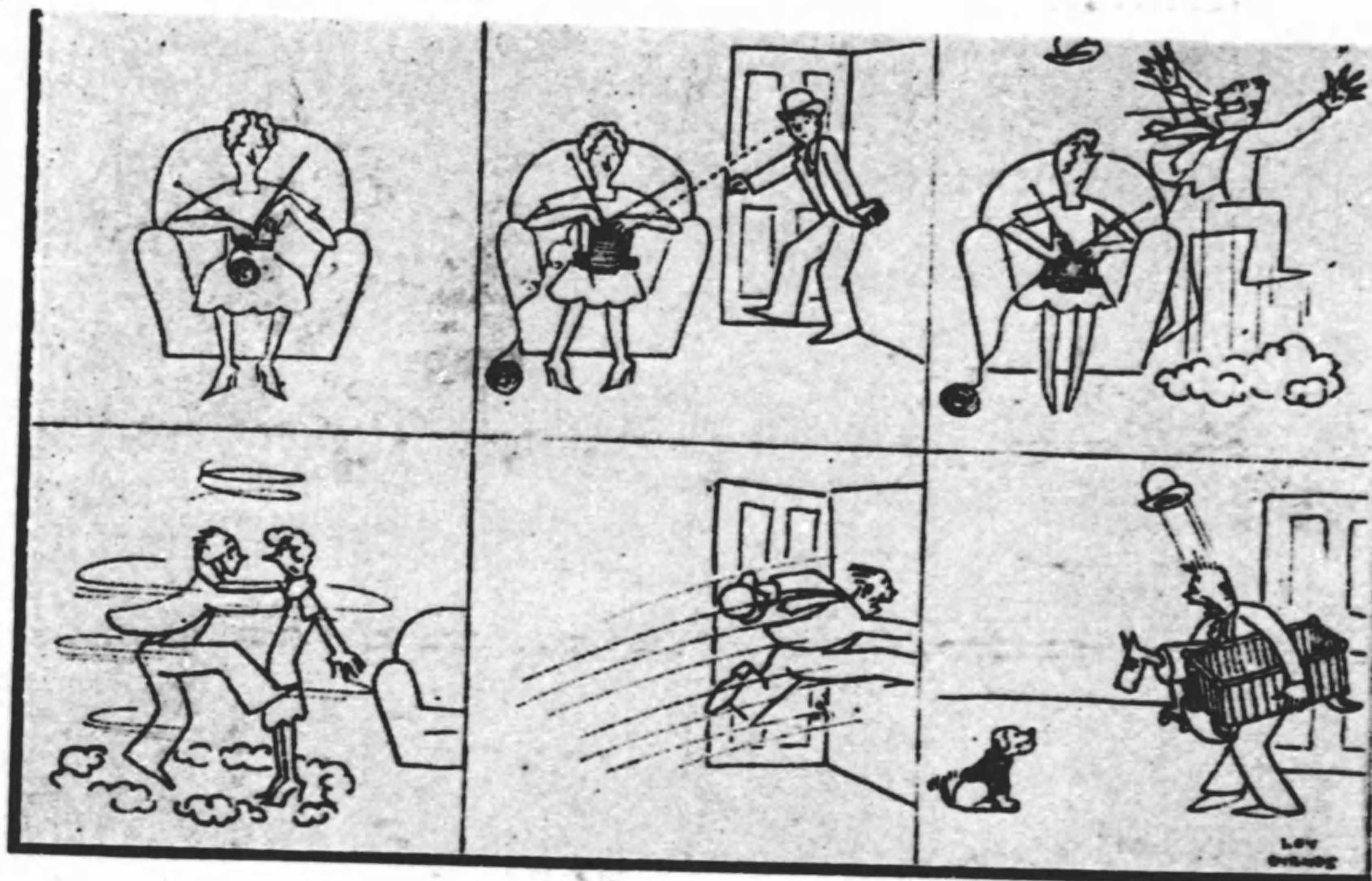


1931
新湖社版

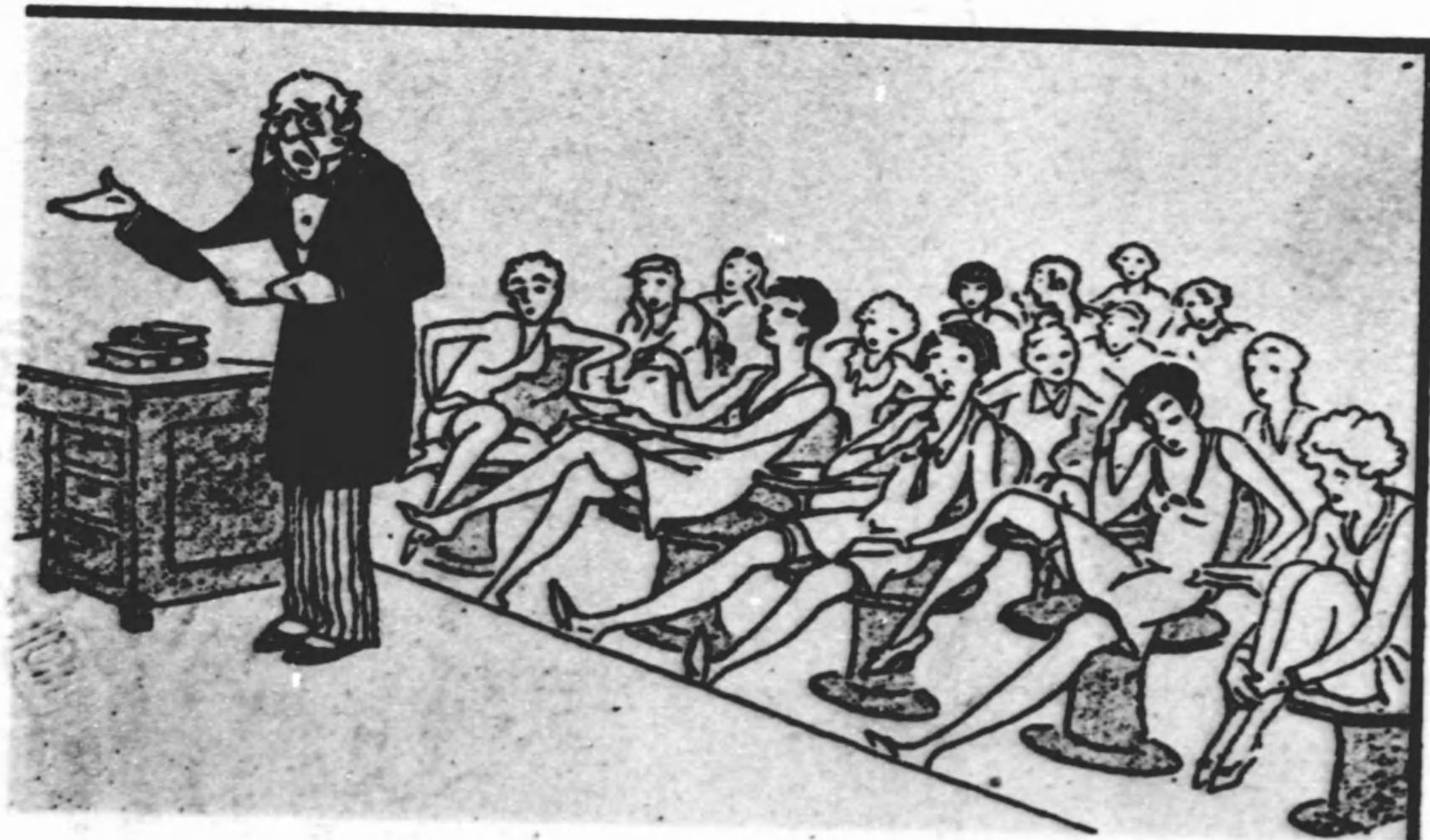




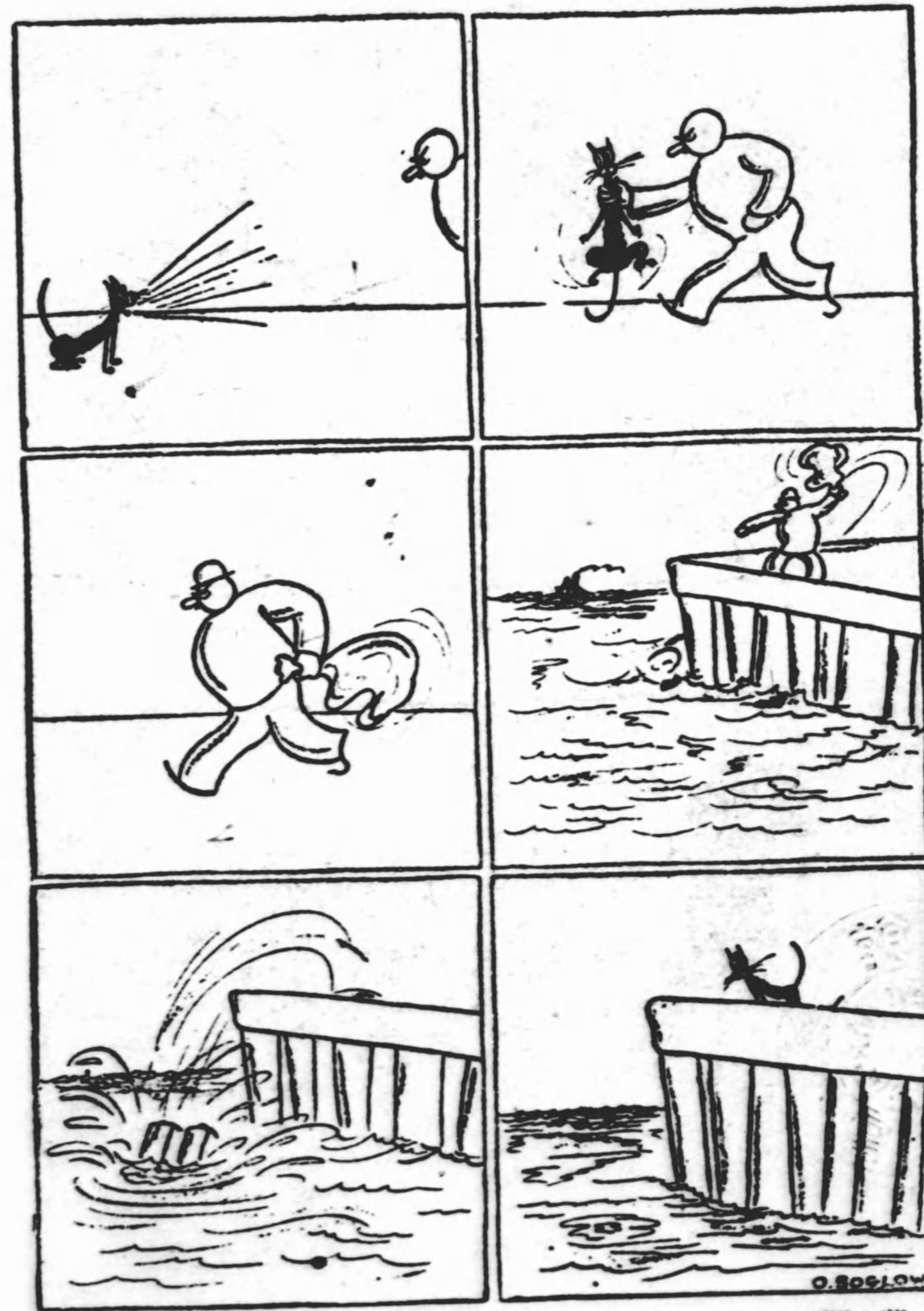
(學會社の敷) 渉交るよに指



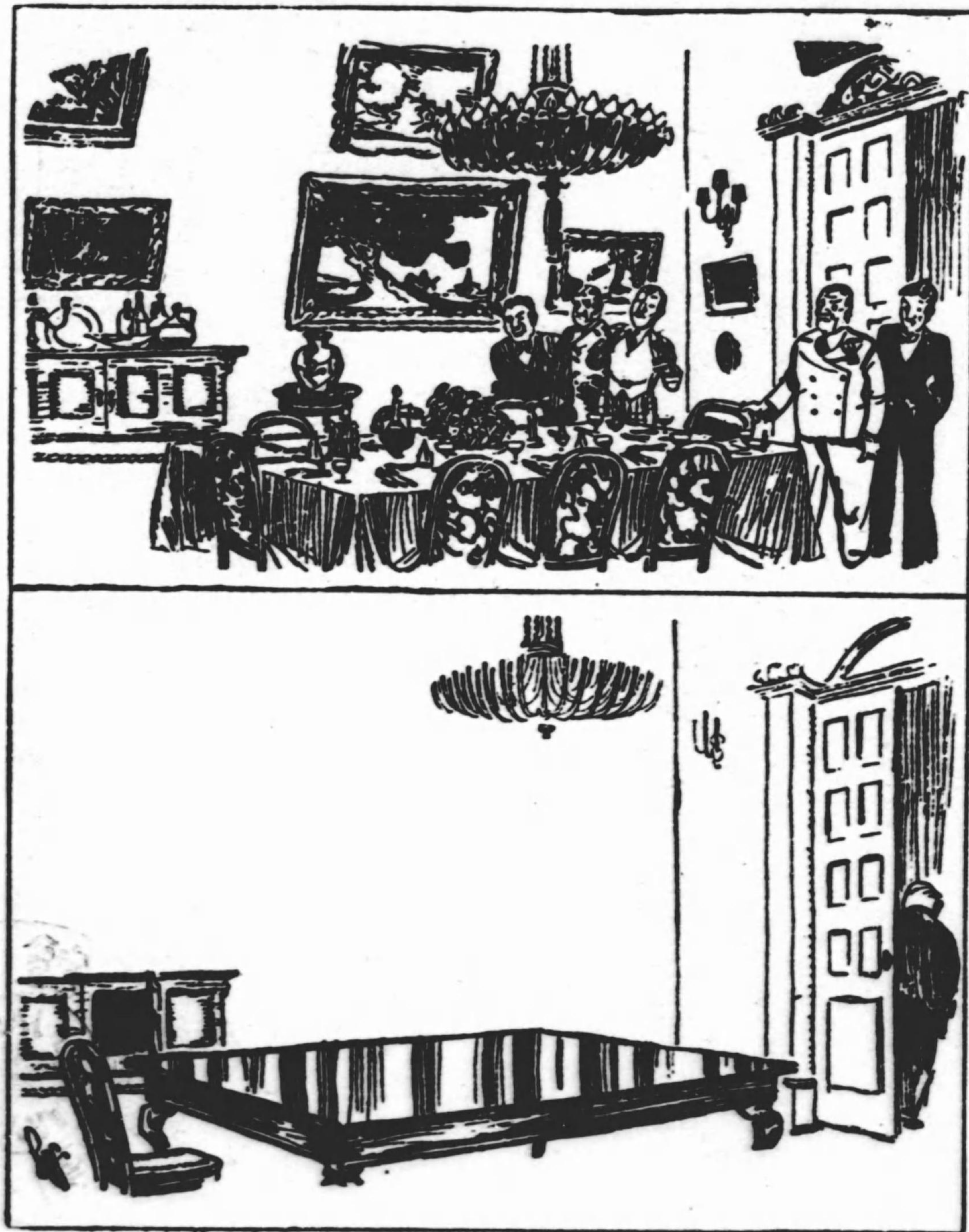
(學會社スンセンナ) 夫と犬



(學會社スンセンナ) 生學女と教授老



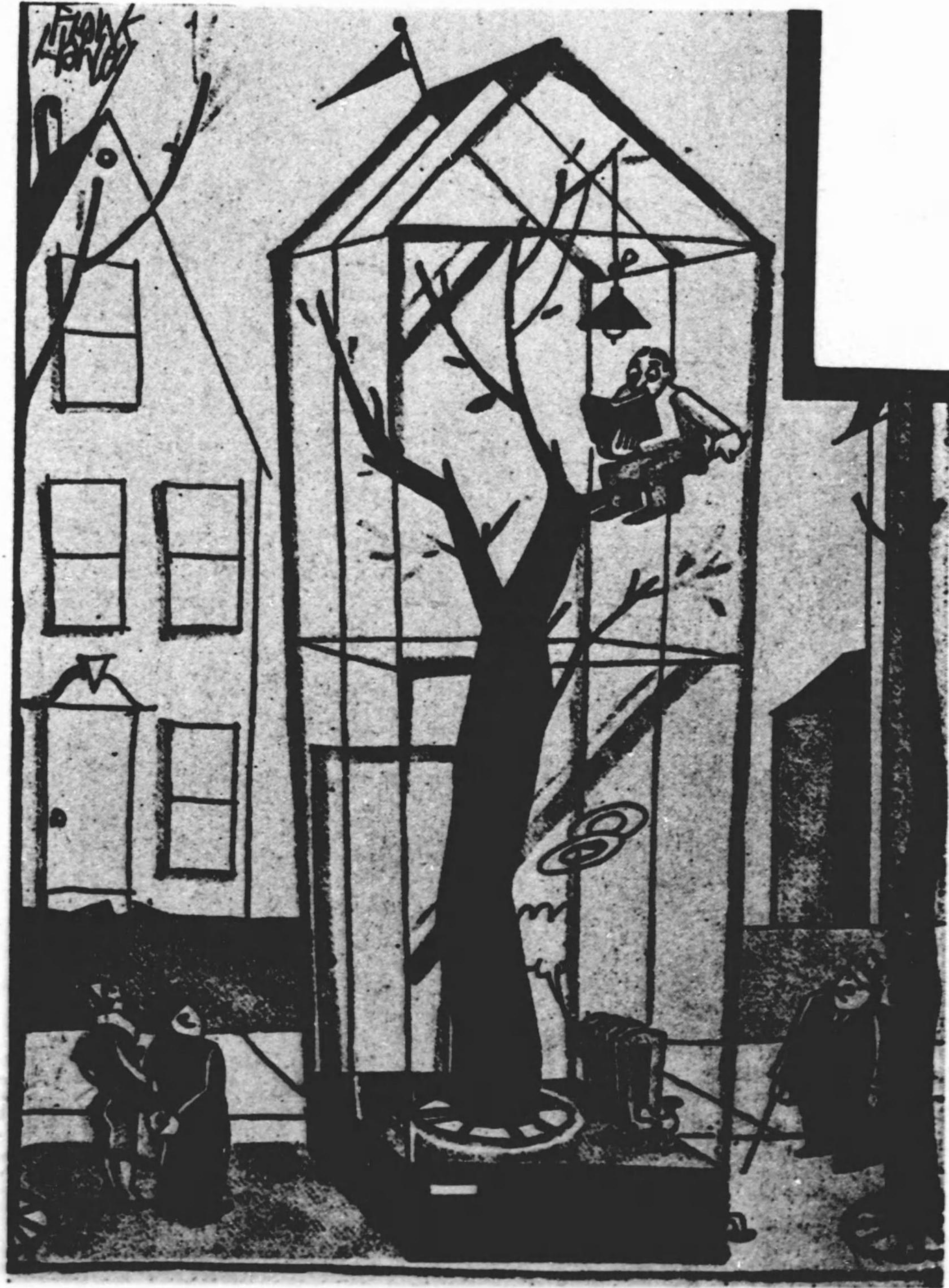
(學會社スンセンナ) ふ笑をスンセンナの人間猫



(狂黨代現) 會餐晩の中連狂集蒐きべる恐 (上)
 場會のとあたげ揚き引が同一 (下)



(墨鏡の集苦) 一ンメロー門の獄地



(理心の狂事殿久耐) 狂爭競久耐上樹



(狂業魂代現) ドイロフの者學析分神精



(心齋好の人代近)? 醫悪きべる恐? 醫名



(心齋好の人代近) 禮洗のクステログ



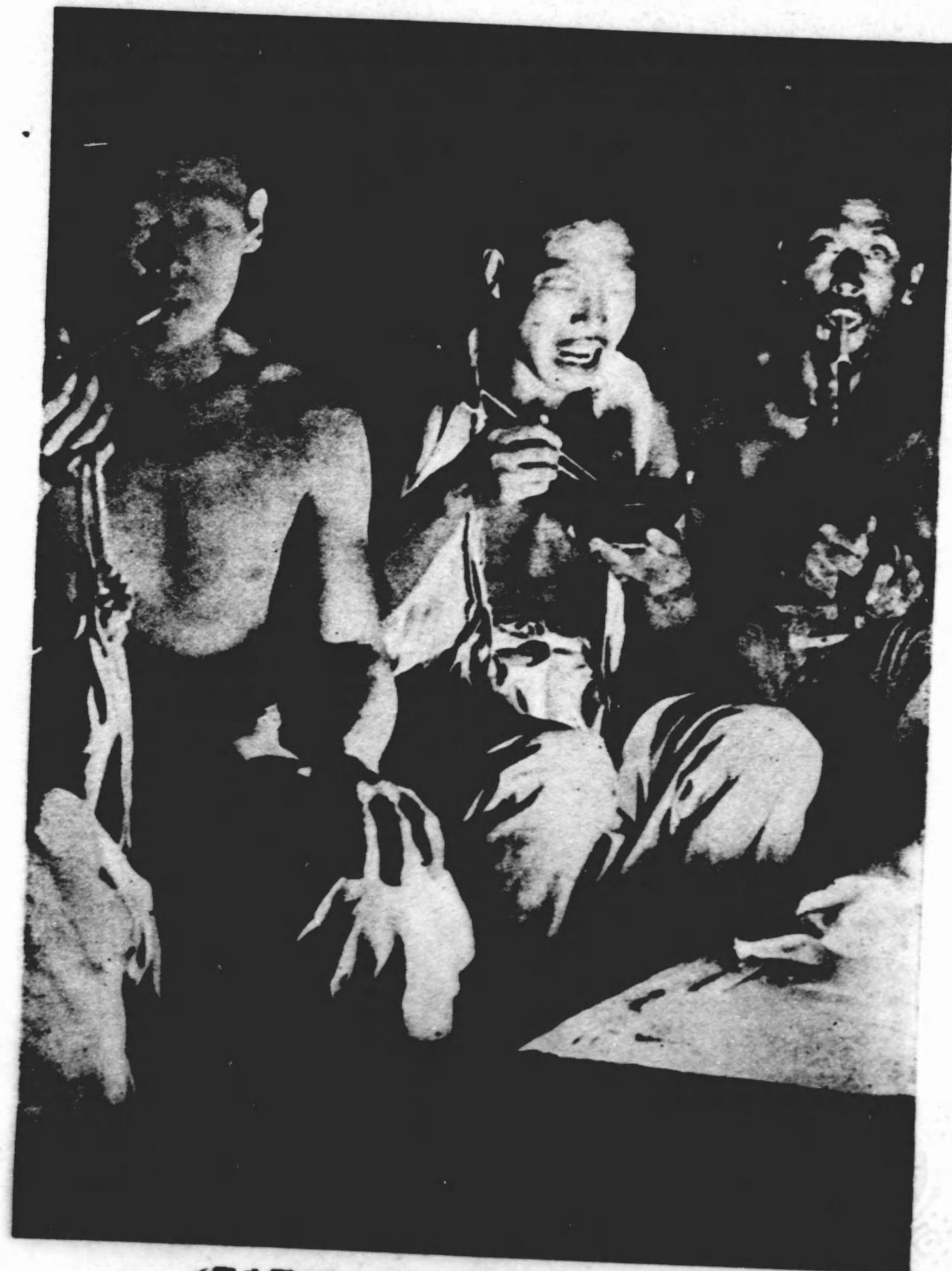
(墨江の活生脱刺) 惑魅の片阿



闘 鶏 (遊戯の學說)



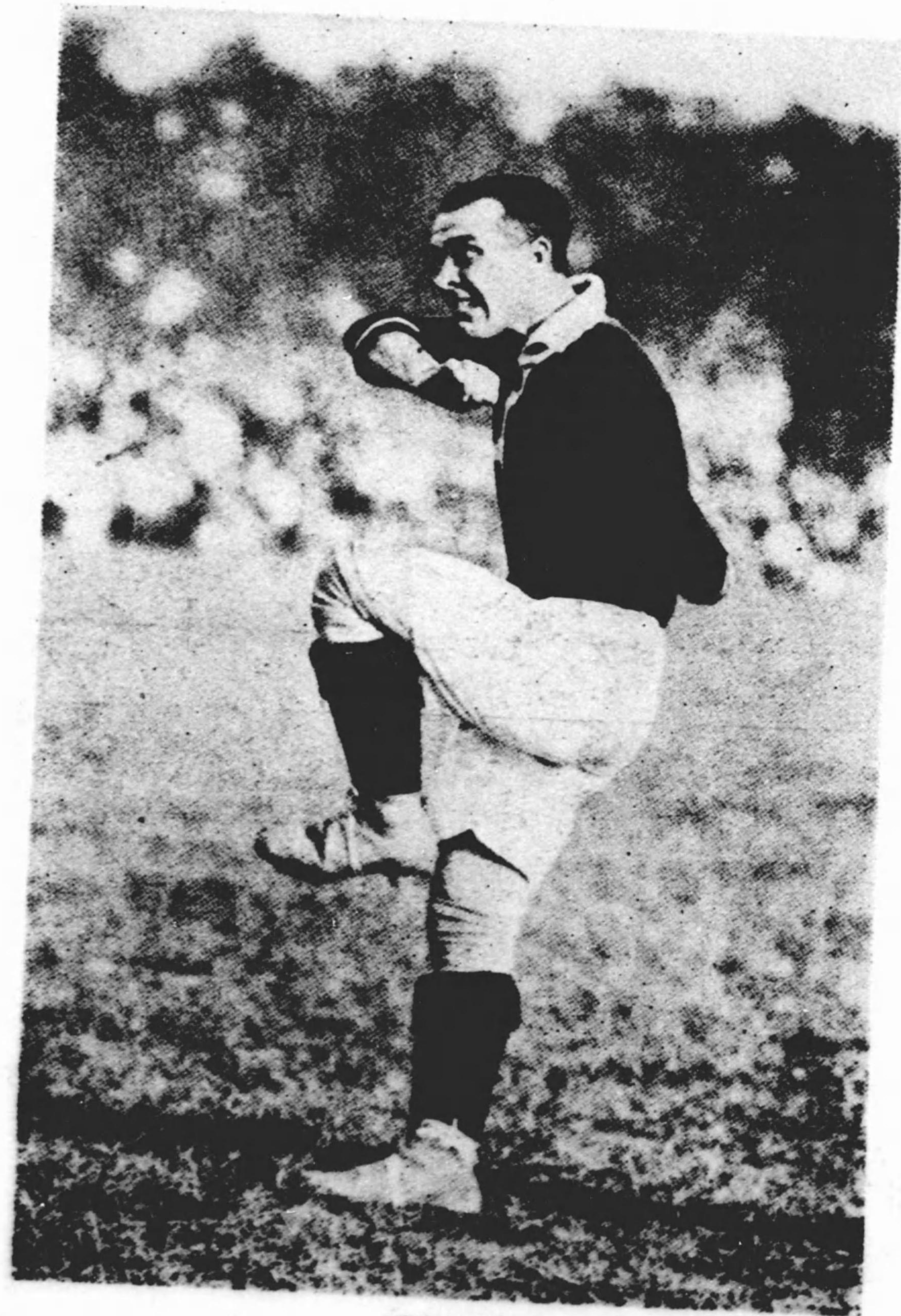
カセルル (遊戯の學說)



飯にいつりあてゐる力 (職人學生の) (似類ペン生學)



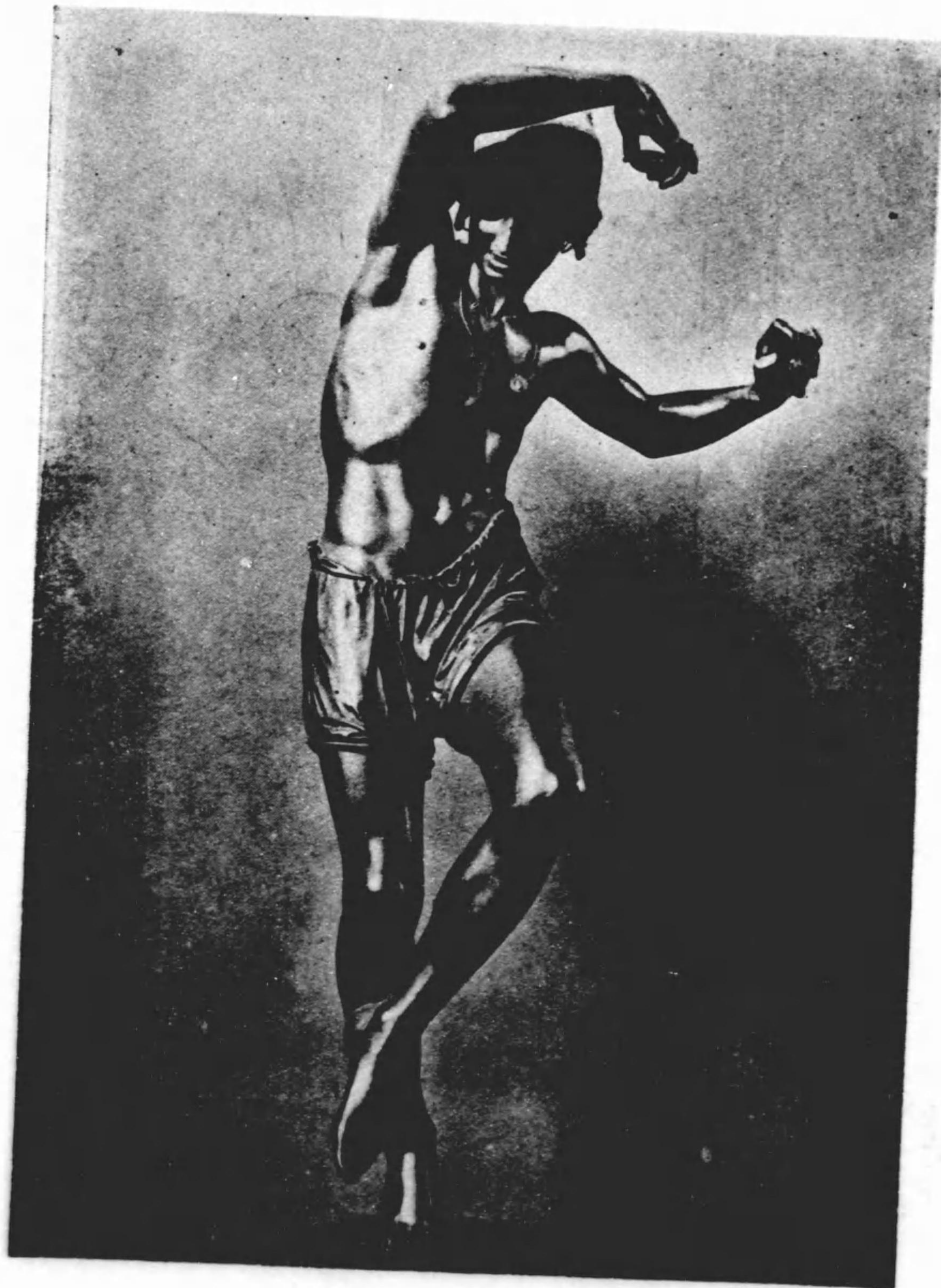
に治鍛を彼がにな
?かたせさ
(断診の行流)



(學智の體價貫突) 貌相の人貫突



(代時のアニマ・ツープス) (代時ツープス)



(種人いなら知をスندا) 踊る 踊



(學會社のンペル) 景風るみのンペル



(蘇主觀野るけ於にソダモ) ソダモは左・觀野は右

5-65-274

序

× 總ての現象を否定し、その實在を疑ひ廻つてゐた哲學者が、その懐疑の尖端に於いて、「我は思ふ、故に、我はある」(Cogito ergo sum)と、初めて自分の存在を發見して、驚き且つ歎んだことであらう。

× ヴィーゴは、哲學者共が、「自然界の科學」を熱心に求めてゐるのを、不思議がつて、人間界にも科學がある、「人間の科學・社會の科學」があると、その科學的考究の尖端に於いて、「新科學原理」(G. B. Vico, Principi di una scienza nuova, 1725)を著して、社會科學の鼻祖たるの名を專にせんとし、又專にして來た。



(學哲の笑)ミカとシリブツヤチ



(書類のムズーリナヤジ)書端るたれらて宛にシリブツヤチ

そこに人間の心の甚しき迂遠さが發見されると共に、それ自らに歸ることに於いて、尖端の哲學をば會得するであらう。

x

今、社會を見る、近代社會は當に癡奇の氾濫時代である。だから時代の最尖端を行くものは、癡奇の癡奇であり、癡奇現象の考察そのものでなければならぬ。

故に私は、ここに近代社會相の特性たる、この癡奇の現象をば、癡奇することによつて、一つは「モダン社會學」の研究に資し、一つは最尖端人の資格をば、把持せんとするものである。

昭和六年六月十五日

大磯清水山にて

著者

目次

刺戟生活の氾濫	一
モダンに於ける野蠻主義	一三
スポーツ・マニアの時代	三七
現代蒐集狂	三三
ナンセンスの社會學	三七
近代人の好奇心	三七
遊戯の學說	一〇四
數の社會學	一三九
エロ・メロの社會學	一四四

耐久競争狂の心理	一七
流行の診断	一六九
苦樂の變遷	一八一
ルンペンの社會學	一八九
擬似ルンペンの發生學	二〇一
笑の哲學	二二
実質價値の哲學	二三
ダンスを知らない人種	二三
ジャナリズムの類廢	二五九

口繪目次

青春時代	エログロの社會學	一
女蜘蛛の精	同	二
指による交渉	數の社會學	三
猫人間のナンセンスを笑ふ	ナンセンスの社會學	四
犬と夫	同	五
老教授と女學生	同	五
地獄の門—ロマン	苦樂の變遷	六
恐るべき蒐集狂連中の晩餐會	現代蒐集狂	七
精神分析學者のフロイド	同	八
樹上耐久競争狂	耐久競争狂の心理	九
阿片の魅惑	刺戟生活の犯濫	一〇

名醫? 恐るべき悪醫?	近代人の好奇心	二
グロテスクの洗禮	同	二
飯にありついてゐる苦力	類似ルンペンの發生學	三
同	遊戯の學說	三
カ ル セ ー ル	同	三
突 貫 人 の 相 貌	突貫價値の哲學	四
なにが彼を鍛冶にさせたか?	流行の診斷	五
踊 る 漁 婦	ダンスを知らない人種	六
スポーツ・ファン時代	スポーツ・マニア時代	七
右は野蠻 左はモダン	モダンに於ける野蠻主義	八
ルンペンのゐる風景	ルンペンの社會學	九
チャップリンとカミ	笑 の 哲學	二〇
チャップリンに宛てられたる端書	ジャナリズムの類案	二〇

獵奇の社會相

赤神良讓著



刺戟生活の氾濫

××1××

X

「生」きてゐるといふ感じの第一要素は、刺戟を感じるといふことである。だから人間がその「生」に執着すればする程、必ず次から次へとより強烈なる刺戟を求めて来るに違ひない。實際人間にとつては、全く刺戟のない状態に置かれる程、苦痛なものはない。名妓のなれのはてだといふモヒ中毒の患者が、市外大久保の西向天神に祈願を籠めながら盗んではモルヒネ注射の金を稼いでゐた。所が或日おでん屋の赤銅を盗み、それを古道具屋に賣拂つたので足がつき、捕へられて留置場に入れられた。その女が留置場の中で「どんなに處分でも受けますから、注射だけはさして下さい」と泣き續けてゐたさうである。生ける屍の如く、刺戟に對して全く感受性を失つて、そして生きてゐるといふことは、無氣味な、人間らしい苦痛以上の苦痛であるに違ひない。單調な刺戟のない獨房に二三年もゐる囚人は、多く發狂する、さもなければ極度の憂鬱症となり、或は自殺する、して見ると刺戟は確に生活の推進力である。そこで人々は、生きてゐるといふ感じを何とかして呼起す爲に、時としては苦痛をさへ求め出して來

二

るのである。

然るに刺戟と感覺との間には、ウェベル・フエヒネルの法則が介在してゐる。「感覺を算術級的に持續するには、刺戟を幾何級数的に増大せねばならぬ」といふ平凡だが然し誤りのない法則が、その支配權をば持つてゐる。だから同一の刺戟はすぐ平凡化され、飽和されて、その刺戟力をば失ふて了ふ。そこでより強烈な、より加速度的にその度合を強めて來る刺戟か、或は又更に新しい種類の刺戟かを、走馬燈の如く眩暈苦しく求めて來る。そこにモダンの基調があり、所謂高速時代の原理がある。だから又現代は慌しく、騒々しく、踴躍してゐる。ジャズに、チャールストンに、レビューに、その姿をば見出してゐる。彼等は熱狂し、泥酔し、耽溺する。

斯くして近代文化は變態となり、病態となつて、急調な漩渦の中に叫びをあげながら周章ふためいてゐる。そしてそこに又スポーツ・ファンの心理があり、ダンス流行の心理があり、漫談・ナンセンスの流行、射利射伴の心理がある。

X

ペブレンは、このスポーツマンの心理を説明して、それは人間性の一時的先祖降りであり、野蠻時代の教養への逆戻りである、そして一體貴族富豪並に無類漢を含む所の開散階級は、その心理発展の過程に於いて低級であり、掠奪的であると言つてゐる。成程、スポーツの形式は、多く古き戦術の型にその起原を發してゐるか、或は戦術の爲にするものにその起原を有してゐるかである。吾々は茲に野球を考へる、そしてそれは、昔、アメリカインディアンの部落が、その部落相互の間に盛に争闘を繰返した時代に、その起原を有してゐると言はれてゐる。一般に原始的な野蠻未開の人種にとつては、その戦術は、吃度、投石することであり、棍棒で擲倒し、殲倒することであつた。グビテに似たインディアンの若者が、濃然春風を切つて磔を飛ばせば、ガテのゴリアテ然たる七尺ゆたかの巨漢は、その棍棒を斜に構へて、飛び來る磔を要然と撥返すのであつた。そこに彼等の投石の練習と、それをば棍棒で撥返す所の手練とを積む必要に迫られてゐた。そしてそれは今日に遺傳されて、野球試合の形式をなし、神宮球場の真球となり、安打となり、或はカーブとなり、三塁打となり、ホームランとなつて、數萬のファンをして唸らせてゐる。斯く考へて見ると、そこに相撲があり、ラグビーがあり、ホッケーがあり、ゴルフが

ある。槍投げ、砲丸投げ、圓盤投げがある。そしてそれは投擲することによつて、敵の頭蓋骨を粉砕しようとした遺物である。擊劍があり、柔道があり、弓があり、マラソンがあり、競馬があり、射撃がある。

けれどもこの説明は、まだ何故にこの開散階級が、スポーツに熱狂するかを理由を、充分に説明するものではない。彼等には過剰してゐるエネルギーがある、だから彼等には強烈なる刺激を呼んで、酸化しようとするいらだゝしさがある。そしてスポーツはその過程に於いて多くの不安を持つてゐる、だから又豫想しがたき變化性と新し味とを持つてゐる。その手段に於いて、彼等は「擲る」「蹴る」「打つ」「投げる」といふ、心の弾猛さに對する慰安を持つてゐる。恰も漫畫の持つ快感が、打たれるといふことから、そして蹴られるといふことからやつて來た様に、「親爺教育」の痛快性は、何時もマギーの臂力に發生し、彼女の手にする麵棒から飛散する。そして若しその畫面から、ジグスの瘤が取去られ、顔に貼られてゐる十字の絆創膏が剝取られ、目の周圍から紫色の打身傷が消し去られるならば、それは最早や近代人から、何等の咲笑を買ふに値しない。喜劇、道化芝居、茶番狂言、それ等は打たれ、張倒されることに、そ

の可笑性を抱いてゐる。「殴られる彼奴」のチエニーが打たれれば打たれる程、蹴飛ばされれば蹴飛ばされる程、観客は可笑の泡を、癲癇病者の様に噴き出して来る。

畢竟するに人間には、打ちのめしたい、蹴倒したいといふ、フロイド式の潜在意識が多分にあるからであらう。近時の流行探偵小説の持つ被愛讀性も、亦その不安と残忍性の伴ふ強烈なる刺戟によるものであり、江戸子のチャンといふなり走り出してゐるといふ火事の持つ魅力も、亦その不安と残忍性にあるのである。現代人は遂に急坂のカーブを描いて、そのより強き刺戟を喘ぎながら追掛けてゐる。

x

羅馬の末期、煽動政治家共は民衆の暴力を借りて、その政權を壟斷した。そこで民衆はその政府に向つて労働權を要求した。若し労働者がその職を求めて政府がそれを與へることが出来ないならば、政府はそれを賠償する義務があると、政府はそれを彼等に賠償した。

けれども彼等は隨を得ては罰を望まざるを得ない、彼等は働くことなくして充分なる食を得

た。そこに過剰せるエネルギーのやり所に苦しまねばならない。彼等は「人はパンのみにて生きる能はず、吾等に娛樂を與へよ」と、その娛樂權の要求によつて、その過剰せるエネルギーを發散しようとした。そこで政府は彼等の爲に公設浴場を建築した、肉を與へ、酒を與へ、女奴隷を與へた。彼等は肉を食つて湯に浸り、酒を飲んではその女奴隷に戯れたのであつた。では彼等にとつてそれは樂園であつたのか？ いや、彼等は進んで自分の胃腑の狭小であることに、多大の不平を感じ出して來た。けれども亦彼等は嘔吐術を發明した、嘔吐しては再びその胃腑に詰込むのであつた。斯くして彼等は殆ど總ての刺戟に慢性となつて了つた。彼等の或者は遂には生きてゐることさへ本當に厭はしくなつて來た、酒を飲み風呂に入つて、手頭の動脈を切り、その出血による睡魔の私語の中に、死の快感を堪能しようとした。

又彼等の或者は、奴隷と獅子とを闘はし、奴隷の頭蓋骨が獅子の一撃によつて粉々にされ、腦漿が四散するのに興奮し、大腿骨のモリモリと嘯碎かれる音に喝采した。實際、彼等の神經系は、斯くの如くに悪化されたる不安と残忍性によつてのみその刺戟を感じ得るまでに、あらゆる刺戟に中毒し、痲痺して了ひ、爲にいらだつてやり所に窮してゐる過剰エネルギーに、

惱まされねばならなくなつてゐた。だから又暴帝ネロは、剛壯なる快感をば食らんが爲に、火を羅馬百萬の全市に放つて、それを焼拂ふといふが如き壯舉にさへ出たのであつた。それ故に吾々は又東洋の富を掠奪して、一時世界の黄金をマドリットに集中した西班牙人が、彼の闘牛に熱狂し、投げ出さるる人馬、刺さるる牛、ドス黒く砂上を彩る血に、快哉を叫ぶ心理と、飽くことなき搾取に肥満してゐる露西亞の貴族が農奴を虐使し、はては動物と××せしめて、それを見物となし、單なる好奇心より打殺し焼殺したといふ心理と、近代人がスポーツに淫蕩し行く心理との間に、また相似通ふ一條の氣脈を發見することが出来るのである。

* 拙著「反對表現の思想」第九章「思想問題を裂く」一一六—七頁。

x

近代人、殊にその都會人は、餘りに強き刺戟によつて圍繞されてゐる。だから又彼等はその刺戟のより強きものをば追掛け廻さねばならない。サラリーマン・學生・小僧・労働者、彼等はその通勤・通學・用途の途上に於いて、ロダンの彫刻に似たる太き足の肉感に悩み、薄物着

たる網縷者の腰部に、その視線を春づかせねばならない。然るに彼等の事務室は如何に殺風景であり、彼等の學校は修道院の如く、又その工場は牢獄の如く、單調の灰色にばやけてゐる。而も彼等の仕事は近代資本主義の寵兒である「分業といふ奴」によつて全く無趣味のものとなつて了つてゐる。彼等の或者は、終日一つの印をべたくと押して行き、或者は一つの穴を一日掘續けてゐる、又學生の或者は終日一本の試験管を捻くり廻し、或者は三ヶ年間一冊の六法全書に没頭して暮さねばならない。彼等はその歸途に於いて又何物かを見るであらう。カフェエの店頭に於いて、横町に於いて又何物かを見るであらう、ペーより流れ出づるメロデーに、川岸の鈴懸の木蔭に於ける私語に、情波のリズムを攪亂されるであらう。けれども彼等はその家に歸つて、榮華不良に黄ばんでゐる女房の顔を、飽かず眺めねばならない、下宿屋のお上の低いだゞ廣い鼻に、相變らずの敬意を表さねばならない。

山地であるウエルス馬より、ペイプされたる平々坦々砥の如き道をば走る倫敦の馬が、より短命であるが如く、近代人はその分業に依つてより短命にされてゐる。彼等はその能力の一部分を餘りに虐使する、けれども他の多くの部分は全然それを使用してゐない。

そこに鬱結し、過剰してゐるエネルギーがある。だから彼等は絶えずエキサイトしようとしてゐる、道を大呼して走る者がある時には、彼等は彌次馬となつて、その後を追ふて反射運動的に走り行くであらう。溝川の液漉機に、小犬の喧嘩に、自動車の衝突に、電車の脱線に、ベシキ屋の看板書きに、彼等は如何に多忙の時であつても、その一時をばさかすにはゐない。況んや熱球を要飛ばす野球に於いて、憂然砂煙をたて、汗馬を飛ばす競馬に於いて、又その他のありとあらゆるスポーツに於いて、彼等はプレミアム附の切符さへ、少しも意とするに足らない心のじれつたさを持つてゐる。前日の夜からつめかけ、二三日前から會社をば缺動するもどかしさを持つてゐる。まして爲すこともなく、多量の栄養分を食食してゐるブル階級は、絹のワイシャツを着て日比谷原頭で草を刈り、北海道に熊を狩り、南洋に鯨、マレーに虎を狩り出さねばならなくなる。だから新しきトルコは、法律を以て、彼等に道路修繕の爲めにする強制労働を課して、以てその過剰エネルギーを發散せしめようとする、さもなければ彼等は、遂にネロの如く夜陰に乗じて、××××ち兼ねないであらう。

x

新しきものは、未知数の刺戟をもつてゐる。そして未知数の刺戟はより強烈である、だから近代人は新しき物、新しき物へと高速度に跳ね廻つて行く。トーキーが来る、彼等は無條件にトーキーを迎へねばならない、「古い」といふことは近代人にとつて、洵に致命傷其ものであるからである。彼等はアメリカ人の臺詞が理解出来やうが出来まいが、それは問題ではない。如何にもそれを理解し得るかの様に見せかけ、活辯の「古さ」を罵倒して、新人としての地歩を、如何にして確保するかが問題である。私がパリに着いた次の日に、私の友人が私を佛蘭西座に連れて行つた、私の友人はパリに住んでから八九年になるであらう、佛蘭西婦人と結婚して、その間に二人の子供を持つてゐる。けれども満場の佛蘭西人が笑ひこけてゐる中に、彼だけは呆然として決して笑はない、勿論私も笑はない。彼はその奥さんの肘を引いて、何を笑つたかの説明を求めて、そして笑ふ。更に彼はその駄洒落を私に翻譯する、そして私は笑ふ、笑ひの三段返しである。

然し我國に於ける新人は、どうしてその笑ひを笑ふであらうか、活動寫眞館は宜しくこの新人の名譽の爲めに、古き芝居の制度であつた「拍手する人」を常置する必要がある、そしてそのクラッパーの拍手によつて拍手し、笑ひによつて笑ひ、涙によつて涙を流す、といふトキの新しい見方が始められねばならぬことであらう。恰も渡米した實業團の人々がその案内役であつた神田男爵をば事々に真似て、男爵が水を飲むならば彼等も飲み、笑ふならば彼等も笑ひ、便所に立つならば吾も吾も便所に押掛けて、米人を驚倒せしめたといふが如き、滑稽味がよしあらうとも、新しきものでそれがあつた以上、近代人は必ずそれに向つて走らねばならぬ。

近時のダンス流行も亦その例に洩れるものではない、それは三分交代制により、或は五分交代制によつて、胸から胸へと刹那々々はその強き性的刺戟を貪り得るからであらう。従つてそれは一方全く職業的に考へられ、そして他方それは享樂的に考へられてゐる。而もその流行の一大要因として、吾々は又その安値性を閉却してはならない。藝妓待合の憔悴、女給・カフェーの跋扈、又その原因を吾々は、それより類推するに難くはない。

緊張は必ずその次のリズムに於いて、弛緩を伴ふて来る。そして弛緩してゐる心にとつては、手輕であり安値であるといふことが、その第一要件でなければならぬ。だから近代人の心理は、一方強烈なる刺戟を求めると同時に、他方微温なる安逸さと容易さを求めてゐる。そしてそれは明かに心理現象に於ける辨證論に外ならない。だから又漫談・ナンセンスの流行する社會相は、火酒に次いで求められるブレンソーダの味と、その心理的リズムを同じくし、深き思索の勞を俟たずして、ウイトに觸れる輕き口づけの快味に、その流行の原因を持つものでなければならぬ。

更に吾々は、この近代的なる安値性を經濟的に見る。そこに、バット(煙草)の賣行があり、品切れがある。一幕十錢芝居の提唱があり、労働者に、夏期の休暇を與へようといふ主張がある。ふたよび吾々が進んで考へるならば、そこに、投機經濟・一六經濟の流行を超えて、儀式經濟の流行があり、彼等はいつまでも、一錢銅貨を賽銭箱に投入むことによつて、あらゆる幸福を求め、本氣になつて、そのペラ棒の利廻りを求めてゐる。彼等の心臓は、もはや疲れてゐる、續けさまにカンフル注射をするか、さもなければ、靜かに寺の和尚に呼びかけて置く必要

野蠻主義の発展

モダンJ.S.

■

モダンに於ける野蠻主義

× × 2 × ×

X

率直にいふならばモダンは野蠻である。素敵なるモダンの感じを、吾々近代人は、きつと猛烈なる野蠻主義の中に發見するに相違ない。だから又モダンの尖端を行くものは、野蠻の姿であり、そしてその野蠻の姿は、そのまゝ辨證法的に反對物たるモダンに鋭く逆轉して、打倒的なる驚異と魅惑とを、吾々の中に投込んで来る。

肉厚く赤く練紅にて染められたる生々しきモガの唇は、野牛の生血を啜る生蕃娘の唇を、その潜在意識の衷に於いて聯想せしめ、血のインジョーイに對する本能をば、いやが上にも攪亂して、近代人の焦心をば煽動せしめんとするものである。だから近代人は、その糜爛色の唇よりモダンの強き閃めきを認識すると同時に、その野蠻を享樂する者である。それ故に又近代人彼等は、黒塗の盆に飾の「トロ身」を二つ載せたが如き黒奴の、あの偉大なる唇に——その唇をちつと見詰め、強度なる吸盤の如き原始的力を豫想して、その野蠻の力に——強き淫惑をば感ぜしめられて來るのである。

冬枯れて、鈴懸の實の灰色空に揺れ、朽葉のカラ／＼と吹き立てられてゐるセーヌの河畔を、毛皮の外套にてその身を包み、三萬法の毛皮のシヨールに、その小さき眞白き顔を埋め、儼然なる容貌、魁偉なる體軀の黒奴を、そのステッキ・ポリーとして誇り麗に縫り行く、超モダンの婦人を見るならば、吾々はその背景として東亞弗利加の密林を、幻に描き出さねばならない。然るにそれは白晝の巴里であり、遠くにアンパリードのエフィエ塔を見るのである。全くそれは私にとつて、驚倒に値する光景でなければならなかつた。

「何だ？」と私は思はず叫びをあげて、そして〇を顧み「ロケエションか知ら……？」と問ひ足した。〇は「何のロケエションか……？」と目で笑つて答へない。私は「……「オセロ」ぢやないか、將軍の娘が黒奴と戀に墮ちた、シエクスピアーの劇ぢやないか……？」と更に附けたすと、〇は噴出した。「オセロか、ハ……、オセロか、成程ね、それにしちやカメラ・マンがゐないぜ、……何に、唯の「黒ちゃん」だよ、あの黒い天鵝絨の様に滑かな脂ばんでゐる肌、あの犖犖な顔、そして無智の幸福に輝いてゐる眼、白人種や黄色人種が理智的に發達する爲に、その内體を惜氣もなく犠牲にし、磨けて來たのに、あの黒奴達は、膾炙を犠牲にして、その内體の發

達にのみ専心して来たから、見ろ、あの肩、盛上つてゐる、歴史的な抱擁力、そこにモダンの婦人にとつて、堪へ切れない魅惑がある、畢竟するに現代はババリスムの復活である、今に、それが君にも解つて来るだらうよ」とOは、自分にそれが解り切つてゐるかの様に、一人で點頭いた。

それから私は、屢々この黒いステッキ・ポイを携へてゐる婦人共に出會ふことによつて、そしてその度が重ねられるに従つて、そのモダンの鋭角味を、臆氣ながら理解することが出来る様な氣がし出して来た。そして遂に、何時とはなしに、私はその「黒奴の美學」に、共鳴し得る一脈の心理をば、自ら培つて来たのであつた。比較宗教學をやつてゐる男の話によると、白人が長く黒奴の村に共に住居してゐると、遂にはその剝けて白茶けた様な、白色の皮膚におくれを感じ、氣恥しくなつて来るさうである。そして黒奴の宗教思想に現はれてゐる悪魔や惡神は、どれもこれも白奴であるのに、美の神、善の神、福の神、武の神、それ等は總て漆黒の色に光つてゐるさうである。屢々出會ふ「黒ちゃん」に注意を拂ひ出した私は、考へてゐる中に、本當の美は決して白色ではなくつて、寧ろ黒色であるかの様に觀念されて来た。某といふ女歌

人が「美男におはす」と鎌倉の大佛をば褒めあげたのも、その光澤ある黒色の魅力を大膽に表現した點に於いてモダンであり、又その點に於いてのみ、モダンの心に共鳴の波を傳へ得るものである。

x

だから今や、審美の世界に於いて、黒人の時代がやつて来た。亞弗利加美學の時代がやつて来た。そして彼のフォン・ボウが、ブルッセルの美術館に於いて残したる黒奴の彫刻に再評價を試みられねばならなくなつて来た。

健康色の極致として黒色の肌が、モダンの人々を憐殺し出し、新しく野蠻の勝利が開始されて来た。そして白き顔料は橙色となり、現に紫色の顔料へと變化しつゝある。巴里のモガはそのコンパクトを開いて、目の端から頬にかけて、如何に近代人としての惱ましさをば、その紫色によつて表現せしめてゐるか、そして又吾々の心理は、既にそれからモダンの感じを、充分漁り得るまでになつて来た。今、その急調の變化から推すならば、やがては應用化學の研

究者によつて「黒いお白粉」否「お黒粉」が發明され、紫外線の應用による黒化用美顔器が創製されて、新聞紙はその誇大の廣告を以て、一面をば埋めて來ることであらう。

會ては吾々の間に、絶世の美人であつたと云はれてゐるクレオパトラの色が、問題とされて來た。「白い、大理石の如く、白玉の如く白い」と主張する者があれば、「黒い、現代の埃及人の様に栗色であつたに相違ない。美人即ち白いと考へるのは、それは現代人、いや、白人崇拜熱からやつて來た誤れるイデオロギーである、大きな目、その上下の目縁の濃く黒ずんだマロン色、美しい銀箭の如き秋波、美はそこにあつた。蓋世の英雄をして没落せしめた美貌、それは斷じて白ではなかつた。現に、世界に於ける享樂の都、それは最早や巴里でもなければ、又ニス、モンテカルロでもない、それはニール河によつて口づけられ、千古の椰子林によつて抱きしめられてゐるカイロである。世界の各地から、近代的享樂をそこに求めて、年々數十萬の最もモダンなる人々が、娯樂し來ることを考へるならば、白き美人は、最早や黒き美人の敵ではあり得ない、といふ主張が絶対に勝を制さねばならない、だから眞のモダンは黒き美人にある」と反對に強論する者があつた。

私はその議論の勝敗が、何れに歸したかを記憶してゐない、然し私はカイロを見、その大きな目に出會ひ、カイロ博物館に於いて、タイヤの頭と通稱されてゐる女神ミートの黒曜石の顔を見た、メネヒターの胸像、メセリウスの黒き巨大なる石像を見て、私は無條件に後者の議論に賛成しなければならなくなつた。それから私は、「クレオパトラは黒い」と斷定し、「黒きが故に彼女はより魅惑力を有してゐた」と議論するに至つた。然るに私を驚かし且つ喜ばしめたことは、ジキゼフィン・ペーカーが巴里の舞踏界に、彗星の如く現れ出でたことであつた。そして彼女は栗色の女であり、亞弗利加産の蠻人の娘であり、野蠻のモダンを遺憾なく象徴して、私の説に、最も有力なる支持を與へる者であつたからである。

巴里に裸踊りの二大劇場がある。その一つは、巴里市營のカジノ・ド・パリであり、他の一つは有名なるムーラン・ルウチである。

その後者に於いて、ジキゼフィン・ペーカーが踊るならば、廣きクリシーの大通りに長蛇の陣を敷いて、観衆はその開場を待つのである。又吾々は、その入口に近く二三人の男が、大聲で半狂亂の如く観衆の中を叫び廻つてゐるのを見る。そしてその男の一人を捕へて、「何か？」と

問ふならば、「二百五十、二百五十」と連發し、又時としては、「三百、三百、五百、五百」と繰返すのである。彼等はプレミアア附きの切符を賣る者であり、そしてステーチー真下の平土間が、最もその高値を呼んでゐる。五百法のプレミアアを拂つて、緩なす脚光に纏はりつかれてゐる、黒きジキゼフィンペーカーの裸の足、裸の背、その筋肉のどよめきを見んものと、大西洋を渡つて來たヤンキーの紳士が、大きな弗入れから、千法の紙幣を無難作に繰出すであらう。

舞臺敷の上よりそれを見渡すならば、爺捨山の田毎の月の如く、脚光の反映を浴びて光る無數の禿頭、「素敵、素敵」アンコール、アンコール!!と熱狂して送る拍手の尾花を、望見することが出来る。そのみではなく、吾々はモダンの變態性、その變態性のババリズムへと轉化して行く心理的過程に就いて、考へさせられねばならない。

*「現代變奇尖端圖畫」(新潮社版)一九、一二四—五頁。

x

私は、このモダンに於ける野蠻主義、換言すれば野蠻そのものに、モダンの感じが發見せらるゝに至つた。その心理的過程をば説明する理論として「社會過程の螺旋循環説」を考へる。そして社會過程の變位によつて、その社會心理が變質されるならば、要するにその社會心理を分享してゐるといふ關係に立つてゐるに過ぎない個人の心理は、その時代精神によつて、等しく變化せしめられねばならぬ者であるからである。

「社會過程の螺旋循環説」は、轉化の轉化であり、二重の辨證法である。今、ヘーゲルの考へによるならば、世界は雜多なる相の對立によつて充されてゐる。そこに燦然たる光があるならば、又底知れない暗黒がある、包みきれざる歡喜に震へてゐる胸は、常に盡きざる哀愁に喘ぐ胸とその背を合せてゐる。斯くして富貴は貧賤と相對立し、善は惡に、美は醜に、正は邪に、各々その對立を見出してゐるのである。又吾々は、理想主義の對岸に唯物主義を發見し、古典主義に對して浪漫主義をば思ひ浮べることが出来る如く、「正」と「反」との對立を、あらゆる方面に於いて求め出すことが出来るのである。だから又近代的文化は古代的野蠻に對し、モダニズムはババリズムと鋭く相對立するのである。

而もヘーゲルは、單にこの對立を認めるのみではなく、一つの「概念」は、その内既にそれと全く正反對なる概念の胚芽を、含んでゐるものである。そしてそれは唯に概念のみではなく、現象に於いて、又運動に於いて、それはそれと正反對の働きをば包有してゐるのである。今、右に向つて動くといふことは、左に向つて動く所の力を呼び覺し、熱するといふことは、畢竟するに冷却に向つて専念することであり、憤怒することは、又冷静に歸らんとする第一歩である、だから利を追ふて狂奔する者は、却つて不利に向つて突進する者に外ならない、と考へて來たのであつた。

マルクスに依れば、彼はその原理を「資本家は彼自らの墓穴を掘る」と呼び、淮南子は「狗彘は腐肉を撰ばずして食ふ、偷くもその體を肥せども、顧つてその死に近づく」と、即ち「豚は彼自らの死の爲めに肥ゆる」と、その警句をば發したのであつた。

今、この辨證法的過程を考へて行くならば、野蠻に對して文化が對立し、而もその野蠻の中には、既に反對物たる文化の胚芽が、存在してゐたのであつた。そしてその文化の胚芽は成長して、その培養體たる野蠻を克服し、所謂文化時代を生み出して來たのであつた。

けれども、その野蠻は全く消滅されるものではなくつて、その文化の中に於ける大切な要素として、——例へば、マッケンチーをして、野蠻的衝動の滿足の爲めにする野蠻的制度と云はしめたる、又彼のグレイをして、野蠻人的なりと論ぜしめたる運動、競技、遊戯、戦争の如き要素として、——介在し、又既に文化の中に、その反對物である野蠻の幼蟲が、存在すると云はるゝ所のものとなるのである。

ダーウキンは、この事實を、「文化人は曾て野蠻人であつたといふ證據を具有してゐる」と述べ、「現存する風俗、慣習、信念、言語の中に、依然として以前の低き社會狀態を殘留してゐることによつて、明かにその痕跡を辿ることが出来る」と論じてゐるが如く、この野蠻の幼蟲は、サムライ蜂の幼蟲の如く、その文化を母體として寄生し、文化の極點に近づくに伴ひ、その母體を蠶食して生長し、發展して來るのである。従つて銳敏化されたる文化は再び野蠻化されて來なければならぬ。そしてそれは文化の野蠻への復活であり、轉化である。「歴史は繰返す」けれどもそれは單なる繰返しではなくつて、換言すれば、それは平面上に於ける循環ではなくつて、時と所とを異にし、殊にその社會的意義を異にしたる環狀的なる循環である。それ故

に私はそれを立體的循環と呼び、螺旋狀循環といふのである。だから現代の野蠻は、一度文化の最高峰を越えたる野蠻であり、モダニズムはその中にこのババリズムを、散見せしめねばならない、必然性を有してゐるのである。

然らば何が社會をして、この螺旋狀循環の過程を取らしむるやが、問題となつて来る。社會現象は到底數へ切れない無數の原因の、無數の平行四邊形の關係、即ち合成・組合せの關係に依つて結果されて來るのであつて、一二の原因によつて、完全にその結果を説明することは出來ない。けれどもこの場合に於いては、その最も有力なる原因として、人間の心理が「感覺を算術級數的に増加せんとするには、刺戟を幾何級數的に増加せねばならない」といふ、ウエベール・フェヒネルの法則に従つてゐるといふことゝ、又その刺戟の増加に際しては、總てが或程度の限界性を有してゐるといふことでなければならぬ。

x

原始的野蠻人、彼等はホテントットの如く、ブッシーの如く、全くの眞裸で生活してゐるに

相違なかつた。従つて眞裸であるといふことは、恰も三助に對する如く、相手方を驚かす何等の力をも特に有してゐなかつた。長き惱みの後に或天才が、蔓草を腰に巻き、赤き葉をその性の機官の上につけることによつて、異性の注意を惹くに成功し、多くの人々も亦、その生殖權の優越の爲に、争ふて腰に蔓草を巻き始めたのであつた。やがて文化の幾分進むにつれて、フィジー土人の如く、蔓草は赤き小布片となり、小さき前垂様のものとなつて來た。新しくしてその前が隠されるに及んで、人間の好奇心は強く誘發され、誘發した好奇心は又性的慾望をば引ずり出して、その目的を達成せしめたのであつた。そこで小さき前垂は次第に大型の前垂となり、遂には腰巻となり、腰巻は臺灣の生蕃の如く、肩より袈裟がけにする風呂敷様のものとなり、風呂敷様のものは、全身を包む衣服と發達し、遂に足を包み、顔を包み、スカートを曳き、十二單衣となり、マリアンテレサー、マリアンテネットの如く、腰を淺草觀音の大提灯に入れしが如き服装となり、顔に網をかけ、全身を悉くその異性から、隠蔽して來たのであつた。

然し隠すといふことは、その極點に於いて、必然その限界に達して來たのであつた。そこで

人々は、再びホットテントトへと逆轉せざるを得なくなつて來た、そして吾々はそれを、歐米婦人のモダンなる服装に見るのである。極端に包みたる彼女等は、その生殖競争の爲に、又魅力競争の爲に、再びその服装をば解き始めて來た。彼女等は先づその網より顔を出し、次いで兩手兩腕を出し、肩を出して來た、そしてそれは愛人の接吻を、その唇に受ける前の序曲として、その肩で受け止めるためばかりではなかつた。彼女等は次に胸をばはだけて來た、又何時の間にか彼女等は、大膽にもそのスカートを、断然切り取つて了つた。そして保安警察官の冷汗をよそにして、そのスカートは、寸又寸と短くされて來た。遂にはその蒼藍色の膝小僧が、スカートから覗き出すに至つた。斯くして當局は、スカート條令を出して、そのホットテントトへの逆轉を、漸く喰止めたのであつた。然るに彼女等は、より新しき戦術を發明して來た。そしてその短く切詰められたるスカートをば、足を組み重ねて、ともすれば現はれ出んとする膝小僧を絶えず氣にしてゐるが如く、異性と對話しながら、時々引下げ引下げて、特にそれを隠さんとするが如く努めるのである。「短きスカートを引く女」、彼女は、隠すべきものをば持つといふことを、本能的にデモンストレーションせんとする者であり、フイジー土人が、小さき

赤き前垂を下げてゐると、何等その野蠻性に於いて異なる所はない。けれども近代人は、その野蠻性に素敵なモダンの感じを持つて來る、然し彼女等はそれに満足してゐる者ではない、今やその靴下をも脱ぎ捨て、了ふ、と陳腐なる社會を感嘆し、背中の中程、否腰髄までも、その背筋の布を裂き取つて、露出して來たのである。それはモダンの極致でありとすれば、モダンの極致であり、野蠻の極致でありとすれば、又その野蠻の點に於いて、亞弗利加土人のそれと雄を競ふものである。だからそれは確に近代人の心に、惱ましき魅力をば投與するものであり、彼女等にとつては露出狂のひそかなる享樂に、ひたり得るものでなければならぬ。

x

かうやつて現代に於ける野蠻主義を考へて行くならば、先づ私は眼の先に「新婚旅行」の現象をば、思ひ浮べねばならない。私が土曜日の夜遅く、東京より大磯に歸るならば、その汽車の中に於いて、必ず一二組、時としては三四組の盛装したる新婚旅行の人々と、乗合はすことを常とするであらう。そして私は、若き幸福にわなゝいてゐる、より善き牛身とより悪き牛身

この旅行に、何時も野蠻人の姿を見出さねばならない。そして私の友人Aが「新婚旅行をなさいますでせうね」といふ媒約人の申出に「あれは野蠻人のやることでしてね、研究に多忙な私には、そんな時間もなければ、馬鹿げた真似は出来ません」と答へたことによつて、「そんな古い心臓の男に、大事な娘はいえやられません、妾共の家の格式から申しました處で、新婚旅行位を致しませんでは、親戚の手前もありませんので……、宜しう御座います、どうぞ斷つて下さい」と成金で半可通でモダンかぶれをしてゐる娘の母親から、折角纏まりかけてゐた婚談を斷られて了つた。そして彼は私に「君のいふことなんぞは、百害あつて一利もない、眞理はいつも貧乏で砂利道をてくり、宜い加減の出鱈目や胡麻化しは、自動車を何時もぶつ飛ばしてゐる、だから眞理をそのまま率直に云ふならば、君は時々友人の貧乏を製造して歩くことになる」と私に愉快な恨を述べながら、その片目を顕微鏡から放さうとしない、彼の結婚挿話を思ひ出さざるを得ない。

だが眞實に於いて新婚旅行は、野蠻人のなす掠奪婚そのものである。彼は先づ山奥に小屋を私に建築し、相手の油断をば附狙つて、棍棒でその頭を擡る、人事不省となる、彼はその女を

運んで、その山小屋に行く、そして彼は娘の親爺が諦めをつけて了ふまでは、決して人里には出て来ない。然るにその掠奪行爲はやがて結婚の儀式となつて来た、帝國ホテルに結婚の披露がなされるや、その會の半に新郎新婦は辭して、その野蠻人の夢を運んで、熱海に走り、箱根の山に隠れ行くのである。

又彼等野蠻人は、若しその掠奪せる女が美人であるならば、彼等はその逃亡を恐れて、腕環を嵌め、足環をかけて繋ぐ、——近代人はそれを婚約の指環として、薄鍔形の黄金の指環で「金の力で俺の物とした」といふことを、資本主義的に象徴せしめてゐる、——又彼等は再び他人によつて、その妻が掠奪されることをば防止しようと、その妻の顔に肌文身をやり出して来た、——今、吾々はその風習を手近く猶アイヌ族の中に見ることが出来る、——のみならず、やがては文身を持つことが、美人であるといふ證據であると考へられ、——男子の文身が、争鬪の際に受けたる槍傷刀傷より發して、それが勇士の證據とされ、遂には自らその顔を傷け、臍病者までが「これで本當の男だ」と考へる様になつたと、同様の心理過程によつて、——掠奪する者なき醜女までが、文身をやり出すに至つたのであつた。吾々はこの文身を、モダンの

尖端を敢然として行くといふ婦人に見る、彼女等はその白き頬に、青黒き断髪を彫り、赤き唇を星を入れる。又彼女等はその愛人を更へることに、大きな黒子を入れて来る、だからそれは近代的なる「紋ぢらしのお芳」である。然るに吾々は、その黒子を多く書き込みたる半モダンの女を、銀座の薄暮に見る、そして彼女等は、その黒子にモダンの感じを春かせ、モボはその黒子の故に、彼女等を美人なりと誤断する、そこに又野蠻心理の隔世遺傳がある。

吾々は猶この野蠻心理のアダビズメンを、近代人の断髪に見る。断髪の原因は古く原始野蠻人の生活に發し、それは家庭の束縛、部落社會の禁制、總てを無視するものであり、殺人罪と等しく重刑に處せられたものであつた。而も相愛の彼等は、その死線を越えてその部落より走り、渡りし總ての橋を焼き捨て、當時自己の部落を離れては、殆どその生活が保障され得なかつたにも拘らず、猛然と愛の左證の爲に、決して再び歸らざる受難の漂浪に出たのであつた。今、吾々はその断髪を誇示し、その断髪を歌ひ、その断髪を吾等の×××××の断髪として讚美する、モダンの一群を見るのである。

x

ダンス、殊にモダンのダンスに、吾々は野蠻を見る。そしてその野蠻性が吾々をダンスに引付けてゐる。今迄の文明、洋の文明、餘りに人工的な虚飾文明は、人間の人間らしき本能を、總て資本主義の水壓機にかけて斃たばらしてゐる。吾々はだからそこに反逆、そこに××、總てを無茶苦茶にして「野蠻」の翹望を持つてゐる。亞弗利加の藪で踊られたる戰爭ダンスのジャズ、原始椰子林で踊られたるハワイの踊り、「滅茶苦茶にやらうよ」といふ合言葉、念調な、攪亂的な、超諧調的な、貴族主義古典主義をば大地にたゞきつけ、くちやくちやくにして了解不能な音調、それは聽覺の反亂である。そして吾々はその反亂につれて、運動感の泥醉的暴行を求めて来る、Jazz、Jazzそれは運動感のカクテルであり、パバリズムのモダニズムへの急轉である。

老い疲れたる人、得意満面たる人、彼等は必ずその故郷に歸つて来る。虚飾文明に磨げられたる人、虚飾文明の最高波頭に立つ人、彼等は又必ずその心の故郷たる「野蠻主義」へと歸つ

て来る。そこに彼等の休養があり彼等の享樂がある。ベースの野蠻、憂然とブン擲る剛球、それは數萬のフーンの血を沸かしむるに足る。ラグビーの野蠻、猛然たる體當り、決死の面魂、それは湧々たるモダンの興奮を呼び起して来る。拳闘の野蠻、突き出す巨腕、體然と仰向け様に倒れる闘士、流るゝ血、見る見る紫色に變る目の凹み……三秒、四秒、よろよろと立ち上る疲勞困憊の内塊、それは、觀衆に窒息を強要する。競馬の野蠻、ドライブの野蠻、それはそのスピードの持つ恐怖の快感である。總てを突き崩し、總てを突破する興奮である。見よ！現代人の「蹴る。打つ。擲る。投げ。ブツ飛ばす」スポーツに持つ興奮を！血の攪亂、強猛なる刺戟、それは極度の神經衰弱症の爲にいら立つてゐる、全現代人の心理に對する痛烈なる慰安である。

又吾々にモダン味を與へてゐる總てのもの、それは何等かの形式に於いて、或は又その實質に於いて野蠻である。繪畫、彫刻に於ける近代的傾向の野蠻化、後期印象派、未來派、勞農派の野蠻味、そして又そのモダン味、演劇に於けるオストロフスキー派の幼稚さに於けるモダンの感興、手工、工藝、染色、圖案に於ける野蠻への降服と追従、クララ・ポーの手にするオペラ。

バックは、そのモダン味に於いて、ヒリッピン土人のピースド・バックに及ばざること遠く、又その土人のジャケツは、圖案に於いて確に洒落者ロイドのそれよりも數等モダンである。ハワイ土人の皮外套は、世界流行の源泉であるバリ第一流の百貨店、ループル又はガリレ！ラファイローに於いてさへも、到底見ることは出来ないモダンの色調に於いて輝いてゐる。又モダンの建築に於いて、吾々はノアの方舟を銀座の中央に發見し、日本橋の十字街角に立てる白木屋に於いて、更に進んでより完全なるグラス建築に於いて、セントラル・エスキモーの原始住宅を考へることが出来る。そして丸ビルに於いて、吾々は吉見の百穴を聯想し、ライト式建築の帝國ホテルに於いて、穴居生活をば實現することが出来る。ライトは云ふ「建築物は人間の爲である、然るに今迄の建築物は人間を壓倒してゐた、故に吾々は穴居の生活に歸り、反對に建築物を壓倒せねばならない」と、そして彼は土色の壁、低き天井、薄暗き間接光線の部屋をば造出したのであつた。そして又モダン人は、その穴に坐して、蛙を食ひ、蝸牛を食ひ、豚の孕み兒の蹄を食ひ、羊の腦味噌の丸茹を、その皿に載せる。斯くして彼等は蠻人の如く、食はざる所の物なきを以て、モダンの生活なりと誇り、遂にはその腹にまでモダンのペバリズムを、浸透

モダンに於ける野蠻主義
せしめて行くのである。

スポーツ・マニアの時代

× × 3 × ×

X

私の中學時代の友人に非常に學問嫌ひな男があつた。彼に「四則雜題を一つ解く方がよいか、それとも米を一俵荷負ふて三里の道を行く方がよいか」と問ふならば、彼は斷然後者を選ぶにきまつてゐた。そこで私は彼の腦味噌の組織をさへ疑つてゐたのに、私は最近この疑惑を二乗せしめねばならぬことに達着して來た。そしてそれは彼が非常なスポーツのファンであるといふことを、發見したからである。

彼はスポーツといふスポーツなら、そのルールを知つてゐるばかりではない。選手の名前から年齢、その出身地、出身學校、そしてそのレコード、百米の自由型なら日本のレコードは一分何十秒何分の一で、その世界レコードと何秒の差がある、そして彼のレコードは、今何秒の開きを世界レコードに持つてゐる。あゝ彼か、彼なら何々商業の出身で、全國中等學校の野球大會に安打を何本出した、昨年の六大學のリーグ戦には三振を何度、安打何本、二壘打八本、三壘打三本、ホームラン二本、平均の成績は何點で、ベスト點の順位は何番である、とすらす

らと述べ立てる。だから私は、その頭の精確さに、改めて驚倒せしめられねばならない。成程ファンの心理作用は又特別であるらしい、けれどもそれは恐ろしい時代の力である、本當に今やスポーツ・マニアの時代である、とつくづく私は彼によつて考へさせられたのであつた。

X

一體、スポーツ・ファンは非筋肉労働者に多い。彼等の筋肉の中には鬱結してゐるエネルギーがある、彼は無意識の内にその發散を求めてゐる、だから有閑階級が發生しなければ、スポーツ・ファンは發生して來ない。そして又スポーツ・ファンなしには、恰も通の客人なしには、料理發達がないやうに、スポーツは發達するものではない。

故に昔希臘に於いて、スポーツ・マニアの時代があつたといふことは、希臘に公民と稱する有閑階級があつて、植民地或は東方諸國を搾取することによつて、無爲なる生活をしてゐたといふことを物語るものでなければならず、羅馬に於ける、あの巨大なるアンヒセアターとローマ人の生活とは、切離して考へることが出來ない程、左様にローマ人は行くところ巨大なるアン

ヒセアターを造つてゐたといふことは、ローマ人の生活が搾取による生活であつた、といふことも物語つてゐはせぬか？ 西班牙人が發見植民、そして掠奪詐取によつて、世界の富を首府マドリットに掻集め、午睡の民となしたといふこと、西班牙人の血を沸かしてゐる闘牛とは、明白なる因果關係が跡づけられはせぬか？ 世界の資本國である佛蘭西、世界の金利生活者の遊興中心地である巴里が、ニースのカーニバル祭の思ひ切つた馬鹿騒ぎ同様に、競馬マニアの中心となつてゐるのを、私は何等不思議と思ひ得る者ではない。

無盡蔵の沃野と礦産物と、そして歐洲大戰によつて、世界の金塊を紐育に集め得たといふ成金亞米利加合衆國に於いて、ホーム・ラン王ベープ・ブルースが、十六萬圓の年俸即ち一日四百三十八圓三十五錢五厘の給料を、ヤンキース軍から受取つてゐた所で、何等不思議はない、そこには坐食してゐる多くの人々がある、ベープ・ブルースの要飛ばすホーム・ランで、自分の肩の凝りを解き、溜飲をさげてゐる數十萬、否數百萬のブル階級、プチブル、そして小判藏きの如く終日机に蓄りついてゐるサラリーマン階級があるからである。

x

スポーツ狂は、多くサラリーマン階級に屬してゐる。舊幕時代に於いては武士族本といふ、サラリーマン階級があり、そこに眞劍果合、孝子の仇討があり、義によつて他人の喧嘩を買つて出た時代があり、下つては角力狂亂の時代があつた。又そこにはたゞ坐食して、エネルギーの排泄口に窮してゐる浪人群があり、喧嘩屋安があつた。

現今のスポーツ・マニア時代に於いても、吾々は後期資本主義が、次第に大量生産し來るサラリーマン階級を發見することが出来る、又そこに巨大なる失業群を見出さねばならない。時代は殺人的の不景氣である、けれども生物はその鬱結してゐるエネルギーを排泄することなしに、生存し得ない。吾々は近時大劇場主義の勃興し來つた、社會的根據もそこに求めることが出来る、カフェー、バー、ダンス、淫賣の氾濫も、亦そこに瀕死することが出来ると思ふ。由に於いて、スポーツ・マニアの社會的根據を、矢張りそこに求め出すことが出来ると思ふ。そして井上藏相は、失業群を増加することによつて、このスポーツ・マニアの時代を招來する

に貢献し、代つて山本條太郎氏がその好景氣策を實現するに成功したならば、國民大衆をサラリーマン化することによつて、依然このスポーツ・マニアの時代を支持するであらう。だからいづれにせよ、當分はスポーツ・マニアの時代であり、そして運動用具製造株式會社の高配當がつづくことであらう。

現代蒐集狂

× × 4 × ×

程度の差はある、けれども現代人は誰でも皆狂気である様である。犯罪學者のロンプロゾーが、「天才と狂人とはほんとうに紙一重の相異である」と喝破してゐるのに眞似るならば、「天才ならずとも現代人は、狂人とほんとうに薄紙一重の相異である」と云はねばならない。だから醫者は、殊に精神病の醫者は、陪審員になる資格がないさうである。何故ならば彼等にはどの男もどの女も、皆精神病者の徴候を遺憾なく具へてゐる者と見えるからである。今又、吾が醫科大學で精神病學の講義を聽くならば、丁度新聞で神經衰弱症の賣藥の廣告文を讀んで「では、俺も神經衰弱かな」と思はぬ人が殆どない様に、「あゝ、それぢや、俺もどうやら少し變になつて來たぞ」と必ず思はねばならない程、現代人には、この狂人的傾向が普遍的のものとなつてゐるのを、自分の脳味噌の中で、掴まねばならなくなる。

ガブリエル・タルドによるならば、狂人は磁石の如く二つの極をばもつてゐる、と云はれてゐる。そしてそれはマニアとメランコリアとである、だからこの狂人の二大特性である焦燥と憂鬱

鬱とは、又現代人の二大特性であり、従つてそれは現代文化の顯著なる特質をばなすものである。そしてその氣違染たるオレンチ色の焦燥は、現にジャズを生み、ストライキと××さわぎとを煽動し、闇灰色の憂鬱性は、日々新聞紙に見らるゝが如き飛下り自殺と親子心中とを、盛んに生産し出してゐるのである。私をして若し又この狂人を評さしめるならば、それは心の平衡作用をば失ふてゐる人々である。だから彼等の精神生活は片寄つてゐる。船底に大穴をあけた難破船の如く、その平衡をば取戻すことなしに、彼等の心は、傾斜したるがまゝに加速度的に沈下して行くのである。

そして右に沈下するものは、遂にその極に至つてマニアとなり、左に傾斜して行くものは、遂にメランコリアの極に到達するのである。それ故に平衡をば無視して唯或一方に傾き行く心の愛着性は、それはまさしく狂氣の第一要素であり、その素地である、と私は考へねばならない。そして殊にその初期的現象として、私は現代人の蒐集癖を見出さねばならない。而もその癖は又加速度的に、その次の時期に於いて、必ず立派なる「蒐集狂」となり、私の「現代人狂氣論」を左證するものとなるのである。

私はこゝに「現代蒐集狂」の蒐集狂となる程の、急角度の傾斜をば有してゐない。けれども私の一部の友人は、私を目して「キッス」の蒐集狂だと考へてゐる。「君、どこそこにキッスの繪があるぞ」と見つけ次第に必ず教へて呉れる。「君、蚤の市に素敵なきッスの銅版がある。高いことを云ふだらうが、なには是非買ふんだね」と次の日曜日に朝早くから私の下宿にやつて来て、パリ十八區のポルト・ド・クリニヤンクールの郊外にある古物市に連れ出して行く。「これは禁止品だから高い」「高いならいらぬ」といふのを「まあまあ、さう言はずに買った買った」と友人どもが熱中して私に買はせる、どちらが狂人だか、私には一寸見當がつかなくなる。

「君、倫敦のトラファルガル十字街にあるナショナル・ギャラリーに入つて、二階に上りさまに頭の上を振り返り見ると、そこにロダが白鳥を抱擁して、キッスをしてゐる名畫がある。ならば手柄に買つて見ろ」と擲論する者があると、「何に俺が原色版のその繪を持つてゐるから、實は秘藏してゐたんだが……」と躍起になつて、私に呉れやうとする。かうやつて友人に騒がれ出して

來ると、私も「それぢや俺は、キッスの蒐集家なのかな」と考へるやうになり、恰も明治維新當時の五流六流の人物が「無能の幸運」で生き残つてゐると、爲にする取巻き連中が、元老元老と煽てあげる、三呼市に虎をなすの勢で、いつの間にか「それぢや、俺は偉いのかな」と考へ、次いで「偉い」と自惚れて來る様に、私もいつの間にかキッスに對して、狂的の愛着を持つて來た。

又私は、學者偉人の墓に興味を持つてゐた。さうすると「大泥棒の墓はどうです、腕の清吉の墓は、鼠小僧の墓は、谷風は、雷電は、花魁高尾は、……アレキサンダー・ドゥマアの墓は、プランキーは、ハイネは……」と學生や友人の有志が、その寫眞を持寄つて來て呉れる。コムトとブルードンとの著書を蒐集しようとする、「コムト自身が所藏してゐた解析幾何學の本だ、貴方のコレクションを完成する爲に、時價にして安くとも三百法の本ですが、今から三十年前に買入れた時の十七法でお譲りませう」といふ本屋の老人もあれば、「ブルードンですか、これは今度ブグレイが店から出してゐるブルードン全集にも出せない、發賣禁止の本ですが、こゝから買ったと云はないで下さい」と二階から三冊の古本を出して來て呉れた、書肆マルセ

ルの若主人もある。考へて見るとこの現象は、現代人が皆持つてゐる自己の蒐集癖をば誰かに、例へば私に押付けて、それで自分等の心の渴望を満足しようとする、心理的のトリックでなければならぬ。

x

だから吾々現代人は、自分の癡に對して持つてゐる蒐集の渴望をば、中橋狸庵氏に押付け、彼をば癡狂氣にすることによつて自らを慰め、ガマに對する好奇的愛好をば、ガマが池の主である渡邊千冬氏に譲り渡し、馬に對するそれをば巖谷小波氏に一任し、又千社札の蒐集をばお札博士に、お守札の蒐集は井上哲次郎博士に、文身皮細工の蒐集をば福士政一博士に、假子の蒐集をば尾佐竹猛博士に、刀劍の蒐集は山本健二郎氏と辨慶とに、美人の蒐集をソロモンに、美男の蒐集をカタリナ女帝に、金の蒐集をロスチャードとモルガンとに、猿本春畫の蒐集をば法學博士のO氏に、版畫の蒐集をば小島烏水氏に、惚れ藥の蒐集はO理學博士に、グロテックスの版畫の蒐集は前大使のS氏に、若返り秘藥の蒐集は吉田東京驛長に、ステッキの蒐集は、四萬

八千本を有してゐるといふ市俄古のステッキ狂と櫻井忠温氏に、蝶槍の蒐集は明大教授大谷美隆氏に、紙ナイフの蒐集は土岐善廣氏に、婦人の頭髮の蒐集をばT帝大のF教授に、靴と下駄との蒐集はK帝大のA教授に、骸骨の蒐集は長谷部言人博士と生著の會長とに、佛敎の蒐集は小泉三申氏に、それぞれその焦點をば見出して來る。だから彼等は、現代人が有してゐる蒐集癖をば代表して蒐集狂となり、その萬英となつた者であると考へられる。

然しながら、一般民衆プロレタリアは、その反面に於いてこの少數個人のブルジョアの獨占的優越詩的の蒐集狂に敵意をさしはさみ、それに對抗し、彼等も亦何等かの蒐集に於いて、前者に匹敵し凌駕しようとする。そして私は斯くの如き欲求をば指して、それは「プロレタリアのブルジョア性」によるものであると考へる。由來、單なる蒐集癖は、加速度的に蒐集狂となることによつて、巨額の費用をば必要として來るのである。然るにプロレタリアは、その出費の可能性を持つてゐない。そこにそのコレクションの對象は安値であるといふ點に於いて、ブルジョアのそれに對して優越性、否、匹敵性をば勝ち得るに困難である。だからプロレタリアは、當然奇抜の思ひ附を以て、その安値より來る劣性をば填補しようとする。この奇抜性は

左傾して犯罪性となり、更に進んではその變態性を生み出して来る。又それは右傾してその至難性より迷信性を發展せしめ、この變態性と迷信性とは、プロレタリアの心の中に内攻し、而もその満足が常に阻壓せしめられてゐる性的欲望の電壓昂充と相呼應して、その變態性慾性の深度を益々大ならしめて來るのである。

x

切手の蒐集、マッチのペーパーの蒐集、それは波蘭政府が、世界の切手蒐集狂を目前に、歐洲大戰後の二ヶ年間に於いて四百八十餘種の記念切手を發行し、マッチのペーパーが、特別に印刷されて銀座の夜店で賣られ、歐米各國のホテルのレットルが通信販賣せられる様になつては、最早や何等の奇抜性をも、それは持ち得なくなつて了つた。そこで彼等は、親子筆の袋を集め、汽車辨の上紙を集め、菓子袋、料理屋、待合の受取書、名士の表札、女下駄の右足、盗み集めた盃と徳利、處女の戀文、女郎の起誓文、赤き口紅にてハンカチーフに捺印したキッスの口型、それをば彼等は、千個或は千枚集めることによつて、即ちその至難性と或は又その犯罪性にと

よつて、彼等の望みが叶ひ、彼等の戀が叶ふと迷信し出して來たのであつた。

又心理学を専攻した或文學士が、自分の知つてゐる女のカーンしてゐるその毛をば、恰も植物學者が標本を整理してゐる様に、臺紙に貼附け、それを採取した年月日、姓名、年齢、採取地と其出生地とを詳記してゐた。それは上野の森の賣春婦として、その嬌名を馳せた「紋ぢらしのお芳」の心理と、何等異なる所のものではない。若し諸君が、巴里に於いて、又倫敦に於いて、いや就中伯林のカフェー・ピクトリヤに於いて、彼地の婀娜者と話されるならば、彼女等は、必ず幾多の日本の名士、博士、教授、大官の名を、次ぎから次ぎへと披露に及ぶことであらう。そして彼女等はこの暫定的友愛結婚の相手方の名をば、無數にかぞへ上げることによつて、それから一つの科學的、大數の法則に基づく所の結論をば歸納して來る。「……だから妾は、日本人の方々から好かれる素質を有してゐる、貴方は妾とこの友愛關係を結ぶことによつて、決して失望しはしない」と。それ故に彼女等はその廣告用として、日本人の名刺を蒐集し、其寫眞を蒐集し、サインを蒐集してゐる。私の友人に某雜誌記者がある、彼は今西比利亞鐵道を伯林へと急いでゐる。彼の目的は、彼女等の先輩、即ち年老いてその名刺と寫眞とを不必要と

してゐる老婆達から、従つて現代日本の名士大官の嬌名を物語つてゐる文献をば、蒐集するのである。若し彼がその名刺とその寫眞とそのサインと切なる戀文との蒐集を、更に蒐集するに成功するならば、そしてそれが日本に持ち歸られ、「暴露の展覧會」として陳列されるならば、それは確に一九三一年をして「暴露の年」たらしむるに價し、大なる驚愕を惹起することであらう。そしてそこに又蒐集狂に對して、抱かれる戦慄がある。

x

又私の知つてゐるM學士は、猥褻袋を蒐集し、その爲に吉原洲崎玉の井と方々の芥箱までも捜し廻してゐた。私が、「君、章魚釣をやつたらどうだ」と悪口を叩いたら、彼は、「章魚釣て？何處で……」といふ。そこで私ほ説明をした、「章魚釣て君、夕暮に方々の裏道を廻るんだ、そして入れ忘れてゐた、女の××の赤いのだけを、干物竿で突掛けてはづすんだ、はづしてどうするつて？それを盗んで蒐集するのさ、大阪で先年、筆筒と大長持とに一ぱい蒐集した奴がある。この變態性慾的犯罪を、犯罪學の術語では章魚釣と云ふんだ、君から見たらさぞ尊敬すべ

き蒐集家ではないか」と云つたら、今迄怒つた事のなかつたM君も、目の色を變へて「ちや、君はその前科者だね」といふ、「前科者」には、私も恐れ入らざるを得ない。

巴里に女の靴下の古いのを盗み集めた、退職の老檢事がゐた。五ヶ年間に一千八百足を蒐集したと、日曜繪入新聞が書いてゐるから、約一日一足の割合に盗んで行つた計算になる。彼は死んだ細君が戀しい餘りに、彼女の遺して行つた靴下をそつと穿いて見たのが、病附きとなつたのださうで、寢室の天井から、それを皆釣下げてゐた。維納で大學の學生が、學校を途中でやめて郵便集配人になつた。さうやつて女からの戀文を悉く途中で着服して、彼の寢室は、その蒐集された手紙で埋められてゐた。彼は裁判所で、「女が私を失戀せしめた腹癪である」と公言してゐたさうである。

「學者つて氣狂だな」と實業家のS君がいふ、「何故か？」と反問したら、「……あのTつては柳病の博士な、毎日セーヌ河へ釣に行くが、君、何を釣つて来るか知つてゐるか」「知らない、いつ見ても五六人の男が釣つてゐるが、魚の釣れた所を見たことはない」「所が時々ゴムの小さい袋を釣つて来てな、それを試験管に漬けて保存して置くんだ。狂育でも釣つたし、倫敦でも

釣つた、伯林でも、維納でも、羅馬のタイバー河でも釣つてやると云つてゐたぜ、そしてそこから花柳病の細菌を發見して、世界的の論文を書くんださうだぞ、もう五六十本も集つてゐる、今度見せて貰ふか」といふ。「氣の毒に、懷癪病で變態的になつてゐるんだよ」「いや確に研究心からだ、随分熱心だ。なにしろ四年もかゝつたさうだ、所があつた昆蟲記のフアブルな、あの男は蜘蛛の研究で、十九年間も野原に暮してゐたと云ふぢやないか、だから俺などはまだまだ……と云ふぜ、學者つて狂氣でなければならぬ商賣だ」とS君はニヤリと笑ふ。

x

成程、學者は多分に狂人的傾向をば持つてゐる。或學者は卵子の代りに時計を半熱にした。又或學者は自分の細君をば見忘れて盛にお辭儀をした。日露戦争を少しも知らなかつたといふ學者もあれば、最近飯を食ふことを忘れて、餓死して了つたといふ古典學者もある。電車と正面衝突して轢殺されながらも、まだラヂウムのことを考へてゐた男もあれば、頭の中に九發の弾を撃ち込んで、どうして人間はそれでも考へることが出来るか、といふことを考へたといふ

學者もあつた。而も學者、殊に自然科学者は、その研究法に於いて蒐集狂のそれと殆ど同一である。今、彼の精神分析學者のフロイドによるならば、この蒐集狂から學者へと變つて來た、幾多の實例をあげてゐる。

彼のフロイドの説は、一言にしていふならば、心理學の辨證論である。人間の心の中には、そのまゝでは破倫の非道德的な、従つて満足されない欲求がある。そして正しい意志が、その不正なる欲求をば絶えず監視し、その正と反とが闘争することによつて、心的活動が生じて來る。斯くして抑壓された破倫な欲求は、いつの間にか變形されて、他の形態に於いて現はれて來る。性慾旺盛なる婦人が、米國にあつた。然し彼女は、その性慾の満足を、不道德的なりとして極力抑壓した。然るに、その欲求は變形して、Xに對する關心となり、彼女はXの蒐集狂となり、幾多のXの比較研究は、彼女をして、立派なX學者とならしめて來た、と報告してゐる。

私はこの説明、即ち破倫的な欲求の變形説を以て、極度に抑壓されてゐる欲求の斯く多き現代社會に於ける、幾多の學者、又は幾多の蒐集狂の現象を、適確に説明し得るものであると

思ふ。だから日々新婚旅行のカップルを目撃してゐる吉田東京驛長が、若返り秘薬の蒐集狂であるといふことは、彼のフロイドをして、微笑せしめるに足る事實でなければならぬ。

ナンセンスの社會學

× × 5 × ×

X

來りつゝあるものは明かに反逆時代である。だから現代社會は餘りに窮屈な、餘りに縛てを意味付けて考へ、意味附けらるゝことなくしては、何事も行はない、といふ時代精神に反抗して、反逆の狼煙をあげ來るものは、それはその反對物たるナンセンスの思潮であらねばならぬ。それ故にナンセンスは、現代人にとつて、決して單なる無意義ではない、それは寧ろ「無意味の有意味」であることを考へねばなるまい。

又現代人は「必然」に飽滿せしめられてゐる。一つの出來事があれば、必ず彼等はその因果の關係をば調べあげ、その必然性を檢證しようと努力する。そしてそれを彼等は「科學的」であると誇稱してゐる。然るに考へ直して見ると、實際社會は「偶然」であり、バイチャンスの無數の相乘積である。だから又一つの社會現象は、このバイチャンスとバイチャンスとの平行四邊形の關係であり、偶然と偶然とのゴツタ返しであり、二乗であり、三乗四乗の關係である。たゞ人々はその科學的錯覺によつて、この無數のバイチャンスの裡に、——それを個々に觀察

するならば、そこに何等の法則はない、然し無數回の現象に就いて觀察をなすならば、それを支配する一定の法則がある、——といふ、バイチャンスの法則性を發見して、無事やりに總てを法則化し、必然化さうとしてゐる。だから又現代に倦怠する人々は、その法則化に對して法則無視の希望を持ち、その必然づくめに對して偶然を讚美しようとする。一切の人工をば退けて、自然のバイチャンスに歸らうとする。苦心慘澹條理整然たる過程を辿る所の戀物語よりも「彼はどうして女を拾つたか」に百パーセントの興味を持ち、數理を超越してゐる「錢話」に夢中にならうとする。數理の人はそれを「馬鹿らしい話」だといひ「氣狂沙汰」といふ。然り、倦怠人は、その馬鹿にならうとし、その氣狂沙汰を羨望してゐる。餘りに小利口であることに、充分の反感を持つことによつて、偶然から偶然へと自由の飛躍を試みようとしてゐる。堅苦しき人生の顔に、ナンセンスのポスターをベタベタと貼附けることによつて、その反逆心に幾分の満足を得ようとしてゐる。

X

又現代社會は何から何までをも、その營利的の機制によつて縛りあげてゐる。だから現代人は、その全身の末梢神経をいらだせて、一厘一銭の損得にまで、餘りに怖ろしき緊張振りをば示してゐる。會計學や簿記の先生は「一厘一毛の誤算でも、その誤算たるや矢張り誤算で、百億千億の誤算と、その誤算たる點に於いては變りはない」とその尊敬すべき數理の精確さをば、熱心に彼等の生徒に教へ込まうとしてゐる。又吾々が銀行に行くならば、幾人かの銀行員が「何度その紙幣を數へたなら氣がすむのか」と何時も溜息が吐ける程、右から數へ、左から數へ、そして表から、裏から、はてはそれを一枚づゝ彈き、そして捻り出して見る。又それと同様に、不熟練な機關手が、泥汽車をば急停車する時の様な、雜音をたてゝゐるデパートの金錢登錄器は、タイプライターと共に、近代的雜音の發聲器として雙壁であるばかりではなく、そのせゝこましさ、その惡意的なる監督性、その神經衰弱的なる猜疑性に、吾々は決して好感を抱き得る者ではない。吾々はそのせゝこましさに呪ひを發し、その猜疑性に嘲笑を作らねばならない。

又現代生活は餘りに合理化され過ぎてゐる、機械論的になり過ぎてゐる。そして現代人はさ

うならねばならぬものと思ひ込んでゐるらしい。人間の胃腸と硝子の試験管とを同一視して、何でも三千八百カロリーの品物をば胃袋に叩き込むならば、それで人間は生きて行かねばならぬ必然性にあるかの如き、生理經濟論をば構築して、酒を飲んでさへ、或者は赤くなり、或者は青くなり、又或者は笑ひ、或者は泣き、或者は怒り、そして或者は多辯となり、又或者は黙々然として考へ込むといふが如き、雜多にして複雑なる、生理的・心理的反應を呈する人間現象をば、悉く消去し閉却して、そこにリトマス反應の如き、簡單一律なる法則をば打立て、それによつて人間の生活をば化學的に又物理的に統制せねばならぬ、と考へ出してゐるらしい。だから如何なる場合に於いても、現代人は理窟を要求する、如何なる行爲に際しても現代人は主義を標榜する。洵に現代人は餘りに哲學者であり、そして餘りに道德家としての假面を裝ふに專念的である。

x

K博士は有名なる大酒家である。けれども博士は理由なしには、その一滴たりとも喉にはし

ない。而も博士は巧妙にその理由を發見する。四方拜、天長節を始めとして、神嘗祭、明治節、新嘗祭、大正天皇祭等の祭日は勿論、陸海軍記念日、自己の誕生日、妻の誕生日、子供の誕生日、著書出版記念日、父母の命日、カント・アーベント、さてはニュートンの萬有引力發見記念日、佛蘭西革命記念祭、それからそれへと、博士は一年の始めに於いて、その日記帳に、赤く正當に飲める日をば、——博士はそれを「左傾日」と前から呼んでゐられたさうである、そしてその「左傾日」をば、——書込んで行かれる。若し不幸にして、七月・八月の如く記念日手薄の月に於いて、徒らにその白き日、即ち「右傾日」が續くならば、珍らしき友人をば招待するといふ「久瀧日」が、所々に挿入されて來るのである。

然し今考へて見るならば、それは要するに飲むことではないか、吾々は博士がその「左傾日」をば、適度に配置される御手際に感心するよりも「唯、何となく飲みたいから飲むまでだ」と放語し得ないで、カントを引合に出し、ニュートンにお酌を強ひられねばならない、その合理辯に先づ憎悪とそして憐憫の情とを痛感せねばならなくなる。人間は本來左様に合理的に生活してゐるものでは決してない、然るに現代人はそれを合理的に彌縫しようと思はず努めてゐる。

そして吾々は又そこに息苦しさをば感ぜねばならない。

x

彼等は又時間を喧しく云ふ、規則を喧しく云ふ。一秒の百分の一でも遅刻するならば、それはそれだけポリーナスの袋に輕減作用を及ぼして來る。だから今そのポリーナスを氣にしながら、出勤時刻に間に合す爲に、バスに飛乗するならば「どうぞ、停留場から」と、折角命を的に飛乗し得てホツとしたものを、又命を的に飛降りせねばならない。では停留場へと急いで逆戻りしようとするれば、交通調査は「左側通行」と嗷鳴る。息苦しさに唾を吐かんとすれば「痰唾無用、吾等の町を美化しませう」と云ふビラが鼻先につきつけられてゐて、その唾の遺場に窮せざるを得ない。そこで吾々は益々あせり氣味になる、電車で飛込めば、そこには拘捕の危害があり、急いで道を横切れば、そこに横逃げの危険がある。犬を飼つて「小彌太」と名づけ、猫を飼つて「善次郎」と呼び「時々は蹴飛ばして見るが、ヒート云ひ、ニヤンと云ふまでである」と得意然として友人間に披露をすれば、そこには裏切者がある、重役は必ず彼の首を切ること

によつて、彼に悲鳴をあげさせ、ヒーと云ひ、ニヤンと云はせるに違ひない。全く油断も隙もならない時勢となり、何もかも種々の種子ならざるはない。

だから吾々はこの憤慨と、この緊張と、この煩悶と、そして餘りのしかつめらしいさと、せいこましさと、餘りの理窟と、必然と、營利とでこねあげられてゐる人生に對する一揆性を、その内心に於いて醗化せざるを得ない。長い緊張に次いで来るべき弛緩を求めざるを得ない。總てを合理化し、總てを目的化し、有意義的に構築されてゐる思惟の殿堂の真唯中に、無意義の偶像をば安置して、世人に鼻をあかしてやらねばならない。そしてそこに吾々は、ナンセンスの社會性を發見し、その流行性を見出し得ると思ふ。

x

又吾々はナンセンスの屬性として、簡潔性のあげられてゐるのを聞く。ロンブローゾーの云ふが如く、文明は常に多少に拘らず病的である、殊に現代の文明は變態的であり頹廢的である、従つてそれは神經衰弱症的症状である。

吾々が朝新聞紙を開くならば、先づ三段抜きの大見出しに目を落とし、次いで直に六號活字の「その日その日」の短評に、又は「青鉛筆」に目を轉ずることであらう。現代人は氣根を失ひかけてゐる、寸鐵人を刺すの刺戟を求めてゐる。或博士が、その著書の老大きさを誇示して、一萬數千頁の著作をなしたと云ふや、原勝郎博士は、「奴は馬鹿だからさ、自分の意見を述べるのに、一萬數千頁も書かなきゃ述べられないとは、馬鹿の證據ぢやないかな」と酷評を投げてゐる。眞理は常に簡單である、だから吾々はそれを簡潔に把持し、簡明に表現せねばならぬ、と世の神經衰弱症患者は云ふ。そして吾々も亦近代人として、充分なる共鳴をそこに見出すことが出来る。

昔、ベルシヤの若き王子ゼミイルが、父の後を繼いで王位に即いた。さて、國中の學者を集めていふ、「王者たる者、もし過去の歴史に通ぜば、過つ事少なからむとは、わが師の教へだ。卿等はわが爲に世界史を作り、その完備を期せよ」と。それから二十年を経て學者、十二頭の駱駝の一隊を率ゐて、一頭に五百卷宛を積み、すべて六千卷の書を王に獻じた。國政に忙殺されてゐる王は、深く學者の勞を謝して後いふには、「朕は既に中年である、たとひ老ゆる迄生き

ようとも、此浩瀚な歴史は讀めぬ、之を短縮せよ」と。それからまたもや刻苦精勵の二十年を経て、學者は之を千五百卷に縮め、王に捧げて要點は毫も省いてないと申しあげた。王は「さうであらう、然し朕は既に老いた、更に之を縮め、出來得るだけ早く仕上げよ」と命じた。今度は十年を経て、學者は一頭の若き象に僅に五百卷を積んで持つて來た。王は「まだ不充分だ、朕の餘命は幾何も無い、更に縮めよ」といふ。また五年経つた、今度は學者が杖にすがつて、一匹の驢馬に大きな書物一冊を載せて持つて來た、王は此時臨終の床に在はすと、或官人が告げる。王の云はるるには「朕はいま逝く、遂に人間の歴史を知らずして」と、老いたる學者は「陛下よ、否、臣はこれを約めて三語となさむ、曰く、生と苦と滅」とアナトオル・フランスが書いてゐる。そしてそれは吾等近代人の洵に云はんとする所であり「それ見よ」とばかりに、尨大なる著書に得意となり、長たらしく且つ難解の哲學と論文とに慢心してゐる學者に、投與されたる諷刺と冷笑とで、それはあらねばならない。

x

大笑は心理的に發達しない野蠻人のやることで、文明人は大笑をやらない。彼等は微笑をやる、冷笑をやり、嘲笑をやる、そしてその冷笑によつて、大笑以上の満足を感じそかに味はつてゐる。だからナンセンスは、又その屬性に後者の笑の合成物を包有してゐる。一體ナンセンスの持つ笑は、心の思惟をば一旦やりすて、そしてそれに譬餅をつかせる所に孕まれて來る笑である。心の作用はいつも先走りをする。

今、徴兵検査官があつて、壯丁の一人を騎兵に採用しようと考えた。検査官「君は何にか、馬が好きかな？」壯丁「ハイ、慈があれば五斤もたべます」といふ答のもつ笑は「君は、馬が好きか？」と問はれたのに對して、讀者の心は「馬が好きです」と答へるだらうとか、或は「馬はまだ乗つたことがないので怖くありません」と答へるであらうとか、既にその答を先走つて豫想してゐるのに、壯丁の答は全く脱線的であり、その豫想に譬餅をつかせ、逆戻りし、轉轍せねばならぬならしめる。若しそれを心理學者のリップスに言はせるならば、その心のまごつきと落ちとに、笑があると云ふことになるであらう。そしてそれは單なる笑ではない、その答の馬鹿らしさに對する微笑がある。威權振つて嚴しく構へてゐる検査官が「慈があれば五斤もた

べます」といふ答に、どんなに面喰つたか、「態ア見ろ」といふ權威に對する反感の慰めから起る冷笑がある。そして又その壯丁の愚鈍さ加減に、その認識の不足さに、嘲笑と憫笑とを讀者諸君は味はひ得るのである。

牧師「トムさん、その瓶の中に入つてゐるのは何ですか？」トム「あゝこれですか、ウイスキーです、半分は弟ので、あとの半分は俺のです」牧師「いけません、酒は悪魔の飲物です、貴方の分だけでも、今ここでお捨てなさい」トム「それがどうも、弟の分が上の方にあるので、俺のは底の方にあるので……」吾々は牧師のいつもいやに道德家面をしてゐるのに反感を持つてゐる、だからトム公うまく斷つた、と微笑を持つことが出来るか、さもなくば上の半分、下の半分同じではないか、とトム公の馬鹿正直に嘲笑を持つことが出来る。

詩人「ある者は名譽を、又あるものは富を、更にある者は戀を、人は何かを渴望するものである」女中「それよりか、世界の誰ももが渴望するものがございますわ」詩人「それは、何だね一體？」女中「鹽魚を食つたあとの水でございます」簡單のことを強ひて意味深長に表現しようとする詩人に、吾々の底深き嘲りがある。女中の平凡の答に吾々の凱歌がある。

晦日の夜、橋の下に焚火をして燠をとつてゐた乞食の夫婦がある。乞食の女房「この寒いのに旦那様方は、掛取に忙しうにあらちらと、走つておあるきになる、だのにおらはまあ、取る金とてないので、かうやつて焚火にあたつてゐられる」乞食すつくりと立ち上つて、女房を見下し様に「それも皆な誰のお蔭だと思ふ」と誇らかに云ふ。そのとんちんかんの誇りに笑がある。親爺がどこまでも女房に恩を着せ、威張つて見たいといふ、男の女に對するイデオロギに放たれた皮肉がある。

外交員「奥様、盜難豫防器は如何でせう」奥様「宅では不用よ」外交員「さうで御座いませうとも」奥様「え？」外交員「何にお隣で買つて頂きました時、お宅へ行つても駄目よ、何も盗まれる品物なぞないんですからつて、伺つて参りましたんですけれど、まさかと思ひまして……」奥様「さう、隣でそんなことを云つたの、まあ失禮な、一ついくら、安いのね、五つばかり置いて行つて頂戴……」女の虛榮心に對する哄笑がある、外交員にしてやつた狡猾さに對する冷笑がある。吾々は常に言はんとしてゐる冷罵を、吾々に代つてナンセンスは、あらゆる癩の種子といふ種子に、遠慮なく振掛けて呉れてゐる、そしてそこに愉快がある。

幕が開く、一人の男が銃を肩にして、花道から舞臺へやつて来る。背景は森林、前景に二三本の立木がある、あちらにもこちらにも鳥の啼聲がする、彼はあちらの枝こちらの梢を見あげやがてその銃を肩から下す。狙つた、轟然一發、鳥が落ちるだらうと、観客は豫期した、だのに、音たてて落來つたものは、一枚の大鯛である、観客は啞然としてゐる、だが彼は、さも得意さうに、その鯛をふりあげて、舞臺から下つて行く、といふナンセンス劇のもつ皮肉と笑と諷刺とは、その男の不合理に對する哄笑であると同時に、社會が餘りに合理的なのに對する嘲笑である。

又それはアフリカの森林での話である。二匹の大きな蛇が喧嘩をやつた。やがて二匹は噛み合ひをやめて、お互に對手方の尾から呑み始めて來た。蛇は同じい大きさである。青い蛇が黒い蛇を一寸呑むと、黒い蛇も劣らずに青い蛇の尾を一寸呑んで來る、二寸呑むならば又二寸呑んで來る、とうとう青い蛇が黒い蛇を全部呑んで了つたその瞬間に、又黒い蛇は青い蛇を全部

呑込んで了つた。そしてそれと同時に二匹の蛇は消えてなくなつて了つた。といふ呑まれて胃腑の中にある蛇が、その胃腑を持つてゐる蛇を呑んで了つたといふやうな、ナンセンスの話は、合理論者に對する諷刺である、總てが論理的に進行するものと獨斷してゐる男への教訓であり、皮肉である。

男「昨夜、僕は世界中で一番美しい女と結婚した夢を見ましたよ」女「まあ……、そしてあなたたちは幸福だつて？」といふ小話、女「Wさんが私たちの結婚を祝つて贈物を下さつたわ」男「細君が死んだ時、僕が香奩を遣つたことがあるんだよ、だから、そら、お互に不幸を助け合はうといふ意味なんだらうよ」といふナンセンス、或は又未亡人「あたくしみたいなお婆さんとダンスして下さるなんてほんとうにお優しい、ほ……—お禮申し上げますわ」男「いえなに、何う致しまして、今夜は慈善舞踏會ですから」といふ對話、蟹地を旅行しながら細君が甘えて、「ねえ、あなた。今蟹人が襲つて來てあたしを掠つて行つたら、あなた、何うして？」亭主「莫迦な、そんなことはあり得ないよ」細君「でも、もしか掠つて行つたら、あなた何うなすつて？」亭主「あ——まづ蟹人を憫むね」といふ小話に、吾々が感ずるナンセンス味は、

女の自惚に對する反感の氾濫に外ならない。

X

強盜をやつた囚人が、刑務所で十字架のキリストを見て「看守さん、あすこにブラ下つてる男は、この刑務所でやられたんですかね」「あの男？ この刑務所で、馬鹿野郎！ あれはな、イエス・キリスト様だ、この罰當り奴が」と怒鳴られた彼は、病氣になつて出獄が許可されて、ある町の慈善病院に入れられた。そこで彼は立派な髯を生やしてゐるキリストの額を見て「看護婦さん、あれはこの病院の院長さんですか」「まア、あの方を御存知ないんです、この世をお創になつた天のお父様ですわ、吾等の主、キリストのお父様ぢやありませんか」「ぢやキリストのおやぢぢやね」「さうよ、お父様よ」彼は病も癒えて久方ぶりで娑婆の風に當り、ある所に遊びに出かけた。するとその女の部屋に、子供を抱いて、おそろしく上品な婦人の繪が壁にかゝつてゐた。「こいつあ此家のお神さんか、まさかおめえぢやあるまえ」と女に問ふた、「なんですつて、まあ馬鹿だね、これはマドンナぢやないの」「何んだね、そいつは」「キリスト様

のお母様よ、主イエス・キリスト様を處女で身ごもり給ひし、やんごとなき方なんぢやないの」「さうか、ぢやキリストのおふくろだね」そこで彼は考へた、どんなにキリストは偉いか知れないが、息子は刑務所で、親爺は病院に、おまけにおふくろはあいまい屋にゐるなんて、何とみじめな一家なんだらうと。そしてそこにはその強盜囚の無知にかこつけたる宗教の冒瀆がある、キリストの冒瀆がある。勞農ロシヤが、マリヤの像を賣り、十字架を鑄造して馬蹄鐵を造り、修道院を種馬の飼育場に改造し、教會を無神論者の學校に改造し、聖徒のミイラと、豚及び土鼠のミイラとを、宗教博物館に並列してゐると同様なる、宗教威權に對するするき反逆であり、そのするさに吾々は微笑を持つのである。

近代人彼等は、總ての點に於いてするさを學んでゐる、トリックを好愛してゐる、故に瞞着し、ペテンに掛けることによつて、自己の智慧の僞英を自負しようとし、私に享樂し、誇示しようとする。だから又近代人は總ての出來事をもナンセンスに化することによつて、輕快に皮肉らうと企圖し、攻撃しようとする。だから又人々は、そこに厭しき超弩級の顔に、全く空虚なるセルロイド式の頭を乗せ運んでゐる、ナンセンス型の男を主役として、如何にして四つ

の男爵だんぎやくを拾ひろはんとするかのナンセンス劇げきをば、見みることが出で來きるといふ。或あるはさうかも知しれな
い、と私わたしも新聞しんぶんを毎まい日にち讀よみながら思おもつてゐる。

近代人の好奇心

××6××



好奇心の作用に就いて、始めて私の好奇心をそよつたものは、一昨年の末東京日日新聞紙の通俗講話欄に四回に亘つて掲載された所の、松村松年博士の「好奇心」に関する談話であつた。殊に私は「南米のアマゾン河で、土人が放尿すると、二寸位のヴァンデラと稱する小鰻が、尿道にもぐりこんで取れなかつたことがある。それは冒険のためであらうか、そもそも好奇心からであらうか、鰻は水源にさかのぼり、池沼に達する生來の衝動を有するものであるから、放尿道をば小さな瀧流れと考へあやまり、それをのぼつたとも考へられる。して見ると鰻や鯉の瀧のぼりと同様に、一種の冒険であるやうである」といふ一節を讀んで、放尿の流に奇異の視線を放ち、全身を好奇心にわなゝかせながら、尿道に向つて突入した所の小鰻の心理状態を想像し、私は又驚異の感に囚はれざるを得なかつた。然し私は今翻つて、この小鰻の好奇心よりもそこに博士の好奇心を發見し、更に進んで自分自身の好奇心をも亦そこに見出さざるを得ない。好奇心、それは斯くの如く、又後にも述ぶるが如く、動物殊に高等なる動物に普遍的存在

を有する本能である。今吾々はこの好奇心が、動物に如何に表現されて來るかを考察する前に、先づその好奇心とは何であるかを明かにして置かねばならない。

好奇心とは何であるか？ その解答は容易の如く考へられて、而も決して容易ではない。英語ではそれを Curiosity と呼び、佛蘭西語はそれを Curiosite と呼び、伊太利語は又それを Curiosita と呼んでゐるのである。そしてそれ等は共に羅典語の cura と osita とから化生したものと考へられる。cura は「注意」「用意」「懸念」「心配」「迷惑」及び「悲しみ」といふやうな意味を有し、osita は「多きこと」を意味してゐるのである。従つて人は用心せねばならぬ所のもの、懸念せねばならぬ所のもの、迷惑となり悲しみとなつて來る所のもの、即ち明かに知られてゐない、又如何に變動して來るかも知れてゐない所の原因を知らうとする。こゝに curiosita は「知りたがる心の焦燥」を意味して來るのである。然るに獨逸語の Neugier は、neu と gier とからなり、neu とは「新しいこと」であり、gier とは「渴望」であるから、それは「新しいことを渴望する心の傾向」を意味するものとなつて來るのである。又好奇心といふ文字に就いて考へるならば、奇を好む心である。そして奇とは、大可であり、大に可いものを意味してゐるので

ある。然るに大に可いものは、多くなく一つであり、普通でない。すぐれてゐて珍らしく、他のものと異り變つてゐて、不思議である。それ故にそれは不可解であり、意外であり、怪しく、祕密であることをも、意味するやうに變化して來たのである。換言すればそれは普通ではない、ありふれてゐない、熟知されてゐない、即ち知られてゐないことであり、好奇心とはその知られてゐない、それを知らんとする欲求であると考へられる。この意味に於いて、レーは好奇心とは、知らんとする本能的衝動である、といつてゐる。そしてこの未知の事象を知り、熟知されてゐないことを熟知しようとする欲望は、取りも直さず智慾であるから、キルクパトリックのいふが如く、好奇心とは、智慾の衝動であり、本能であると言ひ得るのである。

然るにジエームスは、獨逸語の Neugier が意味してゐる如く、好奇心とは、新しきものに淫せんとする本能であると述べてゐる。茲に吾々は、新しきものとは、何であるかを考へる。新しきもの、それはそれを感じし認識する人々にとつて、最初のもの、即ち未だ経験されなかつたものでなければならぬ。けれども吾々は又こゝに、即ち「渴望すること」と「淫せんとすること」との二つの心理的傾向の間に、區別をなす必要に迫られる。渴望するとは、未だ

得ざる所のものを得んとする心の傾向を意味し、淫するとは、既に得たる所のものに、執着する心の傾向を意味するものであるからである。従つてジエームスの言ふ所は、未だ経験されなかつた事象をば、一旦感受し、認識するに於いて、それに執着せんとする本能を、好奇心となすのに反して、Neugier とは、未だ経験されなれないものを、経験せんとする欲求である。假令、マクドウガルのいふが如く、總ての差異は、多く程度の差であるとしても、一旦感受し認識したものに、執着せんとする心の傾向と、それが熟知せられない間、即ち未知の事象が残存してゐる間、その未知の事象を穿鑿し、考究せんとする本能的衝動とは、相類似する如く考へられて、而も嚴別せらねばならぬ。

そしてこのジエームスのいふ所は、愛新性 (Philoneisime) のそれと似通ひ、愛新性は又こゝに好奇心と似通ふてゐるのである。愛新性、即ち新しきを愛し、新しきを尊重するといふことは、その新しさが、より快感を伴ひ、又より役立つからであらねばならない。何故にそれは、より快感を伴ふか？ それは確に感覺を算術級的に強める爲には、その刺激を幾何級的に増加せねばならない、といふ法則によるものである。故にその刺激が、幾何級的に増加せざるに

於いては、その最初の感受或は認識が、最もより多量の快感を齎すのである。然しながらその時間の経過につれて、刺戟はその強さに於いて、同一であるにも拘らず、その感受は、次第に弱きものと變ぜざるを得ない。若しこれと反対に、その刺戟が不快のものであり、苦痛のものであるならば、新しき刺戟は、それが新しいだけ、より大なる不快、より大なる苦痛を呼び起して来るのである。それ故に新しきものは、或は更に排新となるのである。又人はその年若き時代に於いて、心理的にも生理的にも、その成育を助長する爲に、強き刺戟を要求し、従つて愛新であり、その年の長するに伴つて、強き刺戟が、彼等に忌避されねばならないから、必然的傾向に走り、慣習に流れ、憎新性の力を増大して、遂に愛新性を感倒するに至るのである。

然るに好奇心は、元來物の利害に拘らず發動する、と考へられたるが如く、未知のものを知らんとするのであるから、それを感じ、或は認識したる結果に於いて、利であるか又は害であるかを豫知し得ない。それと同じく、初めて知らんとするもの、即ち新しきものが與へる所の刺戟が、快であるか又は不快であるかを前知し得ない。そこにどうしても吾々は、好奇心と

愛新性との概念に於いて、分岐點を見出さねばならない。又これと同時に、吾々は好奇心と恐怖心との區別を考へ、進んで冒險心及び射伴心との區別を、夫々考へ置かねばならない。この三者は、共に未知の事象に、その結び目を有することによつて、好奇心と洵に混同され易い。前にも述べた如く、マクドウガルは、總ての差異を程度の差によるものであると考へ、好奇心の刺戟と恐怖心の刺戟とは、相區別し悪い。何故ならばそれは共に奇異の事象、即ち普通でないことどもによつて、招來されるものであるからである。唯その刺戟が小なる時には、そこに好奇心を誘發せしめ、進んで大なる時には恐怖心を呼び起して来るのである。従つて前者は、人をして未知の事象に近づかしめ、後者は反對に、人々をしてそれより、より遠ざからんことを焦慮せしめて来る、と論じてゐるのである。

然しながら吾々が、若し大なる刺戟に遭遇して、そこに好奇心を誘發せしめ得ないであらうか？ 多分それは、その本質に於いて刺戟の差の大小によるものではない。未知の事象、それは快、苦、利、害に於いて未定である。換言すれば、苦痛と災害とを齎し得る可能性を有してゐる。故に又そこに不安が感ぜられる。そしてその不安の小なる時には、それは餘り意に介さ

れない。けれどもそれが大である時には、恐怖心と變じ、未知の事象に對して、同時に發生した所の好奇心の強さを、貸越して來るのである。「恐さは恐し、見たさは見たし」といふ心境は未知の事象に對して、好奇心と恐怖心との二つの衝動が併發するものであることを語り、人々はその併發に氣附かずして、二つの衝動の合成力、或はその代數的和を意識し、それによつて動かされるものと、考へるのである。

次に吾々の神経系統は、變化ある刺激を求めて止まない。今、若しその生活が充分なる興奮を與へ得ないならば、人々は進んでそれを探求しようとする。そしてこの興奮を與へ得るに、最も適するものとして、その成否が未知數に屬し、而も危険である所の事象が、選擇され勝である。

この時に際して發動し、それをなすことによつてその興奮を享受し、且つ自己の能力をテストせんとするものに、冒險心がある。又事象の成因に對して、人智を以てしては到底知られない所のものを考へ、従つてその結果に現れ來る變異が豫知し得ないといふ所に、營利の望を繋ぐものとして射伴心があるのである。けれどもこれ等の心理的傾向は、未知の事象、そのも

のを知らんとし、知るその過程の中に目的を有する好奇心のそれと、似而非なるものであることに、吾々は注意せねばならない。

* McDougall, Social Psychology, PP. 57—8.

** Weeks, The Control of the Social Mind, PP 130—1.

x

却説。この好奇心は如何にして發生して來るか？ 多くの學者の説く所によれば、それは本能によるものである。然らば又本能とは、如何にして人類に具有されて來たか？ 本能とは、その種族に共通なる心の生來的特殊の傾向であつて、幾世代に亙り繰返された所の自然淘汰によつて、確立されて來た目的に應ずる能力である。故に又本能とは、遺傳より來る單なる力であり、刺激に對する遺傳的構成の反應であると考へられる。

従つて吾々人類の有する本能は、高等なる生物、即ち人類の祖先が、或る一定様式の行爲を久しきに亙り、且つ幾度か幾度かそれを繰返すことによつて、遂にその一定様式の行爲、換言

すれば甲の刺戟に對して、乙の反應をなすべき過程が一定化されて來るのである。而もその慣行は、生物進化の成因であり、幾世代を重ねるに伴ふて、その心理的傾向は愈々大となり、腦裡に穿たれた所の思想的運河は、次第に深く廣く切通され、遂には人意淘汰によつて、一旦トゲサポテンからトゲナシサポテンに化成されて來ると、そのトゲナシサポテンの種子は、又トゲナシサポテンに成長するが如く、遺傳性をなし、未だ經驗し或は練習せざるに先だつて、その思想的運河は開展し、習知せざる所の活動をばなさんとする、生來の傾向も生じて來るのである。

斯く考へる時に吾々は、好奇心が——社交本能に對してラプロープが述べてゐる如く——動物社會より遺産として人類社會に贈られたる、本能であることに氣付き、進んで動物社會に於いて、この本能が如何にして化成されて來たかを考へねばならない。勿論それは、前にも述べし如く、屢々繰返され、慣行されたからである。然らば何故にそれが繰返され、慣行されたか？ 或事象が未知の分野に埋没してゐるのに任せ、或は又それを熟知することなしに、閉却し去る場合には、往々それが爲に生物の生存は、意外の出來事によつて脅威され、多大の不利

と災厄とを蒙らねばならぬことが往々にあつたからである。然るに生きとし生ける者は、等しくその生存に執着し、従つて生物は必ず、この未知の事象を知ること努力せねばならなくなる。而もそれを知り得るといふことは、生存の爲に幾多の利便を伴ひ、斯くしてそれは幾度か幾度か繰返されることによつて、動物の心理に好奇心の本能を化成して來たのである。そして一旦この未知の事象を、知らんとする所の好奇心が本能となつて來ると、その本能に従つて行動することが、満足と快感とに値し、反對に、その本能的行動が阻止せられる時には、必ず、不満となり、不快となり、苦痛となつて來るのである。それ故にこの本能は加速度的にその發現の度數を増加し、その力を大にして、高等動物をば絶えずその方向に動かし、進んで人類社會にまで、それを遺傳せしめて來たのである。故に又吾々は、先づ動物社會に於いて、この好奇心が如何に現れて來たかを考へて見る。

マグドゥガルはそれに就いて、次の如き實驗をば吾々に奨めてゐる。誰でも若し好奇心に囚はれてゐる動物の有様を見ようとするとするならば、多くの家畜、即ち牛や馬や羊共が、草を食むでゐる原に寝轉びながら、常に聞き馴れてゐないやうな奇聲を、とぎれとぎれにあげねばならな

い。斯くすることにより、やがてはその聲を中心として、多くの家畜共が、或隔たりを保ちながら輪をなし、耳を翫て、目を睜り、彼等の好奇心を可立たせつゝ、その対象物を圍んで娯集して居る所を發見し得るであらうと。

又、ダーウキン次は、の如く吾々に語つてゐる。總ての動物は驚異し、好奇心によつて衝動される。殊に彼等は、彼等の好奇心の強きが爲に、時々災害を蒙るのであつて、狩獵者は其好奇心を利用し、特に奇體な服装をなし、或は道化散らして、彼等を近くに誘き寄せて來るのである。そして私はそれを鹿によつて證據立て、羚羊や野鴨の一種に就いて實證したのである。ベルエムは、猿が蛇に對して表した、本能的恐怖に關して面白い報告をなしてゐるが、然し又猿の好奇心は非常に強大であつて、彼等のその恐怖心を以てするも、それを壓倒することは出來ない、若し蛇をつめた箱をば彼等に與へるならば、彼等は必ず恐怖しながらも、その蓋を持上げると述べてゐる。この報告は、私を非常に驚かしたのである。そこで私は、トグロを巻いた刺製の蛇をば、動物園の檻へと入れて見、そして私は、今まで觀察したことのない程、彼等が興奮し切つた奇異の光景を目撃し得たのであつた。三種類のセルコピシコスは驚愕し、檻の中を

逃廻りながら、外の猿共は理解の出来る、鋭い危険を知らせる叫びを張上げた。唯少數の若い猿と、一疋のエニウビス狒々とが、その蛇に何等の注意を拂はなかつたのである。次に私は又その刺製を、より大きな檻の床の上に置いて、その成行を見たのであつた。暫くすると總ての猿共は、大きな輪を描いて集り、そして熱心にそれを見詰め、殆ど吹き出したいやうな、滑稽の態度をなして來たのである。又彼等は明かに神經過敏となつて、彼等が常に玩具にしてゐる木の毬が、床に敷いてある藁に半分隠れながら、突然動き出すと、彼等總てが直ちに逃げ出すのであつた。これ等の猿共は、死んだ魚、二十日鼠、生きてゐる龜、其他目新しい物をば、彼等をなしてゐるが、直ぐとそれに近附き始め、手に取つたり、或はそれを調べて見たりするのである。私が會て、紙袋の中へ生きた蛇を入れ、その袋の口をしつかとねちて、大きな檻に投入された時に、一疋の猿は直ちにそれに近附き、用心深くその口を少し開いて、それを覗き込むのである。而もそれを覗き込むや否や、投出して逃廻つたのである。私はこゝにベルエムの述べてゐることを證據立つた。何故ならば、猿共は、頭を高く上げ、それを一方に傾けながら、

順序に恐るべき物をその底に横へ、直立してゐる袋を、一寸づゝ覗かすにはゐられなかつたからである。そして猿は、他の動物に比して、その智能が発達してゐる。それだけより強き好奇心を有してゐるものと考へられる。

其他動物の好奇心に關して、幾多述べべき事象が擧げ得られるであらう。駝鳥はその好奇心の爲めに、騎射の獵夫に追ひつかれ、鷄は、柴垣の下より出されたる狐の手の頻りに動くのに引寄せられて、その犠牲となり、小魚は、鮫鱈の餌の微動するのに不審がる餘り、鮫鱈の腹を肥すの餌食となるのである。斯くの如く、動物が既に具有してゐた好奇心の本能は、生物進化の過程に添ふて、原人より野蠻人に、野蠻人より未開人に、未開人より文明人にと、相傳へられて來たのである。

* Ellwood, Sociology in its Psychological Aspects, P. 105; Darwin, The Descent of Man, P. 160; Hobbouse, Mind in Evolution, P. 53.

** Thorndike, Elements of Psychology, P. 15.

*** Darwin, ibid., Pp. 109—110.

x

ウォードは、野蠻人が知識に對して、何等の欲望を有してゐない、そしてその曙光とも見らるべきものに、好奇心と驚異心とがある、と述べてゐるのである。若しそれが誤りなき考察であり、野蠻人と未開人、未開人と文明人との區別が、彼等の有する知識の程度に依つてなされるならば、野蠻人が未開人となり、更に未開人が文明人となる、その最初の推進力は、好奇心に依るものであるといふことが出来る。野蠻人或は未開人の腦は、その發達に於いて不充分であるから、知られない幾多のものを有し、又ブツシメンの視力、インデアン人の聽力、ギニア人の足跡を探る力の如く、その五感は鋭敏であり、その思惟及び行動は反射的であるから、好奇心を喚起すべき幾多の刺激に富んでゐるのである。けれどその反對に、その思想は、懷疑的階段にまで充分開展してゐないから、或未知の事象に對して、その原因及び結果を考察しようとなし、唯彼等が珍奇のものに出會ふならば、單にその時驚くのみであつて、而もその驚きをば持續し得ないのである。例へばブツシメンの如きは、初めて鏡を見、その中に自分の顔を見

して大いに驚くのである。然し小兒の如く、その裏を返して見ることすらなせず、毫もその映り来る所の理由を知らうとはしない。けれども世代を経るに従つてその腦は發達を來し、稍々進化して野蠻人より未開人へと進むにつれて、次第に好奇心を伸長し、ニューカレドニア人の如く、ニューギニア人の如く、又はマレヲ・ボルネシヤ人、ダイアック人、サモア人、タヒチー人どもの如く、非常に好奇心を増大して來るのである。

チンパーレンのいふ所に依れば、この好奇心に關しては、原始人と小兒との間に相似通ひたるものがある、即ち原始人の間に於いては、新しき物或は未知の人々に對して興味を感じ好奇心を起し、そしてそれが急激の勢ひを以て傳波するのである。これと同様に小兒は見馴れない記念品又は畫に依つて、直ちにその興味と好奇心とを喚起して來るのである。そしてそれは、ジエームスの説くが如く小兒と野蠻人及び未開人とは、その心理の發生的進展に於いて、同一程度の過程を辿るものであるからである。従つて嬰兒より小兒となり、小兒より少年となるにつれて、又益々その好奇心が大とならざるを得ない。この小兒の好奇心が、大であるといふことは、昔より人々によつて、成年のそれよりも却つて注意が拂はれて來たのである。ギユーヨー

は「小兒は生來好奇的である」と考へ、フェネローンは「小兒の好奇心は、教へるに先だつて生ずる所の自然的傾向である」と述べ、ブルーターク及びリポーは、又この好奇心が小兒に盛んであつて、而もそれが本能として、最初に必要缺く可からざるものであることを、切論したのである。

却説。この小兒に現れてゐる好奇心は、少年となり、成年となり、文明人となるに従つて、益々増大されて來るのである。何故にそれは増大されて來たか？一言を以てすれば、それは今迄發動して來た好奇心の結果である。何故ならば、ワードのいふが如く、科學は、説明し得ない現象に對する好奇心から始まり、そして科學的研究は、次第に未知の事象のより多く存在することも、氣附かして來たからでなければならぬ。而もそれは知識の退歩を意味するものではなく、知識の進歩によつて、今日まで理解されてゐたかの如く、考へられてゐた事象も、變じて不可解のものとなり、科學の力によつて到達し得ない不可知な或物が、換言すれば、科學の光りの浸透し得ない深海の存在が、發見されたからでなければならぬ。そしてそれは、文明人の好奇心をば盛んにして來た順當的主因であると考へられる。

文明人は、——後に述ぶる副因或は不願當の原因にも依るけれども、——兎に角、非常に強き好奇心を有してゐるのである。この文明人の好奇的生活は、これを特に都市生活に於いて見ることが出来るのであつて、殊にこの都市生活に於ける好奇心の疥癬的痛痒さ、即ちもどかしさは、偉大なる傳染力を有してゐる。何故ならば人々は、彼等が頗る複雑なる社會關係に於いて生活し、如何なる瑣小事と雖も、如何なる影響を自己の利害に及ぼすやも計り知れないといふ、社會連帶の關係を有してゐることを、暗々裡に意識して居ると共に、模倣本能によつて助長せられ、且つ心理的に情操は、觀念又は意見よりより傳波的であり、人々はこの感情の琴線に觸れることによつて、より統一せられる大なる傾向を有してゐるからである。今若し一人の者が、人々の雜鬧する街で、手を翳しながら、ちつと向ふの塔で、石工共のやつてゐる作業を見るならば、必ずものゝ三分とたたぬ内に、數百人の人々が、その者が何に興味を以てゐるかを知らんが爲めに、立ち止つて、向ふの塔を見上げるであらう、とその傳染力の偉大さに就いて、ロッセは述べてゐるのである。

又この都市生活と好奇心との關係に就いて、倫敦人のそれが引用される。大抵の倫敦人は可

愛さうな人間の部類に屬してゐる。彼等は非常に無學で、何かすると“God save the King.”と叫ぶことより外に何物をも知らない。

若し一人の男が帽子を街頭で吹き飛ばすと、何百といふ群衆が集つて、叫び立て、不幸の男がその帽子を拾ふまでは嘲笑する。若し又一人の者が、何かを落とすと、その音のした方に、群衆は走り寄り、その者がその破片を拾ひ上げるまでは、佇んで非常に楽しみを持ちながら眺めてゐる。……彼等は亞米利加の黒人の貧民階級と、その點に於いて殆ど同じ特質を有してゐる。大群衆を集めるには、銅鑼太鼓をたたくに限り、多くの人々は立所に集り、その太鼓がたたかれてゐる間、その後へ後へと繋がつて来る。そしてその音の止むだ時に、漸く嫌々ながら分れて行くのである。これは單に倫敦人のみの特長ではない、移して又我が東京人、所謂江戸子の特長とすることが出来る。若し吾々が朝、兩國橋より一個の石を投じて去る時には、その後より来る者は、その投石の音に驚き、欄干より水面を覗き込む。又その後より来る者は、その男が何を覗き見しやに好奇心を喚び、再び水面を覗き込むのである。斯くして彼等は、次ぎ次ぎにとその日の暮れるに至るまで、朝投ぜられたる一個の石の爲めに引附けられる。又彼

等は、ペンキ屋が屋根看板を書くのを見る爲めに娯集し、屢々自動車の通路を遮断しはしなかつたか。溝泥を浚ふ改浚機から引きあげられる泥に興味を持ちし爲めに、その出勤時間をば遅刻しなかつたか。犬の喧嘩或は酔漢の足どりを氣にしなから、友の危篤に駭附けつゝあるを忘れはしなかつたか。彼等は何故に火事と喧嘩とを見ることを最も好むか。それは最も變化に富み、如何になり行くか、一瞬の前と雖も未知の事項に屬し刻々と移行行くからでなければならぬ。又彼等が小説を耽讀し、活動寫眞に淫するもの、その筋に變化があるからであり、その先々が不安で充されてゐるからである。「男子讀む可からず」「獨身者飲む可からず」といふ廣告は、却つてその本をば男子に讀ませ、その樂を獨身者に愛用せしめはしなかつたか。「匿すより現はるはなし」との古語は、この間の消息を語るものである。

タルドは、又吾々に語る。好奇心が群衆に對して如何なる役目を持つてゐるかを、——嘗ては極く詰らぬものゝやうに聞いたものも、今、一人の者が珍しさうにするならば、彼等は直ちにそれに就いて、その一人の者が珍しさを感ずる所のものが、何であるかを知らんと熱望して來るのである。そしてこの運動は非常に早く擴がり、相互作用の努力を通じて、それが擴まれ

ば擴まる程、各人の熱望は次第にその強大さを増大して來る。何時でも新奇なもの、例へば説教、政治的綱領、哲學的思想、商品、詩、小説、劇、歌劇、それが何であつても、注意を惹き易い場所に、例へば都會に現れるならば唯僅に十人の人々がそれに注意することにより、よしその注意が表面的であつても、必ずそこに百人、千人、萬人の人々が興味を起し、それに昂奮し熱中する。而も時として、この現象はヒステリックの性質を帯びて來るものである。十六世紀に獨逸の笛吹きブヘムが、友愛的平等と財貨共有の福音を説きはじめると、その爲めに流行的離郷病が蔓延したのであつた。「職工はその工場から走り、農婦は鎌をその手にしながらやつて來た」と新聞が報道すると、數時間にして三萬人以上の人々が、何等の食糧をも用意せず荒野に集つて來たのである。斯くの如く好奇心に捕はれて、人々が一團をなして來るといふことが、古來幾多の宗教運動に於いて、政治運動に於いて、美術、産業の運動に於いて、遂に革命を持來すに至る縁口をなして來たのである。——と。

吾々はタルドによつて、こゝに擧げられたるが如き現象を、又馬可傳第八章に於いて、讀むことが出来る。そのみならず一九二〇年十一月、ニュー・オルレヤンスの大公園に於いて、

ブラザー・エザイヤを中心とし、日の出より夜更けまで、五六萬の群衆が、總ての草を踏躪り切るまで立ち通し、押合ひへし合つた所の光景によつても、如何に人類が、その好奇心によつて、興奮せしめられて來るかに、驚かざるを得ない。

* Ward, Pure Sociology, P. 445.

** Spencer, Principles of Sociology, Ch. VI.

*** Plutarch, Morals, Vol. III, P. 315; Ribot, La psychologie des sentiments, P. 60.

**** Durkheim, De la division du travail social, P. 462.

△ 服部者外「言葉の裏」(アサヒグラフ第四卷第十等二二頁)。

▽▽ Tarde, Laws of Imitations, PP. 196—7.

▽▽▽ The Survey, Vol. I, No. 2.

X

好奇心、それは今迄餘り好奇心の對象とならずに看過されて來た。けれども社會生活に於い

て、好奇心の演出する役割は、諸種多様であつて、人生は、この好奇心の衝動に呼び起され、或は少くともそれによつて、伴奏されねばならない。殊に文明人となり、その生活が、都市を中心として開展される現狀に於いては、それは益々偉大なる力を有して來るのであつて、吾々はどうしても、こゝに好奇心が何故に、斯くその作用を強めて來たかを考へて置かねばならぬ。

先づ吾々は、動物より人類へと遺傳せられて來た好奇心が、野蠻人より未開人となり、未開人より文明人となり、殊にそれが都市生活をなして來るに伴つて、その好奇心を大にして來た所の原因を、主因と副因とに分け、それが都市生活をなして來るに伴つて、その好奇心を大にして來た所の原因を、主因と副因とに分け、それを夫々順當的原因と、不順當的原因とに分けて考へて見たいと思ふ。

好奇心の力を大にして來た主因は、好奇心そのものの中に存する、即ち内在的力であらねばならない。この主因而もその順當なるものとして、本能の加速度的増進をあげねばならない。この本能は世代を経るに従つて、個體に於ける發現の時を、加速度的に早めて來るのみでなく、その質に於いてその量に於いて、その力に於いても亦、加速度的に増大せざるを得ないからで

ある。而もそれが増進するに従つて、第三節に於いて既に述べたる如く、科學的研究を盛にし、科學的研究は人間思想の開展をば招來し、こゝに思考方法は、次第に自覺的懷疑的となり、思辨的批判的となり、未知の事象のより多く存在することを發見して來るのである。斯くして未知の事象の存在と、これを知らんとする愛智的本能との發動は繰返され、この繰返しによつて、又その本能は遺傳的に高調されねばならなくなる。

又吾々は、そこに不順當の原因として、刺戟の非常に多く、次第に強くなり、且つその變化の極りなき近代都市の生活より來る神經の興奮、そしてそれより來る神經の疲労、この疲労より結果せしめられる神經衰弱、その神經衰弱より來る神經の過敏さを考へねばならぬ。そしてこの過敏さは、ヒステリーの性質を有し、殆んど如何なる瑣事に對してまでも、極度の好奇心を起さしめて來たのである。

然しこのヒステリーより來る所の變態的好奇心は、非常に瞬間的流動的であつて、飽き易く、そこに常態的好奇心との區別がなされねばならない。

次に副因、それは好奇心の本能、そのもの以外より、この本能を刺戟し助長するものであつ

て、その順當の原因としては、(1)餘剩勢力、(2)優越慾、(3)社會の複雑性を數へ、その不順當の原因として、人性の有する三つの性質、即ち(1)律動性、(2)反動性、(3)事大性とを考へねばならぬ。

餘剩勢力とは、器官内に溢れてゐる勢力であつて、それは何等かの活動によつて、發散しよう發散しようとする。それ故に發散すること、それ自身が目的となり、従つてそれをなすことそれ自身が、享樂の過程となつて來るのである。この衝動によつて好奇心の衝動も亦、誘發され勝である。そして人々は各種の事物、その關係、その原因等の考究に熱中せしめられ、それによつて餘剩勢力が發散され、その考究の過程が享樂される。若しこれに反して餘剩勢力がなく、常に疲憊し、常に疲労を借越して、消耗せる體力及び神經力を、充分に恢復し得ないならば、感受力は日に減退し、何物に對しても一向好奇心を、起し得ないまでに進んで來る。これによつてこれを觀れば、餘剩勢力が好奇心を發せしむる副因として、閑却し得ないことは明かである。

優越慾は、殆ど人間の本能に近き欲望である。そして他人に優越するといふことは、生存に

對して有利である所から、それは常に快樂であり、これと反對に他人に優越せられるといふことは、生存するに不利である所から常に不快である。故に人々は、他人に優越する一つの方法として、自己の經驗を大にし、未知の事象を知り、自己の知識を擴大して置くといふことはこの目的を達するに適合するものである。それ故に、總ての常態人は、問題、即ち解答を要する事象に就いて、その解答を求めるに熱中するのである。更に進んでこの優越感が變態を呈して、誇示慾となつて來ると、社會的虛榮を満足せんが爲に、換言すれば、知つたか振りを示さんが爲に、この好奇心を助長する場合があるのである。

又、社會の複雑性は、社會の進化するにつれて増大して來る。由來社會は、他の社會或は又時として、自然的災害に對して、集團をなして争闘し、その集團内に於いて相互に扶助をなし、他の人類及び自然を征服し利用し、驅使し、變形しようとする。そしてそれが爲には、その集團内に於いて共同し、協力するの必要を生じ、又それを便とするのである。

斯くして社會は、相互影響關係の錯雜化を來し、文化の進むにつれて、到底人々は一個人、孤立的に生活することが出來なくなり、個人は非常に多くの關係を、社會の各部分、各分子に對して有して來るのである。こゝに一方社會關係に就いて幾多難解の問題が起り、他方これを知らずに放擲し置くことによつて、その個人の存立が非常に屢々脅威されて來るのである。故に人々は、一つの林檎の落つるに對しても、「何故か？」の疑問を發して見なければならなくなる。

次に不順當の原因として、先づ人性の有する律動性が考へられる。前にも述べたが如く、吾の神經系統は、變化ある刺激を求めて止まない。若し同一の刺激のみが持續される時には、人々は、ダーウケンが、「動物は興奮を享樂し、倦怠を忌避する」と云ひしが如く、忌避すべき倦怠に襲はれて來る。ウォードが、好奇心や驚異心は、活動をなさしむる社會的刺戟である、そして又誰しもその刺戟として、退屈より通れんとする欲求の影響を否定することは出來ない、と述べてゐるのは、この關係を意味するものとしても亦考へられる。即ち同一の刺戟、又は無刺戟の倦怠より通れんが爲に、人々は、次ぎ次ぎに未知の刺戟を追及し、そしてそれはそこに社會的律動となつて來るのである。

又、人性の有する反動性とは、私が嘗つてこれを、人間思想反對表現の法則と呼びしもので

あつて、現状と反對の方面に動かんとする心の傾向を意味するものである。例へば、それは秘密であり、見る可からず、聞く可からず、語る可からず、と嚴命される時には、所謂意地にて、それを見んとし、聞かんとし、秘密を暴露しようとする。隠す時には見んとし、見せんとする時にはこれを斥け、追はんとすれば却つて近づき、招かんとすれば逃げ失せんとするものである。今、性的器官を全部其儘に露出するよりは、全くこれを隠すか、又は一部分之を隠すならば、一層強く異性の性慾を刺戟し得るのであつて、是れ人々が直接その目にて見る處少なければ、少いほど想像する處が多くなるからであり、従つて又未知に對する好奇心が、より強く刺戟されることとなり、そこにそれを隠すべき衣服の起源をなして來たのによつても、反動性が好奇心を助長する副因の一つであることをば、認めねばならない。

最後に私は、人性の有する事大性に就いて述べる。事大性とは「大」に仕へんとする傾向であり、「大」に仕へんとすることは、「大」に權威を認めることであり、従つて社會の多數の者共と一致することが欲求されて來る。何故ならば、人々は群棲して、そこに安全さを感じる情操を有し、又彼等のなす社會生活は、同時に模倣によつてその第一歩が起されて來るからである。

そこに彼等は、社會の大多數が知つて、而も自己の知り得ざるものがあるならば、それを知ることの利害に拘らず、先づそれを知らんと渴望するのである。

以上の外、尙その原因として、數ふべき幾多のものがあるであらう。例へば、私はそこに消極的優越慾、即ち他の者を劣等なる地位に引下げて、自己の優越感を満足せんとする爲に、他の缺點、短所、弱點、秘密を探索して、それを公表し、嘲笑し、誹謗せんとする誹謗慾、情操の有する速かなる傳波性、資本主義的經濟組織の下に行はれる、極端にまで營利化されたる廣告或は新聞紙の類廢等を追加することが出来るのである。

斯く考察し來る時には、現代人の生活が、全くこの好奇心によつて推進せしめられてゐることを、吾々は認識し、將來益々その生活が、好奇化されて行くことをも、亦肯定せねばならぬと思ふ。

* Ribot, L'Évolution des idées générales, P. 220.

** Hellpach, Sozialpathologie als Wissenschaft, Arch. f. Sozialwissenschaft u. Sozialpolitik, 1904, Bd. 21.

H. 2. S. 294; Grotjahn, Soziale Pathologie, 1923, S. 305.

*** 拙稿「遊戯化の研究」(「經濟及商業」第三卷第一號一八〇頁)。

**** Bernard, Transition to an Subjective Standard of Social Control, P. 18.

▽ Bagehot, Physics and Politics, P. 212.

▽ Darwin, The Descent of Man, P. 180.

▽ Stein, Einführung in die Soziologie, S. 35.

▽△△ 拙著「反對表現の思想」三頁。

遊 戲 の 學 說

× × 7 × ×

X

遊戯の本質は何であるか？ それはその行爲の目的が在內的であるといふことである。換言すれば遊戯は、その行爲そのものをば享樂するものであつて、そしてその行爲は自發的であらねばならない。再言すれば、遊戯はその在內目的の爲にする自發的行爲であると云ふことが出来る。在內目的とは、或行爲をなすことによつて招來せられる結果を目的とするものではなくつて、行爲そのもの即ち活動をなすと云ふこと、唯そのことの内に愉快を感じ、満足を見出すことである。

例へば、子供が遊戯として、春風に凧を揚げると云ふことは、揚げると云ふことの外に目的はない。然るに若しフランクリンの如く、凧を揚げて、それによつて空中電氣の存在を確かめやうとするならば、それは一種の仕事であつて、純粹なる遊戯と云ふことは出来ない。即ちジョン・デウエーの云つてゐるやうに、活動それ自身の外に、よし如何なる種類の報酬の爲めであつても、その報酬の爲を意識に於いて遂行されたものは、遊戯と云ふことは出来ない。それ故

に遊戯には賞品を必要としない、そして今遊戯に賞品が與へられることになると、直ちにその行動は、それに在外的目的をば見出すことによつて、遊戯、それ自身の本質を失ひ一つの仕事と變性されて了ふのである。

又遊戯は、自發的であらねばならぬ、即ち他より強制せられたものであつては、その行動を遊戯と考へることは出来ない。自發的であるから、従つてその發露して行く方向は自由である。自由であるから、最も彼が好む所のものを選択して來るのである。彼は獨樂をまわすことを欲するから、獨樂をまわし、犬を追ふ代りに猫を追ふも、それは彼の自由に屬してゐて、外より強制されてはならない。

高田保馬博士は、遊戯の本質を説明して、それは第一に行爲の過程そのものが享樂の對象であることと云ふこと、第二に眞面目でなく、不眞面目だと云ふことであるとなし、ヘイスは、遊戯とは活動そのものの中に、満足を見出さうと云ふことの外に、將來の目的を有してゐない、そしてそれは、愉快に繼續し得る間の活動である。再言すれば、遊戯は自由で興味ある行動に於いて、表現される豫向 (Predisposition) の總計であると述べ、ウォードは、遊戯とは自發的

あり、能力の正規的活動による活動そのものの快樂である、そしてそれは、所謂遊戯本能の名を以て呼ばれてゐるけれども、それは本來の意味に於いて本能と呼べる可きものではないと論じ、エルウッドは、遊戯は本能ではない、それは多くの本能的傾向の自由なる官能の發露を、意味するものである、と考へてゐるのである。

茲に私は、これ等の諸説を批判するよりも、先づ寧ろこれ等の説を生ぜしめた所の遊戯の原因に就いて、考察する必要があると思ふ。

* Bogardus, Introduction to Sociology, P. 155.

** 高田保馬『現代社會の諸研究』七九—八〇頁。Hays, Introduction to the Study of Sociology, pp. 365, 220; Ward, Pure Sociology, P. 129; Ellwood, Sociology in its Psychological Aspects, P. 232.

X

何故に遊戯が發生するかと云ふことに就いては、高田保馬博士は、第一に餘剩勢力説、第二に加速度説、第三に他にまさらむとする本能説に分け、そして博士自身は、第三説をば主張し、

「他人にまさらむとする本能に基く行爲は、すべて遊戯であることも、ここに斷言しておけばよろしい」即ちマゴドゥガルが最も明晰にこの事を喝破して居るやうに、「まさらむとする欲望が參與すれば、一切の活動はみな遊戯の性質を有して來るものである」と主張されてゐる。又次にボガルドウスは、第一にシラア及びスペンサーの餘剩勢力説、第二にジョン・フイスクの反覆説、第三にグロオスの生活豫習説をあげ、第四には眞の説明は、その何れにも偏すべきではない、以上の三つの説は、皆な有力なる原因の一部を構成し、更に發見せられる新なる原因をも之に加へねばならぬ、と述べてゐるのである。

先づ私は餘剩勢力説から考へる、餘剩勢力説は、遊戯とは餘剩勢力(Surplus Energy)の表現であるとして考へるものであつて、而もこの説は既に羅馬時代に於いて考へられてゐた。即ち羅馬人は、遊戯とは生活勢力の自然的發露であるから、それは徒に抑制すべきではなくつて、却つて享樂すべきであると考へてゐたのであつた。然るにこの説は、降つてスペンサーに至り、彼はシラアの暗示に従つて、遊戯は其本質に於いて、餘剩勢力の表現である。即ち動物が、日常生活の爲に消費せられる以上の勢力をば有する時には、その勢力は次第に堆積して、それを

發散せしめずには居られなくなるものである。そしてそれを發散する手段として活動がなされ、従つてそれが發散せしめられてゐる間は、愉快の感じを伴ふて來るのである。だから人々はその發散の形式をば指示して、遊戯と云ふのであると説くのである。

然るにこの説は、次の如き非難を蒙つてゐる。即ち事の實際に於いて、少女が「繩跳び」と云ふ遊戯に於いて、疲憊の爲に斃れることがあるではないか？ 又一餘剩勢力が多いと遊戯が盛だと云ふことはなるほどたしかだが、その多いときには遊戯のみではない、他の眞面目な活動も盛であり得るのが常である。また遊戯には必ずしも餘剩勢力あるを要しない、それは動物の遊戯に於いて、屢々認め得られることである。また餘剩勢力だけでは、動物の各種に特有なる遊戯が如何にして起るかが説明せられない。」それ故に吾々は、この説をきつぱりと捨て、見たいと思ふ、と論ぜられてゐるのである。

次に反覆説とは、子供より成人になるまでの間に、心理發展の過程がさうであるやうに、行動に於いても、原始人より文明人までの人種的發展の徑路をば過ぎなければならぬ。それは恰もヘッケルが、胎兒生活に於いて、「個體發生には種族發生を経ねばならぬ」と論じてゐると同

じである。即ち子供はその遊戯の初に於いて、人種が野蠻時代であつた時の生活様式を経験する。そして次第に未開時代の生活様式を模し、遂には協同作戰を要するやうな遊戯に進み、相互扶助的競技に興味を有して、文明人の域に達して來るのである。ドオーも亦これを説明して、人類の祖先が或は野獸を狩り、或は動物と遊んだやうに、遊戯は、人類がなして來た進歩の諸種の階段をば取り、それを再び跡附け、それを再現して見るのであつて、それは又經驗再現説とも名づけ得るのである。然しこの説は、今日最早採用するべきではないと述べられてゐる。私も亦この説は、遊戯が何故に起り來るやを、説明するものとして有力なるものではなくつて、何故に遊戯が、その年齢によつてその行動の様式に差異を生じてゐるかを説明する、一助となるものであると思ふに過ぎない。

そしてそれはほんとうに一助力である、即ち遊戯の形式が、人間の生理的・心理的發展に伴ふものであると云ふことである。そしてこのことが、後に述べる所の私の遊戯の發生原因に對する考を、傍證するからである。

* Bogardus, Introduction to Sociology, P. 154.

** Hachinson, Introduction to the Psychology, Pp. 99—103; 拙著『反對表現の思想』三三一—六八頁。

*** Dow, Introduction to the Principles of Sociology, P. 300.

x

第三は生活豫習説である。グロオスによれば、遊戯とは、各種の生活事務に對する本能的用意である。小猫が鞠に戯れつくのは、それは大きくなつた時に、鼠を取る豫習である。即ち鞠に戯れることによつて、爪を發達せしめ、目の働きを整頓せしむるのである。又小犬が椅子の足にかじり付くのは、大きくなつた時に、骨を齧る練習である。少年が木屑で建築の眞似をやつたり、これを打壊したり、犬を追ふたり、木に登り附いたり、輪を廻したりするのは、成長して生産行爲をなし、勞動する時の用意であり、少女が人形を弄び、人形の代りに枕を弄ぶのは、母としての生活の爲にする本能的用意である。それ故に遊戯は、教育過程に於ける第一歩であると考へられ、遊戯は自然に與へられる能力を練習に於いて發展し、保存しようとするものである、と論ぜられるのである。

そしてこの説は、多くの人々によつて採用せられてゐる、けれども亦正鵠を得てゐるものではないと考へられる。何故ならばそれは遊戯が如何なる効果をば、人生に齎して來るかといふことを説明するものであつて、遊戯が如何なる原因によつて、起り來るやの説明をなすには、餘りに薄弱であるからである。

又、第四の加速度説は、高等なる生物の祖先が、ある一定様式の行爲を、久しきに亙り、且つ幾度か幾度か、それを繰返すことによつて、遂にその一定様式の行爲が、その生物に具有される本能と變じて來る。そしてこの本能がその世代を経るにつれて、個體に於ける發現の時期をば早めて來る、斯くしてその加速度の結果、その本能は必要に先だつて發現する。そして必要の生ずるに先立つて、あらはれた本能の發動が即ち遊戯である。従つてこの遊戯は、次に來るべき眞面目な必要のために働く所の行爲の準備豫習として、多大の效用を有するものであるといふ説である。

この説は反覆説及び生活豫習説を混合したものと考へられる。よしこの説の如く加速度的に本能が必要に先だつて現れて來るとしても、必要に先立つて本能を發現せしめるものが外に

なければならぬ。例へば犬に物を齧ると云ふ本能があり、加速度的に今それが小犬の必要に先立つて、即ち骨を齧る必要な内に現れて來ても、骨の代りに椅子の足を齧らしめる所のもの即ちその推進力がなければならぬ。そして私はここにそれが何であるかを問題の中心としてゐるにも拘らず、此説はそれを明かにしてゐない。

第五に優越本能説がある。そしてそれは、他にまさらむとする本能に基く行爲が、すべて遊戯であると斷言するものであつて、高田保馬博士の主張される所である。博士は、「……他人にまさらむとする本能が遊戯の一基礎であることだけは確である。グロオスも争闘の形をとることのできない遊戯は殆どないと云つてゐる。否、事實に於て、殆どすべての遊戯の少くとも一動機をなしてゐる。加速度の説でもつて説明ができぬ遊戯は、大抵この本能に基いて起るものと認め得られる。然らば、この本能に基く行爲は如何にして遊戯となるか、これは一考を要する。他にまさらむとする本能から出てくる行爲は眞面目でない。まさらむとする努力は生きむとする努力でないのである。強ひてまさらむとする事が甘くゆかうともゆくまいとも、それは決して生活の根柢を左右するには至らない。生の根本要求とは全然没交渉である。此點に於て

此本能から起る行爲は遊戯の一特質を有すると見なければならぬ。また、單に他人にまさりこえようとする事が目的であるから、行爲の一步一步が享樂の對象である。競馬をして居る馬を見ると、たえず他の馬よりも、先になりたいとあせつてゐる。刻々の過程が此馬の享樂の對象である。碁を打つてゐる人が親の死に目にもあはないのは、その刻々刻々が面白くてたまらぬ證據ではないか、即ちまさらむとする本能に基く行爲は遊戯の他の一特質、即ち過程の享樂と云ふことを有してゐる。要するにまさらむとする本能に出づる行爲は遊戯の二特質を有してゐる。即ちこれ遊戯である。本能の加速に基いて起る行爲即ち未だ當然の必要が起らないのに本能が表現したる行爲もまた、みな此性質を有する遊戯ではあるが、吾人はこれをしばらく閉却したい。そして、他人にまさらむとする本能に基く行爲はすべて遊戯であることを、ここに斷言しておけばよろしい。而して、マクドウガルは最も明晰にこの事を喝破して居る。まさらむとする欲望が參與すれば一切の活動は、みな遊戯の性質を有するにいたるものである」と説明される。

然しながら、他人に優越すると云ふことは、生存に有利である所から、それは常に快樂であ

り得るけれども、これと反對に他人に優越せられると云ふことは、生存するに不利である所から、常に不快である。今、二人が他人に優らんとする本能に基く行爲に出づる時には、その行爲の過程に於いて、一人は優つて快とするけれども、他は必ず劣つて不快とすることになる。故にこの劣れる者が、他人に優越せんとする本能が強烈であればあるほど、その不快の度を増大して來ることは當然であらねばならない。よし彼等が他にまさらんとする本能から、その遊戯に出發したとしても、その行爲の過程は、劣れる人々にとつては、決して享樂の對象とはなり得るものではない、だから或過程は、一人にとつては遊戯となり得るとしても、その相手方にとつてはそれは遊戯となり得ない。そのみではない、他人にまさらんとする本能によつて強制せられるその過程は、大なる苦痛に堪へ行かねばならぬことが多々あるのである。

然るに遊戯はその本質に於いて、行爲の過程そのものが享樂の對象であると云ふのであるから、まさらんとする欲望が參與すれば、一切の活動はみな遊戯の性質を有すると斷言することに、私は多少の危ぶみを感じざるを得ない。又博士は、他人にまさらむとする本能に基く行爲は、一切遊戯であると云はれてゐるけれども、その逆に遊戯は必ず他人にまさらむとする本能

から出でてゐるものであらうか？ と云ふ疑問がある。少女が人形を弄ぶ時、犬が椅子の足を齧る時、良寛が托鉢を終へて、鎮守の縁で鞠をつく時、彼等は誰に優らんとするのであるか？ そして又この他人に優らんとする願望は、生物總てに共通なる、自己保存、自己發展の欲望の一部をなすものであつて、博士が社會は大體に於いて、他人にまさらんとする競争であると云はれてゐる程に、生物の生活を一般に彩つてゐるものであり、従つて遂に博士をして、「社會生活は遊戯なり」と斷ぜしむる結果に到達せしめ、それより推論することが許されるならば、社會生活は不眞面目となり、生の根本要求と全然没交渉とならねばならなくなる。だから又私は、俄にこの説に左祖し得ない。そして寧ろ私は、この説によつて特にゲームの現象を、説明せんとする者である。

最後に私は第六説として、ボガルドウス或はドウーの如き、多因説を述べねばならない。然しそれは、更めて論評するまでもないことと思ふ。そこで私は、やはり羅馬時代より云ひ古されてゐた、餘剩勢力説に歸らねばならなくなる。思ふに、遊戯を呼び起して來るもの、遊戯をせずには居られないやうに人々をなさしめるもの、戯れると云ふ行爲の過程ではなく、活動その

ものをして享樂たらしめ、直接愉快の感じを享受せしめて来るもの、それは溢れ切つてゐるエネルギーである。だから遊戯はそのエネルギーの自發的氾濫である、と考へざるを得ないのである。

* Meyer, Ebbinghaus' Psychology, P. 106.

** 高田保馬『現代社會の諸研究』八一頁、

*** Bernard, Function to an Subjective Standard of Social Control, P. 18.

**** 高田保馬『同上』八七頁。

***** Giddings, Principles of Sociology, P. 116.

X

今ここに労働者がある。彼は終日工場に於いて、労働し、疲憊し、疲勞し切つてゐるとすれば、彼の欲するものは休息であり、睡眠であつて、遊戯ではない。然るに若しこの常に睡ることのほかに遊戯を欲しない労働者に、他人が快樂とする所の遊戯を奨めるならば、却つてそれ

は彼の苦痛を増加するのみである。然るに若しその労働時間を短縮し、仕事を容易にする時は、彼は次第に容易なる遊戯に興味を發見し、全く労働より解放せられて閑散階級に入込むで來ると、彼は今迄困難としてゐた力作に興味を有し、反對にその力作をなすことが抑制される時は、不快を感じ、遂にその苦痛に堪へ得ざるものとなつて來るのである。何故にかゝる變化を生じて來たか？ それはその初めに於いて、彼の器官が含有してゐるエネルギーを、悉く労働の爲に使用し盡してゐるからである。然るに労働時間の短縮によつて、幾分のエネルギーが過剩し、閑散階級になるに及んでは、その過剩の度がより甚しくなり、その流出を阻止する時には、却つてその官能を保存し、發展せしめることが出來なくなるから、そのエネルギーを發散せしめることが必要であり、それが如何なる方面に使用せられてゐても、その發散それ自身で快感を感じて來るのである。

然しながらこの説は、今迄次に述ぶるが如く非難されてゐた。そしてその一つは、成程充分に養分を取つて且つ疲勞してゐない人々は遊戯をやるが、然し或者は、例へばフットボールやベースボールの如く、又はテニスや、舞踊、繩飛びの如く、全く疲勞し切つてしまつてゐても、

その遊戯を繼續するではないか？ と云ふことである。だがそれは、遊戯が如何なる原因から発生したかと云ふ問に對して、過剰エネルギーよりと云ふ答を何等變更せしめる必要を感じしめない。フットボールも、舞踊も、繩飛びも、それをやると云ふことは、それ自身に於いても享樂となるには、——即ち他人に優つて名譽を得やうとか、それによつて賞品にありつき得やうとか云ふことではなく、——過剰エネルギーが蓄積せられてゐて、それが發散の道を求めた事に始まらねばならない。そして一旦始められた活動は、他に優らんとする欲望によつて刺戟されたり、其遊戯に固有なる規定、又は申合せによつて束縛せられたり、雪辱の念に驅られたり、又は性的欲求より、過剰エネルギーを悉く發散し盡して、今やその行動は苦痛となり、その活動を享樂することが出来なくなつて来るものではあるが、その時既にその活動は「遊戯」の性質を失つて、他の目的の爲にする「仕事」と變性されたものと考へらる可きである。

次にその非難の第二は、既に他の労働によつて疲勞し、殆ど過剰エネルギーがなくなつてゐるにも拘らず、遊戯を始める者があるではないか？ 例へば一日の労働に疲勞して歸つた労働者が、或は將棋を戦はし、或は尺八を奏するではないか？ 即ち遊戯には必ずしも過剰エネル

ギーのあることをば、必然的要件とはしてゐないと主張するのである。然しそれは再考さるべきである。若しその労働者が工場に於いて主として四肢を使用し、即ち筋内労働に従事して、そこに肉體的には疲態と疲勞とを來してゐたとしても、精神的には疲勞を來すことなく、終日充分なる精神的活動の餘地を發見し得なかつたとしたならば、其精神的器官に於いて未だ餘剰エネルギーが残存し、従つてそれが尙發散の道をば發見しようとする所に遊戯が起り、娛樂の欲求が感ぜられて來たものに外ならない。これと反對に彼が、圖書館に於いて或は研究所に於いて、終日精神的力作に従事してゐたとして、彼は其筋肉を動かすことなく、筋肉中にある餘剰エネルギーを使用し切ることが出来ないならば、其餘剰エネルギーは又彼をして散策をなさしめ、園藝にその樂を發見せしめることであらう。これを以てこれを觀るに、以上二つの非難は、却つて自個の深く考へざる所に、その非難を見出さねばならなくなる。

然らば私は進んで他の説をば批判して置かねばならない。先づ私は反覆説から考へる。パオラ・ロンプロゾーのいふが如く、子供より成人になるまでの心理的發展の過程が、野蠻人より未開人に、未開人より文明人に進むものとすれば、その精神的發達と生理的器官の成熟との程

度につれて、その餘剩エネルギーの發散形式が規定されるといふことは、洵に當然であり、そしてこの説は單にその關聯を説明してゐるに過ぎない。又生活豫習説は、器官が未だ本來の要を充すことの出来ない内に、幼稚であれば幼稚相當に、その器官の官能を遂行しようとする傾向を有して来る。それはその器官に餘剩したエネルギーがあるからである。そしてこの餘剩エネルギーの幼稚なる形式に於ける發散が繰返されることによつて、その器官は刺戟せられ、次第にその官能をば高級なるものに進展して来るのである。今この發達の過程を倒叙的に觀察すると、その發散形式が次の時代の生活の豫習に役立つたと云ふことに、それは外ならない。

加速度説も亦、單に必要に先だつて如何にして本能が生じて来るかを説明してゐるけれども、その本能をして發現せしめるものが何であるかに説明をば與へてゐない、そしてそれは矢張りこの餘剩エネルギーであると考へねばならない。又優越本能説に於いても、餘剩エネルギーがあるから、他にまさり得ると思ひ、より他にまさらんとするのであつて、遊戯を起さしむる第一因は實にこの餘剩エネルギーそのものであると考へねばならぬ。これと同時に、生物の行動

に於いては——精神的作用に於いても、肉體的作用に於いても——自然現象の如く情勢があり、又一旦遊戯として動き出すと、そこに幾多の他の動因が、混入して来るものである。然しこのエネルギーの餘剩がない時には、眞の意味の遊戯は發生しない、そしてその餘剩エネルギーが發散せしめられてゐる間、その行動そのものが愉快を感じ、それが發散し切つて了ふ時には、その同一形式の行動が、假令そのまゝ他の動因によつて繼續せられてゐても、その行動そのものは、最早決して純なる享樂の對象とはなり得ない、それは他の強制により、他の目的の爲にする仕事と變性して了ふのである。故に遊戯とは餘剩エネルギーをば發散せしめる活動そのものであつて、それが發散し切つた時に、即ちその活動が苦痛となるその瞬間までを意味するのである、だから遊戯は在內目的の爲になす自發的自由な行爲であると云はねばならぬと思ふ。

* 圖といふのは、生活現象を發現せしむる諸種の機能の中樞の集合である。つまり圖の中には色々の分局があつて、或は記憶、或は言語、或は文字、或は音楽、或は運動、或は感情、或は知覺、或は睡眠、或は食慾、或は性慾、其他あらゆる種類の高等、下等の中樞即ち分局があつて、各生活現象の一部分を分擔して居る。従つて或る仕事に頭を使つて没頭してゐても、その時圖全體が働いてゐる。

るわけではない。キンの一部の腦の中樞が働いてゐて、他の部分は休んでゐるのである。それで腦中して使つて居る腦の部分は疲勞しても、腦全局が疲勞するものではない。従つて一つの仕事に疲れた頭でも、又方面の異つた事に頭を使ふには一向に疲れを覺えないことが多い。それで頭を上手に使ふ人は一つの仕事に疲れを覺えたと、全く方面の異つた仕事に頭を突つ込んで少しも疲れを覺えない。(佐多芳久「腦の合理的な使ひ方」現代第十一卷第十號八五頁)

** Giddings, Principles of Sociology, P. 116.

x

却説。私は進んで、遊戯・生産行爲・勞働の三者の相關關係をも考察して置かうと思ふ。ヘイスは、多くの種類の仕事は遊戯となる、即ち仕事はこれを遊戯化することが出来る。例へば狩獵・漁魚・園藝・木工・科學的研究が、經濟的必要に迫られてゐない、人々によつてなされる時には、それは遊戯であると云つてゐる。然し私はこれを換言して、次の如く云ふ、若し人々が經

濟的必要——又は其他外部よりの強制——によつて、迫られてゐない時には活動をしない。唯この必要又は強制によらないで活動する場合は、器官内に氾濫せんとしてゐるエネルギーが、何等かの活動によつて發散しよう發散しようとする衝動を、器官の内部から與へる時にのみ起るのである。この衝動によつてなされ、他の目的又は強制を意識しない時には、それが假令仕事即ち生産行爲であつても、その活動は、それ自身に於いて享樂の對象であり、多分に遊戯的性質を帯びて來るのである。

そして若しこの餘剩エネルギーより來る内部的衝動をば、生産行爲に利用するならば、その行動は半遊戯的半仕事のものとなつて來るのである。だから人々は、この内部的衝動を利用することによつて、その活動をば享樂しながら、而もその過程に於いて生産をなすことが出来る、それ故に茲に問題となつて來るのは、如何にしてこの餘剩エネルギーを大にし、且つ能率高くそれをば使用して、勞働の負擔を人生より輕減するかを考察が、ここに望ましきものとなつて來るのである。

遊戯はその發動の形式に於いて自由である。従つてその器官が自個に最も好都合なる活動の

形式に出る。そして好都合なる活動とは、即ち自個の方法 (of own way)、自個の速度 (of own speed)、自個の律動 (its own rhythm) 即ち自由律動に於いて、その餘剰エネルギーを發散する爲の活動がなされ勝ちである。だからそれは自個に最も好都合であるだけ、最も愉快であり、自個自身の方法によつてゐるだけ、最もそのエネルギーの浪費を少くする譯となるのである。そして若しこの餘剰エネルギーより來る活動の衝動が高められて來る時には、人々はモーリッツの云ふが如く、跳躍的舞踏的運動に出で、それは自然速なる運動と緩なる運動との週期的交代制であり、それは快感を伴ふて來るのである。故に各個に固有なる律動による運動が、最も疲勞を少くする。例へば自個固有の歩調によつて散歩する時の一里の疲勞と、田舎より上京せし叔母の爲に見物の案内をする時の一里の疲勞とは、その度合に於いて、如何に叔母の律動に於いて歩行し、又はそれによつて自個固有の律動が混亂されたる時に、よりその疲勞が大であるかを知ることが出来る。

然しながら、近世産業組織を再び昔日のその如く、家内工業に逆轉し、勞働者をして自個の家庭に於いて、各自が自由に自個の律動に於いて、生産行爲に出でしむることは、今日他の

産業條件が斷じて許容し得ない所である。それ故にその一群の勞働者等が、各自に固有する律動に最も近き、即ち平均律動を發見して、その律動を以て規整的律動として、その規整的律動によつて生産行爲に出でしむる外はないのである。ここに亂調子である生産行爲又は勞働の律動化があり、そしてこの規整的律動によつて、一群の勞働者を支配し、その活動をして亂調に陥らしめず、秩序を保たしむる爲に、勞働歌を生じて來たのである。

勿論、前述の如く遊戯は簡單なる動作が、一定の調子の下に規則正しく繰返されてゐるから歓迎されてゐるのであるとは、一途に考へることは出来ない。然しながら、この律動化された作業によつて、餘剰エネルギーを経済的に使用し、それによつて、本來無律動的である勞働から生ぜしめられてゐた、その疲憊と疲勞とを、幾分でも軽減することだけは出来る筈である。だから又私は、この學說に對して、エロスを持たざるを得ない。

* Hayes, Introduction to The Study of Sociology, P. 365.

** Moritz, Deutsche Proseide, S. 23; Botton, Rhythm, P. 145; Spencer, First Principles, P. 183.

數の社會學

×
×
8
×
×

x

たゞ純粹なる思惟として、社會階級から何等の統制を受けてゐない、と普通に考へられてゐた數學も、その實社會の階級的構造によつて、明かにその階級性を反映してゐるものであるといふことは、數學史家のエム・カントール^{*}を俟つまでもなく、吾々に肯定され得ることである。そして私有財産制度が發達し、バビロン、エジプトに於いて、その土地をば分配する爲に幾何學が異常の進歩をなしたとげたが如く、その必要に迫られて數學的知識の發達を促進せしめて來た、といふことも亦吾々は認識することが出来る。

然らば數學的知識を發達せしめたる動機は、不當なる搾取をば拒否せんが爲であり、正當なる過不及なき、アリストートルの所謂分配上の正義を、支持するが爲に外ならなかつた。けれども亦數學的知識が發達して、數量に關する意識が人心の内に伸び、比較計量の思考作用が働きて出ると、人々はその數學的知識を逆用して、そこに不當なる利得を計算し出して來るのである。殊に吾々は各種の利子計算及び分配計算に於いて、その事實を一々指摘することが

出来る。そして若し人々の心に、この比較計量の知識が發達しないならば、彼等には搾取されたいふが如き意識が發達して來ないのみならず、他を搾取せんとするが如き意識も、亦發生し得ないからである。

それ故に彼等が共產社會の卵殻を破つて、私産社會の蛹體に入込んで來たといふことは、又人々に數學的知識が相當に發達して來たといふことを、左證するものでなければならぬ。だから又數學的知識と私有財産制度とは、相互に因果の關係にあつたと考へられ得るのである。茲に私は如何にしてその數の觀念が、人間に發生して來たかといふことに、關心を聚がざるを得なくなつた。

* M. Cantors, Vorlesungen über die Geschichte der Mathematik, 1907. I. Bd, S. 58—98.

** Aristotle, Die Ethik, V. Bd, Kap. V; Sidgwick, History of Ethics, P. 65.

x

大膽に私を言はしむるならば、人間の有する數の體系は、それを三つに分類することが

出来る。そして私は、それを「三進法」「四進法」「五進法」と名づけ得ると思ふ。勿論、野蠻未開人の發達しない脳髓を以てしては、抽象的に物を考へることは出来なかつた。彼等は彼等に最も近き、即ち彼等自らが具有してゐる所の指によつて、数の觀念を得て來たといふことは、殆ど總ての人類學者、民族心理學者、社會學者等によつて肯定されてゐる所である。デニケルの述べてゐるのによれば、多くの南亞米利加印度人、メキシコのカリブス人、テュピス人、オリノコのタマナカス人の如きは、指で數へ、手で數へ、足で數へるのである。そして彼等は五つの代りに、「一つの手」と呼び、十の代りに「二つの手」、十二の代りに「二つの手と二つの指」、十五の代りに「二つの手と一つの足」、二十の代りに「一人」と呼んでゐるのである。この名残を又吾々は羅馬の數字に於いて見出し得るのであつて、羅馬數字の五即ちVは、手の指を五本擴げて出したる繪をば簡略にしたる圖であり、十即ちXは、このVとAの和であることを、示してゐるものに外ならない。又漢字の十は、人が兩手をば左右に擴げて、直立してゐる象形であると云はれてゐる。

そしてダーウキンによれば、今猶四つ以上を數へることが出来ない多くの人種が、地球上に存在してゐると云はれ、デニケル及びブロー・スミスによれば、三つしか數へることの出来ない野蠻人がゐる、何故ならば、その野蠻人は三つ以上を意味する特別の文字を、有してゐないからであると速断するのは、それは多くの場合に於いて正しくはない。例へば、ヤハン・フェジー人は、「一〇 (Kauei)」、二〇 (Kombai)」、三〇 (Maten)」と五と三つの文字をさへ有してゐない。然し彼等は四つを「他の二〇」(Akokombai)といふからである。或オストラリヤの土人も亦このフェジー人と同様であり、そして彼等は進んで十二進法となつて行くのである。と反對論を述べてゐる。今、吾々が佛蘭西の數字の呼び方を、——佛蘭西人は七十と云はずして、「六十と十」(Soixante-dix)と呼び、八十と云はずして、「四つの二十」(Quatre-vingts)と云ひ、九十と云はずして、「四つの二十と十」(Quatre-vingt-dix)と云ふのに、——考へ合すならば、デニケルの主張も、吾々は決して無視することは出来ない。けれども全くその腦力が低級であつて、三つ又は四つを數へ得るのみであるといふ野蠻人の存在を、全然否定し去ることも出来ない。

* Bucharin, Theorie des historischen Materialismus, S. 189.

** Deniker, The Races of Man, P. 224.

*** Darwin, The Descent of Man, P. 222.

**** Brough Smyth, The Aborigines of Victoria, Vol. II. P. 3.

x

然らばこの野蠻未開人が、その指を如何に驅使して、その数をば計算したかといふことが、私の興味を呼んで来る。コナンはその著「数の概念」の中に、「子供は多く拇指から數へ始め、文明人の大人は小指から始め、野蠻人の多くは左手の小指から始め」と書き、「四歳から八歳までの小學校一年生の五つ組、即ち二百六人の中、百四十九人は拇指から始め、五十七人は小指から始めた」と報告してゐるのである。一體日本人は拇指から折り始め、西洋人は一般に先づ五指を握つて、小指から開き始めることによつて、數へ出す様である。前にも述べしが如く人智の未だ進まざる時代に於いては、總てそれは具體的でなければならぬ。だからその指も單に折り又は伸したことでだけでは、その計算は心もとないものがあらねばならない。だから彼等は、その指を一つ一つ他の手の指にておさへるか、又は同一の手の拇

指にておさへるかによつて計算する。子供は時によると、その手の指を開いて、唇に一本一本當てゝ見て計算する。それと同様に、今、野蠻人が棒を計算するか、それを手の指に一つ一つ當てゝ見て、五つある十あると計算する。ニュー・ギニアのムレー島の土人が、一つ(Nine)二つ(Two)の文字を有してゐるだけであつて、二つ以上は、それを倍加して進むといふ低級なる心理をさへ有してゐないから、彼等は身體の色々の部分を引合に出すことなしには、計算し得ない。彼等は左手の小指から數へ始め、他の四指を數へ、そして手頸、肘、腋の下、肩、鎖骨の上の凹み、胸へと數へ來り、次いで右手の小指より、又順次に鎖骨の上の凹みまでを數へ、それに足の十指をば加へることによつて、三十一までの數をかぞへ得るのである。そしてこの計算に際して、具體的引合せ物を求めるといふことは、文明の進むに従つて、手や足の代りに、小石、種子又は介殼を用ひ、それを小箱の中に一單位、例へば十とか、二十とかを入れて使用し出し、そしてそれは支那及びロシアに用ゐられてゐる、算盤の起原をなして來たのであつた。又、ペルー人の間に使用せられてゐる結目のある繩も、その計算器であり、種子又は介殼の一定數だけがつながれて計算器に使用され、後それは變じて頸飾りとなり、又は珠數となつて來

た例をも、吾々はその傍證として思ひ合せることが出来る。

* Conant, The Number Concept, Pp. 11-14.

** Chamberlain, The Child, A Study in the Evolution of Man, P. 316.

*** Deniker, *ibid.*, P. 224; Bucharin, *ibid.*, S. 189.

x

却説。この幼稚なる心の人々が、その指を數へるに際して、私は知らず知らず彼等が、その地理的環境即ちその大自然によつて、影響されてゐたことを發見せねばならない。そしてその地理的環境が、河によつて特色づけられてゐる地方に於いては、人々は、現在アマゾン河流域の森林地帯に生活してゐる土人が、拇指を以て、その同じき手の小指と薬指、薬指と中指、中指と人差指との股間を數へ、そして三つの數をば知るのみであるが如く、多くその河谷から來る暗示によつて、手の河谷即ち指の股をば數へあげて、「三進法」に出て來たのであつた。それ故に支那・印度・バビロン・エチプトの如き河の文明國に於いては、最初に發達したる計算方法

は、又この「三進法」であらねばならなかつた。彼等は三を知るのみであつたといふ過去の長き經驗によつて、「三」を以て最大數を表すに慣用してゐる。支那人はいふ、「白髮三千丈」と、又「賢愚の差三十里」と、或は「垂涎三尺」、「三令五申」、「三呼市に虎をなす」と、「三十六計不如逃」といひ、「三舍を避ける」といふ。又印度人は、「三千大千世界」と呼び、「三十三天」といふ。そしてその「三」たるや、唯多數を意味してゐるものに外ならない。

この「三進法」は二つの手によつて六つとなり、カルデヤ人及びバビロン人が六日間働いて、次の一日を「蠶の平和」となづけて安息し、七日を以て一週間とする制度をば作らしめて來た。然るに六の二倍は十二であり、そこに「十二進法」となつて來た。又この十二の二倍は二十四となり、一日は二十四分されて一時間となり、十二の五倍、或は六の十倍は六十であつて、一時間は六十分されて一分となり、一分は六十分されて一秒となつた。そしてプレステッドによれば、數のスメリアン・システムは十を單位とするものでなくつて、六十を單位とするものである。だから圓周は六十の六倍、三百六十度を以て割られ、六十秒を以て一分、六十分を以て一時間とされた。又その重量の單位はミナ(Mina)と呼ばれ、それは六十シケル(Shekel)に

相當した、そしてこの「三進法」の進展したものに外ならない。そしてフンボルト及びビドラベルの説によるならば、バビロン人は零(Zero)以外の文字を有してゐた、けれどもそれは肥沃なる印度人の脳味噌から出てバビロン人に傳來されたものであるさうである。

要するに私は、これ等の事實よりして、河の文明が、その河谷よりの暗示によつて、「三進法」をば發生せしめたといふことを、左證せんとする者である。

* Conant, *ibid.*, P. 7.

** H. W. Van Loon, *Ancient Man*, P. 146.

*** Breasted, *Survey of the Ancient World*, P. 61.

**** Humboldt, *Kosmos*, Vol. II, S. 288—90; Draper, *History of the Conflict between Religion and Science*, P. 14.

x

然らば「四進法」は、如何にして發生して來たかといふに、それは山岳を以て四圍されてゐる高原地に於いて、發生して來たといふことが出来る。殊に私がこの「四進法」に深き興味を感ずるのは、この四進法が、我が日本民族に固有なる算法であつて、寡聞にして、世界の他のいづれの民族に於いても、發見し得ないものであるからである。日本民族は古事記に於いて語られてゐるが如く、高天ヶ原をその發祥地となしてゐる。論者の或者は、それをメソポタミア平原の上部、即ちチグリス・ユーフラテスの水源地、今日のハラン以北高原地を以て、高天ヶ原に擬し、豊葦原の水穂の國をメソポタミア平原なりと主張してゐる。私は茲にその主張の當否を論断しやうとする者ではない。然し唯「高天ヶ原」とは、平原地より見て、常に雲に蔽はれてゐる高原地である、といふことだけは云ひ得るであらう。この高原人はその高原を圍ぐつてゐる山岳の高峰より來る暗示によつて、河の文明が指と指との股間を數へしめたと反對に、指頭にその關心を集め、拇指を以て同じい手の小指の頭をおさへて「二つ」、薬指の頭をおさへて「三つ」、中指、人差指にて「三つ」「四つ」と數へ出さしめたのであつた。それ故に彼等は、左右の兩手を以て、「八つ」を數へ得るのみであつて、長い世代の間彼等は「八つ」以上を數へ

得なかつたであらう。新しくして彼等の、即ち日本民族の思想の中には、「八つ」によつて、「最大數」或は「澤山」といふ觀念を、包有せしめられるに至つたのであつた。そして吾々日本人の言葉の中に、その例證として幾多のものを擧げ得るのである。

今、その中數語を拾ひ上げるならば、八百萬の神達、八十伴男、八性、八景、八道、八重垣作るその八重垣、八十島、八重の潮路、八針にとりさき、八つ裂き、八幡知らず、數(八生)、奴(八つ子)、やくさもの(八草者)、やくこしい、やかましい、八百屋、八百八町、噓八百、四百四病、四苦八苦、七轉八倒といふが如く、この「八」は「多數」又は「無數」を意味してゐたと共に、「八たがらす」「八たのかどみ」「十六の菊の御紋章」といふが如く、又その標準數とさへされてゐたのを、吾々は見出すことが出来るであらう。だから私は、高原文明と「四進法」又は「八進法」との関係より、日本固有の文明として、この「四進法」を主張せねばならない。

x

最後に「五進法」又は「十進法」は、それはアラビヤ・システムと云はれてゐるが如く、アラ

ビヤの砂漠の中に於いて發生した。社會學者のウオードによれば、それは多分東方から受繼いだ後多少改良されたものであらうが、それは實に模範的恆久的人間功業である、と激賞してゐるが如く、今日、この「十進法」は、「三進法」及び「四進法」をば壓倒して、世界にその覇を唱へて來たのであつた。

私は、この「五進法」又は「十進法」と砂漠文明との關係を考察する。砂漠人はその計算をなす時に、砂上に腰を下して、先づその手を砂上につく、さうすると砂上にその手型が印せられる、彼等はその手型の指を一つ二つと數へ出して來る。それ故彼等は「五進法」となり、「十進法」となるのである。そして「四捨五入」の法則の如きも、亦この「五進法」より來たものと考へられる。

何故ならば、彼等は、五即ち一つの手に充たざるものは、足らざるものとして、その價値をば認めず、五となるや一つの手としてその價値を認め、且つ記憶して來たからであらう。又そこに五十錢と四十九錢九厘とが比較され、一圓と九十九錢九厘とが比較するならば、その差の僅か一厘であるにも拘らず、餘程の相違を吾々が心の中に感ずるのも、必ずやこの「十進法」

より來たる影響であらねばならぬと思ふ。だから又その数の觀念に於いてさへも、吾々は階級の閃めきを見ねばならぬ。

* Dealey & Ward, Text-book of Sociology, P. 38.

エロ・グロの社会学

x x 9 x x

X

一體、何が最もエロであるか？

それは屢々繰返されて、而も未だ容易に解答され得ない質問である。そこで今私はそれを、私の心に密かに問ひかけて見ることにしよう。

それはモガの持つ脚線美であるか？

それとも黒い薄い絹靴下のしたに、ほんのりと霞み出してゐる、曙色の肌の認識であるか？
又、それは足であるか？

或若き詩人が、かたくと三越の二階に登り行く白き婦人の素足に、限りなき悦樂と愛着とを覚え、彼は忘れんとしては、却つてその足の印象を心に強めて行つた。遂に彼はその婦人と、否、その足と結婚することなしには、その幻想中毒をば醫すことが出来なかつた。そして彼は、唯その足の故にその婦人と結婚した、と云はれてゐる。

成程、吾々は歌麿のエロをば、黒塗の足駄に磨きあげられたる白き足の色と曲線とに見出し、

春信のエロをば、その襪を襲ひ來る一陣の突風に、そして又その襪さばきに瞥見され行く美しき脛に見出すことであらう。

でもそれはまだエロの最なるものではない。では腰纏まで裂けたる夜會服、そしてその背の肉のどよめきに？ 乳房のカーブに、百尺竿頭一步的に考へて、では全裸體に？ 又は爛熱せる情事に？ 否、それは三助君の嘆息に値し、やりて婆の苦微笑を膾ふに足るのみである。時としてそれは寧ろ醜惡そのものであり、吾々をして目を蔽はしめ、嘔吐を催せしめるに過ぎない。

エロは矢張りその本質に於いてエロス(Eros)である。幻想であり、空想である。その空想の自由さであり、奔放さである。彼はどんなに密閉されたる閨房の中にでも、その聯想の鍵穴から闖入して行く、細い細い毛細管のなかまでも煙の如くひたつて行く、そしてそこに吾々を魅惑する神祕の阿片性がある。

だから明らさまなる暴露のもつエロは、決して永遠性をもたない、吾々はそれを産科婦人科の醫師の告白に就いて聞くことが出来る。カジノ・ド・パリに於いてムーラン・ルーチーに於いて、ステーチー真下のプレミア附きの座席にしがみつきなながら、半裸體なるダンサーの薄き

短いスカートが、風車の如く舞ひ上る、その瞬間に感ずるイットで、人々は自分の服装を鑑賞し、そのカクテルで十分興奮し、十分に酣醉を買ふことが出来る。

x

嘗てT博士が學生に「如何なる偉人に對しても氣腫れせざる法、如何なる美人に對しても参らざる法」を傳授された。そしてそれは、「今、總理大臣が威儀堂々としてやつて來るとする。そして諸君が何となくその氣に壓せられ、その人が正視し得ないまぶしさを感じたとする。然しその場合には、總理大臣が大便所にある様を想像することである。例へば濱口雄幸氏が、ライオンと云はれてゐる嚴肅犖犖なる顔をして、今將に脱糞せんとしてゐる様の如何にグロテスクであるかを、聯想することである。

まア待ち給へ、美人に参らざる法も、美人脱糞の圖かつて？ いやそれは違ふ。若し諸君が美しい女を見て、その心が怪しく動搖しかけたなら、その目、その眸を見てはならぬ、その鼻を凝視することである、如何なる美人でも、その鼻を凝視してゐる中に、きつと諸君は厭やになつて了ふ、それでもまだ厭やにならなかつたなら、今度は、そのいづれかの耳を凝視することである。さうするならば請合つて、その女が厭やになつて了ふ、何故だつて？ 何故だか知らぬ、が然しそれは長く繰返された體験から來た眞理である」といふことであつた。

成程、その鼻を凝視する時には、どんな美人の鼻でも、百パーセントの美を支持し得てゐる者のないのに、私は驚愕せねばならなかつた。或歴史家が、「若しクレオパトラの鼻が少しでも低かつたなら、或は又高かつたなら、羅馬史以後の歴史は全部書き更へねばならない」といふ。こと程左様に鼻は、その美貌に於いて重大性を有してゐる。

だから婦人は、先天的に本能的にそれをば意得してゐるらしい、あらゆる婦人は多くの場合に於いて、その鼻をばかくさうとしてゐる。故に私は、クレオパトラが、シーザーを魅惑し、アントニーを溺惑せしめた、その最初の瞥見が持つてゐたイットは、あの黒曜石の様な黒くうるんだ大きな眸から、火花の如くほとばしり出た秋波の銀箭であつたに違ひない、そしてその場合彼女は、その鼻をば駝鳥の羽毛の扇子で蔽うてゐた、と確信する。

X

今、世界に廣くそのエロを求めて彷徨した人々に、「何處に於いて君は、その優なる者を見出し得たか」を問ふならば、彼は口もとに思ひ出の微笑を浮べて、「それは多分カイロだらうね、素敵の目だね、放たれる秋波には心臓の鼓動も止まる思ひがする、それから何と言つても西班牙の女だね、そしてベニスの方も忘れがたいね」と確言するであらう。そこに私はヴェールにより、シヨールによつてかくされたる鼻と、眸の光り鋭き目をば發見せねばならない。

銀座街頭を行く女、彼女も亦そのシヨールで、その鼻を蔽ふことを忘れはしないであらう。劇場で會つた彼女、彼女は又その鼻を小さき銀色の扇子で隠してゐたことであらう。彼女が君に恥ぢらひながら近づいて來た時に、彼女はハンカチーフでその鼻から口を蔽うて、目で物を言はせなかつたか？ 長き振袖で顔を隠して、上目氣味に投げかけられた視線に、君は幾度もどきまぎしなかつたか？ そしてそれは、眸の動搖瞥見性、その動搖性による把持困却性、その困却性をば補足する所の幻想性、その幻想性によるエロであらねばならない。

全く一絲を纏はざる裸體婦人によつてのみ、其サーピスがやられ、金貨はさみ、タバコ・ダンスの嬌態が演ぜられ、トイチハイチが観覽に供されてゐる、バリモンマルトの地下室にあるSカフェーで、何等のエロを感じなかつたMが、彼の言葉によれば、「いや、全く最敬禮して「了つた」彼が、夕暗迫る濃きプラタンの葉蔭に佇む街の女に、何故か甚だしいエロを感じ出して來た、「だから自分で自分の心が解らなくなつた」とMは云ふ。故に私は再び云ふ、本當のエロは幻想性によるものでなければならぬ——と。従つてエロは、吾々に幻想性を與へ得る餘裕を具有してゐなければならぬ。そしてその幻想性を與へ得る餘裕と空疎とは、すべて明らかであつてはならない、だからそれは瞥見性、動搖性、朦朧性を屬性としてゐなければならぬ。ぬうと前に投出されたる絹靴下の脚線美よりも、襪さばきによつて、チラ／＼と瞥見される白き脛に、何故に吾々はよりエロ氣分を多く感受し得るか？ 貴婦人が自動車より下りるその瞬間に瞥見する、バラ色のベテコートに、何故に多大の關心を人々は持つか？ そしてそれをば盗み見んとして、ミュージク・ホール前のカフェーで、夕刻の二時間も三時間も、一杯のカフェー・ノワールを翫めながら、根氣よく群衆が蟻集してゐるか!! ダンス・ホールにならぶ露骨平

ヤマン製の椅子、その上に薄物を纏ふたダンサーが居並んでゐる、電燈のスイッチが切替へられて、暗黒となり、天井のみが薄プロシヤ藍色に照明されてゐる、その時、突如としてそのギヤマン製の椅子の中に、燦然として百燭光が點燈される、ゼリーに包まれたる花の如く、薄物の中に浮ぶ脚、ふとも、腰部、胸の曲線、それは夢の世界であり、幻の國である。音楽につれて立ち上る彼女等、パッと變る眞紅の照明、幻の如く肉體は消え失せて行く、その瞬間に見し夢を追ふて、人々は踊りの渦に巻込まれて行くのであつた。だからそれ等のエロは、多分それは、その瞥見性、即ち十分なる認識を持ち得ないといふことによつて、却つて充分なる聯想を逞しくし、あられもなき妄想を描き出し得るからであらう。

x

プラトイが、そのエロスの哲學に於いて述べてゐるが如く、人はその想像によつて、天國にある完全なる従つて美そのものであるイデーを、見ることが出来るからである。君は嘗て婦人の後姿によつて、幾多の素敵なる美人を發見し得たかを、今、考へ合せて見る必要がある。何

故にその後姿によつてのみ美人を發見し得たか？ それは想像の加味せられたる美人であり、イデーによつてモデファイされた美人であるからである。従つて又君は、君のエロスを彼女の後姿に投影してゐるからである。そして若し君がその婦人を追越しさまに振り返り見るならば、殆ど常に失望し、そのエロスをば無茶苦茶にし、暴露の悲哀を味はねばならない、そしてそれは想像の餘地なき現實に直面したからである。

今、最も動搖性のあるものを求めるならば、それは眸であり、視線である。だから吾々は、それに最も強きエロを感じ得るのである。具體的なるそして暴露的なるエロ、それは下級なる無技巧的なエロであり、原始的な野蠻的なエロであらねばならない。

然しながら現代人の心は焦つてゐる、より強烈なる、より弾猛なる刺激を食ひ求めてゐる。その結果、人々は變態的になり、餘りに獵奇的となり、色情狂的となり、變態性慾的となり、獸的となつて來た。又近代の後期資本主義は、このエロをば職業化し、營利化して來た。そこにカフェーがあり、バーがあり、ミュージク・ホールがあり、ダンス・ホールがある。カジノ・フォーリーがあり、ホテル・キヨウーがあり、MS俱樂部のどきがあり、3T俱樂部の暗室亂踏が

ある。新しくしてこの恐るべきエロは、其強度を加速度的に限りなく増大して來るのであつた。然るに他方近代人の神經組織は、その文化の發展に伴ふて複雑となり、従つて又フェブルとなつて來たのであつた。それ故に彼等は、飽くことなくより強烈なるエロをば求めながらも、その昏倒に値する醜惡さ、冷汗背に流るるの殘酷さをば、敏感にして狂ひ易き彼等の神經組織の爲に忌避せねばならず、猶又彼等の心の中に未だ殘存してゐる傳統的な道德意識の反響に、それは遭遇せねばならない。だから近代人は、今、そのエロの醜惡なる變態性慾性をば、何等かの方策によつて、その刺戟の強度を減ずることなしに、オブライト包みとなし、その不倫性、その背徳性をカモフラージュするの必要を痛感せざるを得ない。そこに近代人の狡猾さがある、そしてこの狡猾さは、近代社會に於けるナンセンスと、駄じやれと、更に進んではグロテスクとを高調せしめて來たのであつた。故にそのエロの強烈さは、必ずやグロテスクの期間性によつて、オブライト包とされねばならない、ここにエロとグロとの相關必然の關係が發見されるのである。

x

人々の心に未だ羞恥の感じが殘存されてゐる場合に、彼はその羞恥をば如何にかして瞞着せんとする。彼は酒によつて、その聖苦しさをば胡麻化さんとすると同様の心理的欲求によつて、この恐るべきエロをば滑稽化し、道化化して、その羞恥感をば麻痺し、人間の傳統的道德性に一服のモヒをば盛らんとするのである。

そして昔時、原始人が洞窟の岩壁に描いた所の、人間と動物とが、木葉形の唐草模様になつて、あられもなき狂態を演じながら、まつはりついてゐる奇怪な變態性慾畫に、その語原を發して來たグロテスクが、今日再び強烈なるエロの享樂をば、現代人に投與する心のオブライトとなつて來たといふことは、私の「社會過程の螺旋循環説」からするも、亦興味あることではなればならない。

一體グロテスクは、「誇張による虚偽」をその本質としてゐる。そして餘りに甚だしき誇張は、その虚偽をば自ら明らかにすることによつて、却つて吾々に笑と愛嬌とを感ぜしめるもので

ある。そのみではない、餘りに甚しき誇張は、必ず總てのものをば不調和となし、それに固有である觀念を裏切らしめ、心に先走つて來るイデーに、拍子抜けのしたる幻滅を感ぜしめ、そしてそこに生ずる急激なる心の轉輪によつて、哄笑を勃發せしめて來るのである。吾々は幾度か顔の總てが鼻であつた人々に對して、グロテスクを感じたか？ 又巨大なる口によつて顔の下半部が占有されてゐる婦人に、野人譚を知らざるの悲しみを、自ら持たねばならなかつたかと思ひ合せて見なければならぬ。斯くしてその不調和は、遂にその極に於いて醜惡となり、更に進んでは惡魔的となつて來るのである。だからウイールヘルム・ミチエルは、「人間は恐怖に於いて逸樂を求めのみならず、又グロテスクに於いても享樂を求めることが出来る」と主張し、藝術に於ける惡魔性とグロテスクをば探究したのであつた。

諸君が彼女に言寄らんとした時に、諸君はその表現を故意に誇張しはしなかつたか？ そしてその餘りの誇張は、或は彼女の斷然たる反對意志表示に遭遇せし時に、「なに常談だよ」と、逃げをうたんだが爲の目論見ではなかつたか？ そこに又近代人の狡猾さがある。グロテスクの惡魔性への誇張も亦、近代人のこのするさからである。強烈なる變態性的な、そして洵に目

を蔽ふに足る醜惡さを、惡魔の仕業として是認し、そのサチズムを怪獸の戯れとして笑ひ、輕蔑しながらも、而も彼は心ひそかに、そのエロチズムをば滿喫せんとするのである。フェブルな従つて卑怯な近代人は、最早グロによつてそのエロをば滿着することなしには、そして又その滿着によつて幻想性を高めることなしには、それをば充分に享樂し得なくなつてゐる。だから吾々は、あらゆる現代社會の諸相に於いて、エロとグロとの二人三脚の怪しき足取りを、見なければならなくなつたのであると思ふ。

耐久競争狂の心理

x
x
10
x
x

x

文化は幾何級数的に進展する、吾々はその非常なる加速度に驚愕せざるを得ない。今この社会進化の最も著しい姿の一つを考へて見るならば、それは確に人間が自然を征服し、宇宙を自家樂籠中のものとなしつゝある姿であり、それは又時間と空間とを克服するといふことに外ならないと思ふ。そして時間といふ觀念は、一つの空間が、他の空間に對して與へる所の抵抗の感じから構成されて來るものであるから、若し人間が空間の與へてゐる所の抵抗の感じをより弱め得るならば、時間と同時に空間をも征服し得ることになるのである。そして人間がこの時間と空間とを日に日に征服して行くといふことは、その住む所の地球をば、日に日に縮少して行くといふ結果を齎すのみならず、その反面に於いては、日に日に偉大となり行く自己を、相對的に意識して來ることになるのである。

x

而もその加速度たるや餘りに意外である、一九〇三年十二月十七日、ライト兄弟が自作の十二馬力複葉飛行機に乗じて、五十八秒間、八百五十呎を飛行したことにさへ驚愕したる人間は、僅四半世紀後の今日に於いて、一気に太平洋を横断せんとする企圖が實行されやうとは、洵に夢想だにもなし得なかつたことであらう。又一八九六年伊人マルコニーによつてなされたる、パリ倫敦間の無線電信の成功に驚異した吾々は、今日、寝ながらにして、米國大統領フウバー氏の聲を耳にし、本所深川の労働者が、その棟割長屋の壁を隔てて、英國労働内閣の首相マクドナルド君の獅子吼を聞くに至らうとは、眞眞の電送、テレビジョン、トーキー、その迅速なる發達、實に揣摩端倪すべからざるものがあるのである。希臘神話に、自己の偉大さに自惚れたる四肢四足の人間が、造物主たるツオエスの神を征服せんと企圖したが權に、人間たるも又今日自己の偉大さに自惚れざるを得ない情勢となつて來たのであつた。

x

今ここに私はこの人間が自惚れ來つた過程の一例を、藝術の流れに沿ふて跡づけて見よう。

例へば社會學者のウォードのいふ處によると、野蠻人は非常に小さい南京玉とか、珠數玉とか、又はメタルだとかいふもののみ、その美を感じてゐたものであつたが、大自然の風景、例へば山岳とか、大森林とか、砂漠・氷河・大洋とかいふが如きものに對しては、少しも美を感じ得ないのみならず、寧ろ甚だしき恐怖を感じてゐたのであつた。今日に於いては何千億弗の價値として評價されるであらうが、ハドソン河の河口に介在する紐育市の一島を、アメリカ・インディアンの酋長が、南京玉一袋で和蘭人と交換し、そしてその酋長は、赤白黄色とりどりの小玉を身に飾りつけて、それで満足して了つたと傳へられてゐるが様に、野蠻未開人と文明人との間には、その美的觀念に於いて非常の隔たりがあるのである。

又彼のヴントによると、野蠻人は左右對になつてゐるもの、即ちシムメトリカルのものにのみ美を感じてゐる、だから野蠻人の美術品は、悉くシムメトリカルな模様を持つてゐるのである、そして唯彼等は例外として、遠くのシムメトリカルな山——たとへば富士山の如きものに對しては、恐怖の外にその美を感じ得るのであつた、しかるに人智の進むに従つて、小さなものより、次第に大きなものにと、その美の對象が移動して、人々は草木とか、動物とかの形

體彩色に美を感じ、ギリシヤ時代になるに及んで、漸く人々は、自己の身體の有する肉體美・筋肉美を感じ出して來たのであつた。なるほどギリシヤ時代より以前のエチプト時代にも、極く單純ながら風景畫はあつたが、それは多く動物又は人物畫の單なる背景として、その動物又は人物の美を高調するが爲に過ぎなかつたし、中世に於ける宗教畫の背景をなしてゐる自然の風景も亦、その意味以上に出づるものではなかつた。

ルネサンスを経て近代に至るや、やうやく人々は自然の風景にその美を發見し、殊に最近世に至るや、その長い間の美の條件であつたシムメトリカルを解消するのみではなく、その調和をさへも無視して、亂調子なる荒蕪たる風景より、絶大なる美を發掘するに至つたのであつた。

斯くして風景畫は、その存在の意義をば美術界に持つ様になつたのであるといふのである。だから人々が進歩するにつれて、會ては恐怖措く能はざるものであつた。山岳・森林・砂漠・大洋までもが、美の對象として次第に人間に好愛されるに至つたのであつた。そしてそれは今更説明するまでもなく、次第に人間が自己の偉大さを暗々裡に於いてさへも、意識して來たといふことでなければならぬ。人間は自己の偉大さに目醒め、益々その能力の迅速なる伸長に

自惚れ出して来るや、恐怖せる物は好愛される物と變じ、敬遠してゐた物はやがて玩弄される物となつて来るのである。

* Ward, Pure Sociology, PP. 431-5.

** Wundt, Volkerpsychologie, Bd. II, Th. I, S. 278-81: 拙著「社會學入門」三一八頁。

X

又人間には、自己の偉大さを知らんとする焦慮がある。賤が乙女はその美しき姿を、幾度か幾度か小沼の水面に映し見て莞爾たりしことがあつたであらう。又街頭を濶歩し行くモボは、反射運動的に理髪店の鏡に、デパートのショーウインドの厚硝子に映る、スマートなる自分の姿を覗き込むことをば、決して忘れはしなかつたであらう。電車の中で、又劇場で、或は喫茶店で、幾度も幾度も、そのハンド・バックを開いては鏡を見、コンパクトを開いては、その鼻頭に白粉をたくきつけながら鏡を見るモガを、吾々は近代風景の一つとして忘れることが出来な

い如くに、人間には自己の美點を知り、それを認識することに、絶えざる享樂をば感受しよう

とする本能がある。だから人間が自然に對して有する自己の征服力に目醒め、自己の偉大さに自惚れ出して来ると、然らば人間は「如何に偉大であるか」の極限をば、知らんと焦心して来るのである。そしてこの試験の爲めに登山熱が起り、探險熱が起り、各種の耐久競争熱が起り、煙突の英雄が飛出すに至つたのであつた。

昔時の登山熱は、神明の住家たる山に禱る爲めであつた、山岳を畏懼し崇拜して、その登山によつて、自己の六根清淨たることをば證明せんが爲めの修驗道であり、宗教熱からであつた。然るに今日のモダン登山熱は、自然の偉大さを征服して、人間の偉大さを證明立てんが爲のテスト慾からである。二萬九千呎のエヴェレスト峰そも何物ぞ、二萬四千三百四十呎のジンソン峰何する物ぞ、カンチエンジュンガ何物ぞやといふ、古人をしてその不遜、その傲慢に呆れしむる所の山岳征服慾からであり、自然を冒瀆することによる自己優越感の追求からである。だから又近時に於いて、その登山熱は、雪中スキーによる登山熱へと進展して来た、白皚々たる天地、猛然たる吹雪、巨浪の如き雪崩、その間を縫ふて大自然のカンパスに描かれ行くカーブの雄大さ……、そして又そこに吾々は、幾多の犠牲者を思ひ浮べることが出来る、然しその犠牲

者を思ひ浮べることが出来れば出来る程、近代人は、ヴァージンなる雪の山岳へと、吾先にその足跡を印しようとする熱狂して来るのである。

探検熱又然りである、北極に南極に吾々人類は、如何に多くの探検者をば永遠に見送つたか？昔時の探検熱たるや、多くは直接経済的發見を目的としてゐたのに反して、近代的探検熱たるや、人間の偉力を確證することを以て、その直接目的としてゐるのである、そして一般大衆は、彼等より出で来りたるそのチャンピオンがなす所を通して、人間の——延いては自己の——偉大さに興奮する者となつて来たのであつた。

x

又現代の尖端を行くものは、各種の耐久競争である、そしてこの耐久競争熱たるや、今や耐久競争狂へと變質して来た、私の知る範囲内では、この耐久競争たるや、飛行機の飛行能力のテストから始められた。滞空レコード五十二時間は次第にせり上げられて、ジャクソン・オブラインの六百四十七時間二十八分三十秒となつて来た。そこで人類はその飛行機の能力より

も、寧ろ繼續的に飛行し得る人間の能力に驚愕し、そしてその持續力に誇りをば感じ出して来たと同時に、その極限をば知りたいと思つて来たのであつた。

斯くして飛行機の滞空競争は、木登りによる滞空競争を誘發して来た、セントルイスのクレアレンス・スミスといふ青年とアーサー・クイックといふ少年とが、楓の樹の上で滞空競争を案出して、二百十四時間のレコードを作るまでに頑張り出し、一世にその名聲をば博し出すと、デトロイト市のエヴァン・ハリスといふ十三歳の少年は、理髪屋の小僧と樹上の耐久競争に出で、樹上で散髪までやり出した。そして新聞はそのレコード破りに對して、多額の懸賞金をばかけ遂に百七十二時間の滞空レコードの後、その競争は少年の勝に歸したが、四百九十六時間といふ樹上滞空の超レコードを作り、母親から食物をば受取るはずみに墜落死亡した。このショックは、却つて全市民をして、滞空競争に熱狂せしめ出し、斯くして公園の木は、一時悪意鈴なりの盛況を呈するに至り、そして滞空の競争は、進んで各種の耐久競争となつて来た。そこに古き自轉車の耐久乗り比べがやられ、ダンスの耐久競争がやられ出して来た。そしてそれは單にダンス・ホールに於いてなされる耐久レコードの競争のみでは、最早人々を満足せ